

長崎県文化財調査報告書 第217集

都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

V

# 竹 松 遺 跡

2 0 1 9

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書 第217集

都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

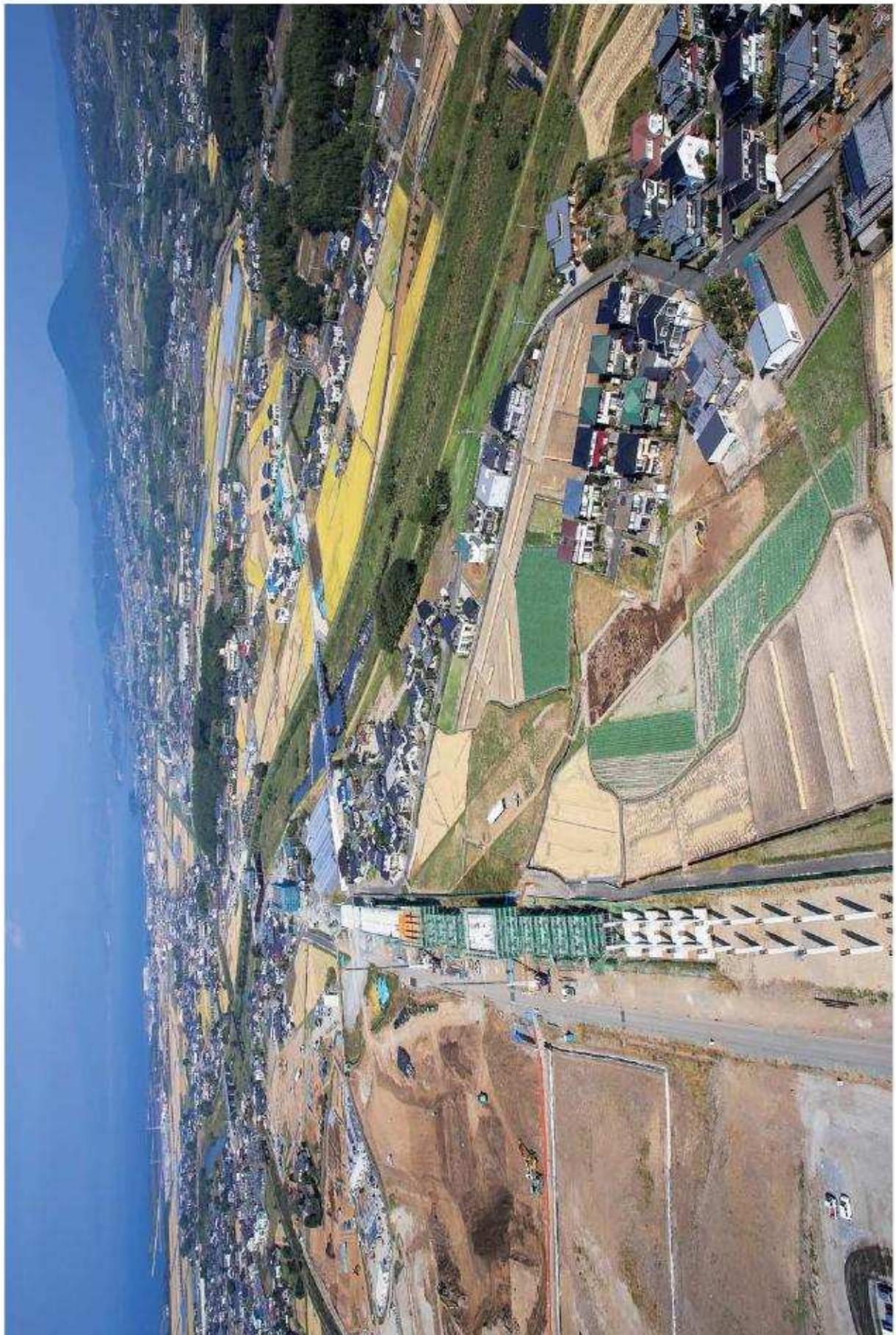
V

たけ まつ  
**竹 松 遺 跡**

2 0 1 9

長崎県教育委員会

卷頭カラー1 調査区遠景(南から大村湾を望む)





卷頭カラー2 B区遺構検出状況①(北から)



卷頭カラー3 B区遺構検出状況②(右が北)

## 発刊にあたって

本書は、都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴って実施された、大村市竹松遺跡の発掘調査報告書です。

竹松遺跡は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴って、10万m<sup>2</sup>以上の大規模な発掘調査が行われており、縄文時代から中世まで連綿と営まれた大規模な遺跡であったことが判明しています。今回は、新幹線車両基地の東側に隣接する都市計画道路建設予定地の調査報告です。

調査では、中世から近世にかけての自然流路や溝状遺構、墓地、水田遺構のほか、古代末から中世にかけての掘立柱建物群が見つかりました。また、土師器をはじめとした日常容器のほか、越州窯系青磁の水注など珍しい貿易陶磁も出土し、当時の暮らしづくりがうかがえます。掘立柱建物群については、平成27年12月20日に現地説明会を開催し、250名の方々に見学していただきました。本書を通して、地域の文化財や歴史の一端を知る材料となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を支援していただいた株式会社埋蔵文化財サポートシステム、扇精光コンサルタンツ株式会社、厳しい暑さと寒さの中で発掘調査に従事された作業員の皆様、さまざまな形でご支援いただいた大村市教育委員会をはじめ、関係者の方々に御礼申し上げまして、刊行の挨拶といたします。

平成31年3月

長崎県教育委員会教育長

池 松 誠 二

## 例　　言

1. 本書は、都市計画道路池田沖田線街路改築工事(事業主体：長崎県県央振興局)に伴って実施した、長崎県大村市沖田町135番地1他に所在する竹松遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が主体となり、竹松遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体株式会社埋蔵文化財サポートシステム・扇精光コンサルタンツ株式会社の支援を得て行った。調査期間は以下のとおりである。

範囲確認調査 平成26年11月10日～平成27年1月8日

本　調　査 平成27年5月28日～平成28年2月18日

整　理　作　業 平成28年2月19日～平成31年1月18日

なお、調査組織については、本文中に記載した。

3. 遺跡調査番号はTAK201504である。

4. 遺構及び土層実測は、中尾篤志・小松義博・株式会社埋蔵文化財サポートシステム・扇精光コンサルタンツ株式会社が行った。また、遺構及び土層の写真撮影は中尾・小松が行った。

5. 遺物実測及びトレースは中尾が行った。また、遺物の写真撮影及び補正、レイアウトは中尾が行った。

6. 墓坑及び竪穴住居跡から出土した炭化物の年代測定を、株式会社古環境研究所に委託した。

7. 本書の執筆および編集は、中尾が行った。

8. 本書で用いた座標は、全て世界測地系である。また方位は全て座標北である。

9. 本書に掲載した遺構の縮尺は400分の1、250分の1、200分の1、100分の1、80分の1、40分の1、遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器は3分の1、4分の1、石器・石製品、ガラス製品、金属器は1分の1、3分の2、2分の1、6分の1で掲載した。

10. 記録類及び出土遺物は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所で保管している。

11. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

柵列：SA 挖立柱建物：SB 竪穴住居跡：SC 溝状遺構・自然流路：SD 土坑：SK 水田畦畔：SN ピット：SP

石列：SS 墓：ST 遺物集積：SU 石積遺構：SW 不明遺構：SX 旧河川：NR

なお、遺構内に構築された副次的な遺構については、「主たる遺構名-副次的な遺構名」と表記した。例えば、竪穴建物跡の主柱穴は「SC○-SP○」、溝内の集石遺構・石列遺構は「SD○-SS○」と表記した。

12. 発掘調査にあたって、細井浩志氏(活水女子大学)、木本雅康氏(元長崎外国语大学・故人)、大橋泰夫氏(島根大学)、下川達彌氏(活水女子大学)、久原巻二氏(元長崎県教職員)、永山修一氏(ラサール高等学校)、池田榮二氏(琉球大学)、稲富裕和氏(元大村市教育委員会)、堀江潔氏(佐世保工業高等専門学校)、大野安生氏(大村市教育委員会)、安楽哲史氏(大村市教育委員会)には、現地にてご指導いただいた。また、杉原敏之氏(福岡県教育委員会)には調査成果に関する文献をご提供いただいたほか、山本信夫氏(早稲田大学客員教授)、柴田亮氏(大村市教育委員会)には、出土陶磁器及び土師器について御教示いただいた。

13. 本書の作成にあたり、以下の文献を土器編年の基礎資料とした。

縄文土器：水ノ江和同2012『九州縄文化の研究』雄山閣

弥生土器：柳田康雄2002『九州弥生文化の研究』学生社

須恵器：舟山良一編2008『牛頭窯跡総括報告書』大野城市文化財報告書第77集

貿易陶磁：山本信夫編2000『太宰府条坊XV』太宰府市の文化財第49集

土師器：山本信夫1990「統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究によせて-」「乙益重隆先生古稀記念論文集『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

## 本文目次

<b>I. 調査の経過</b>	<b>III. 本調査の成果</b>
1. 調査に至る経緯	1. 調査組織 ..... 11
(1)都市計画道路池田沖田線の概要 ..... 1	(2) A 区の成果 ..... 11
2. 試掘範囲確認調査	(1) 基本土層 ..... 11
(1)試掘範囲確認調査の概要 ..... 2	(2) 遺構と遺物 ..... 14
(2)調査成果 ..... 2	3. B 区の成果 ..... 38
3. 本調査の経過	(1) 基本土層 ..... 38
(1)本調査までの経緯 ..... 6	(2) 遺構と遺物 ..... 38
(2)調査の方法 ..... 6	4. 自然科学分析(放射性炭素年代測定) ..... 92
(3)本調査の概要 ..... 6	(1) 自然科学分析の概要 ..... 92
(4)整理作業の概要 ..... 6	(2) 竹松遺跡における放射性炭素年代測定 ..... 92
<b>II. 遺跡の環境</b>	<b>IV. まとめ</b>
1. 地理的環境 ..... 8	1. B 区出土遺物の検討 ..... 95
2. 歴史的環境 ..... 8	(1) 遺物の出土状況 ..... 95
	(2) 土師器の検討 ..... 100
	2. B 区遺構群の変遷 ..... 103

## 挿 図

第1図 都市計画道路池田沖田線路線図	1
第2図 試掘範囲確認調査調査坑配置図	3
第3図 試掘範囲確認調査土層図	4
第4図 グリッド配置図	7
第5図 遺跡位置図	9
第6図 周辺遺跡位置図	10
第7図 A 区基本土層①(A1・A2区)	12
第8図 A 区基本土層②(A3・A4区)	13
第9図 A 区遺構配置図	15
第10図 A1～A2区 SD・SK・SS 遺構実測図①	16
第11図 A1～A2区 SD・SK・SS 遺構実測図②	17
第12図 A1～A2区 SD・SS・SX 出土遺物実測図	19
第13図 A3区水田遺構実測図	21
第14図 A3区水田遺構出土遺物実測図	22
第15図 A3区 SD・SS 遺構実測図	23
第16図 A3区 SD・SS 出土遺物実測図	24
第17図 A4区 SD・SS 遺構実測図	25
第18図 A4区 SD 出土土器・陶磁器実測図	27
第19図 A4区 SD 出土石器・その他実測図	28
第20図 A3区～A4区 ST 関連遺構実測図①	31
第21図 A3区～A4区 ST 関連遺構実測図②	32
第22図 A3区・A4区 SK・SS・SX 遺構実測図	34
第23図 A 区包含層出土遺物実測図	35
第24図 B 区基本土層実測図	39
第25図 B 区遺構配置図	41、42
第26図 B 区 SA1 遺構実測図	43
第27図 B 区 SA1 出土遺物実測図	43
第28図 B 区 SB1 遺構実測図	44
第29図 B 区 SB1 出土遺物実測図	45
第30図 B 区 SB2 遺構実測図	46
第31図 B 区 SB2 出土遺物実測図	46
第32図 B 区 SB3 遺構実測図	47
第33図 B 区 SB3 出土遺物実測図	48
第34図 B 区 SB4 遺構実測図	49
第35図 B 区 SB5 遺構実測図	50
第36図 B 区 SB4・SB5 出土遺物実測図	50
第37図 B 区 SB6・SB7 遺構実測図	52
第38図 B 区 SB8 遺構実測図	53

## 目 次

第39図 B 区 SB8 出土遺物実測図	53
第40図 B 区 SC1 遺構実測図	57
第41図 B 区 SC1 出土遺物実測図①	57
第42図 B 区 SC1 出土遺物実測図②	58
第43図 B 区 SC2 遺構実測図	61
第44図 B 区 SC2 出土遺物実測図	61
第45図 B 区 SC4 遺構実測図	62
第46図 B 区 SC4 出土遺物実測図	62
第47図 B 区 SC5 遺構実測図	63
第48図 B 区 SC5 出土遺物実測図	63
第49図 B 区 SK1 遺構実測図	64
第50図 B 区 SK1 出土遺物実測図	64
第51図 B 区 SK2 遺構実測図	65
第52図 B 区 SK2 出土遺物実測図	65
第53図 B 区 SK3・SK4 遺構実測図	66
第54図 B 区 SK3・SK4 出土遺物実測図	66
第55図 B 区 SS1・SS2 遺構実測図	67
第56図 B 区 SU2 出土遺物実測図	67
第57図 B 区 SX1 遺構実測図	68
第58図 B 区 SX1 出土遺物実測図①	69
第59図 B 区 SX1 出土遺物実測図②	70
第60図 B 区 SX2 遺構実測図	73
第61図 B 区 SX2 出土遺物実測図	74
第62図 B 区 SX3 出土遺物実測図	77
第63図 B 区 SP 出土遺物実測図	78
第64図 B 区 包含層出土土器実測図①	81
第65図 B 区 包含層出土土器実測図②	83
第66図 B 区 包含層出土土器実測図③	85
第67図 B 区 包含層出土土器実測図④	87
第68図 B 区 包含層出土石器実測図①	89
第69図 B 区 包含層出土石器実測図②	91
第70図 暗年較正結果	94
第71図 越州窯系青磁水注の出土事例	97
第72図 土師器分類図	101
第73図 柱穴出土遺物の二者	101
第74図 土師器法量分布図	102
第75図 B 区 遺構変遷図	103
第76図 竹松遺跡全体 遺構配置図	105、106

## 図版目次

図版1	A1～A2区 SD・SS・NR 遺構写真	18	図版15	B区 SC4出土遺物	62
図版2	A1～A2区 SD・SS・SX 出土遺物	20	図版16	B区 SU2出土遺物	68
図版3	A3区 SD・SS 遺構写真	24	図版17	B区 SX1出土遺物①	71
図版4	A4区 SD・SS 遺構写真	26	図版18	B区 SX1出土遺物②	71
図版5	A4区 SD 出土石器・その他	28	図版19	B区 SX2出土遺物	75
図版6	A4区 SD 出土土器・陶磁器	29	図版20	B区 SX3検出写真	76
図版7	A3区 ST 関連遺構写真	33	図版21	B区 SP 出土遺物	79
図版8	A4区 包含層出土遺物	36	図版22	B区 包含層出土土器①	82
図版9	B区 SA1出土遺物	43	図版23	B区 包含層出土土器②	84
図版10	B区 SB1出土遺物	45	図版24	B区 包含層出土土器③	86
図版11	B区 SB3出土遺物	48	図版25	B区 包含層出土土器④	87
図版12	B区 SB4・SB5出土遺物	51	図版26	B区 包含層出土石器①	90
図版13	B区 SC1出土遺物	59	図版27	B区 包含層出土石器②	91
図版14	B区 SC2出土遺物	61			

## 表 目 次

第1表	試掘範囲確認調査一覧	2	第20表	B区 SC2出土遺物観察表	61
第2表	周辺遺跡一覧表	10	第21表	B区 SC4出土遺物観察表	62
第3表	A1～A2区 SD・SS・SX 出土遺物観察表	20	第22表	B区 SC5出土遺物観察表	63
第4表	A3区水田遺構出土遺物観察表	22	第23表	B区 SK1出土遺物観察表	64
第5表	A3区 SD・SS 出土遺物観察表	24	第24表	B区 SK2出土遺物観察表	65
第6表	A4区 SD 出土遺物観察表	30	第25表	B区 SK3・SK4出土遺物観察表	66
第7表	A3区 ST 出土遺物観察表	32	第26表	B区 SU2出土遺物観察表	68
第8表	A区 包含層出土遺物観察表	36	第27表	B区 SX1出土遺物観察表	72
第9表	B区 SA・SB 観察表	40	第28表	B区 SX2出土遺物観察表	75
第10表	B区 SA1出土遺物観察表	43	第29表	B区 SX3出土遺物観察表	76
第11表	B区 SB1出土遺物観察表	45	第30表	B区 SP 出土遺物観察表	79
第12表	B区 SB2出土遺物観察表	46	第31表	B区 包含層出土遺物観察表①	88
第13表	B区 SB3出土遺物観察表	48	第32表	B区 包含層出土遺物観察表②	91
第14表	B区 SB4・SB5出土遺物観察表	51	第33表	B区 遺物出土状況一覧表1	96
第15表	B区 SB8出土遺物観察表	53	第34表	B区 遺物出土状況一覧表2	97
第16表	B区 SP 観察表①	54	第35表	B区 遺物出土状況一覧表3	97
第17表	B区 SP 観察表②	55	第36表	B区 遺物出土状況一覧表4	98
第18表	B区 SP 観察表③	56	第37表	B区 遺物出土状況一覧表5	99
第19表	B区 SC1出土遺物観察表	60			

## I 調査の経過

### 1 調査に至る経緯

#### (1) 都市計画道路池田沖田線の概要

都市計画道路池田沖田線は、大村市内を南北に縦断する国道34号線のバイパス機能を有し、中心市街地の交通渋滞緩和と地域の利便性向上を図る目的で、平成15年8月22日に都市計画決定された。大村市池田2丁目から沖田町を起終点とする総延長3,420mである。

大村市の中心市街地以南における幹線道路は国道34号線のみであり、慢性的な交通混雑が発生している。また、池田沖田線建設予定地周辺では市街地化が進行しており、狭小幅員の道路網の中に市街地を形成している状況にある。当該路線の整備により、久原池田線や富の原鬼橋線、国道444号とのネットワークにより、長崎自動車道大村IC、九州新幹線西九州ルート新大村駅、長崎空港とのアクセスを容易にし、緊急時における円滑な交通の確保を図る。また、そのバイパス機能により、混雑している国道34号線の渋滞緩和に寄与し、ひいては防災上危険な市街地の解消につなげることを目的としている。

工区は小路口工区(1,450m)、竹松工区(1,970m)に分かれ、小路口工区については平成27年3月に供用開始となっている。今回の報告は、竹松工区にかかる埋蔵文化財発掘調査成果の一部である。



第1図 都市計画道路池田沖田線路線図

## 2 試掘範囲確認調査

### (1) 試掘範囲調査の概要

都市計画道路池田沖田線建設予定地内には周知の埋蔵文化財が複数存在したため、平成24年5月24日、長崎県教育委員会は、長崎県県央振興局と竹松遺跡及び同路建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、事前の打ち合わせを行った。県教育委員会は周知の埋蔵文化財包蔵地の重要性を説明するとともに、路線計画が変更できない場合は記録保存で対処する旨を伝えた。また、記録保存等の調整が必要な範囲を明らかにするため、用地買収が完了した箇所から2m×2m程度の調査坑を設置して、順次試掘範囲確認調査を行うことを申し合せた。これに基づき、第1表のとおり試掘範囲確認調査を実施した。

### (2) 調査成果

以下、今回報告箇所にかかる試掘範囲確認調査の概要を述べる。

#### ① 調査方法

用地買収が完了した都市計画道路建設予定地内に、2m×2mを基本とする調査坑23箇所(T-TP1～T-TP23)を設定して人力掘削を行った(第2図)。調査坑の位置は、沖田町側に17箇所(T-TP1～TP3・T-TP10～TP23)、竹松町側に6箇所(T-TP4～TP9)となり、前者を北部調査区、後者を南部調査区と呼称した。また、北部調査区では、人力掘削後に遺構の広がりや礫層以下の遺構の有無を確認する目的で、重機により一部調査坑の拡張もしくは深掘りを行った。

#### ② 基本土層

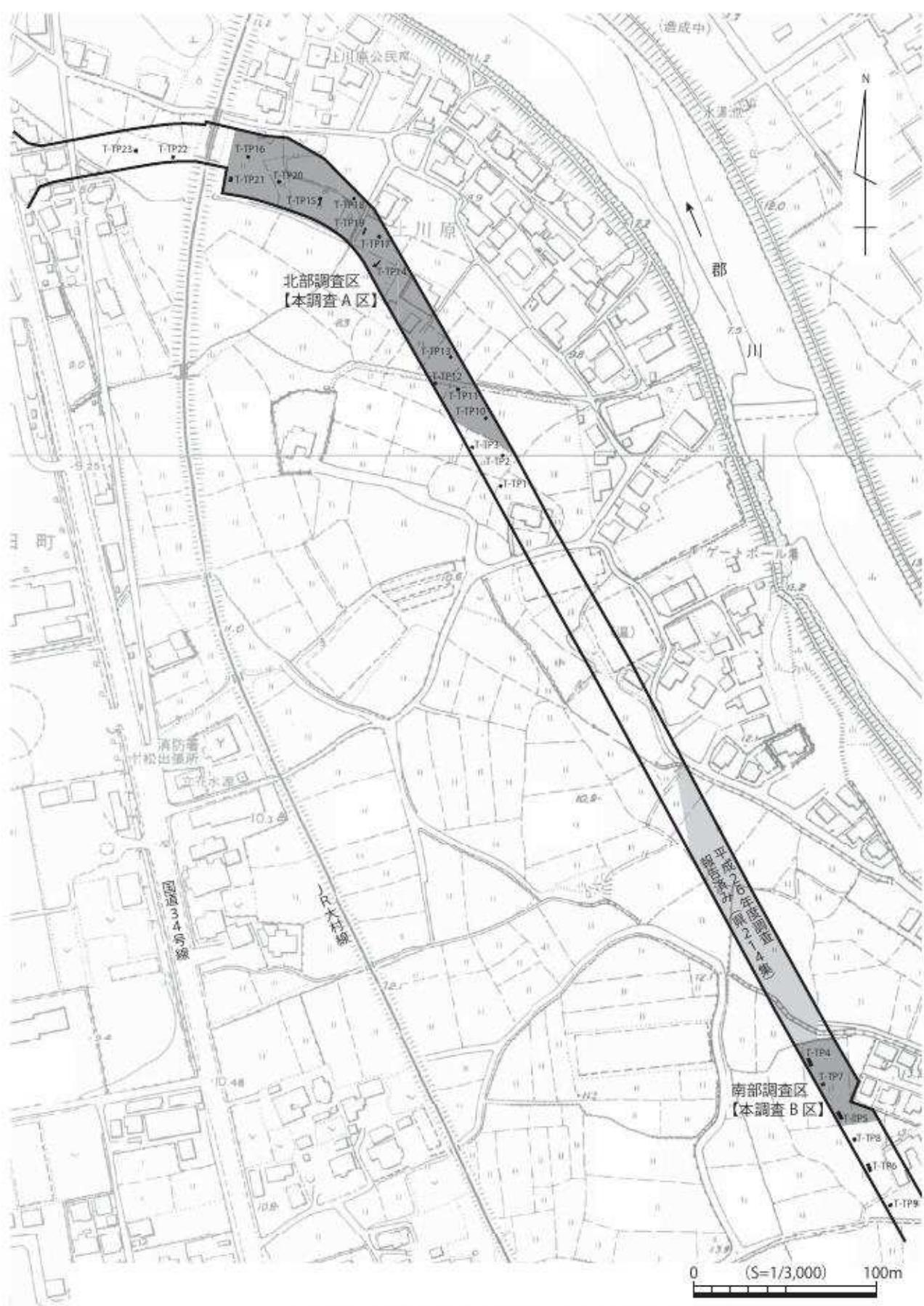
北部調査区と南部調査区で大きく異なるため、それぞれ別に列挙する。

#### 【北部調査区】

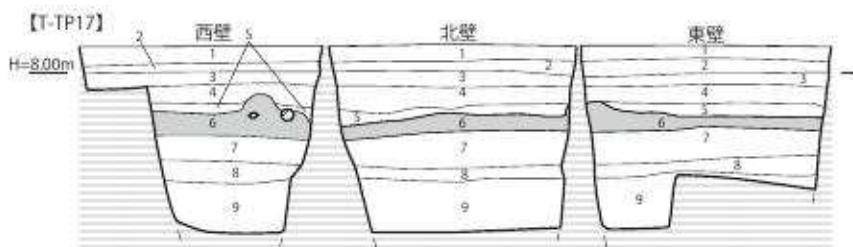
- 1層：褐灰色(10YR4/1)粘質土。水田耕作土及び床土。
- 2層：黄褐色(10YR5/8)粘質土。鉄分沈着層。
- 3層：黄灰色(2.5Y5/1)砂礫層。直径5cm前後の礫と粗粒砂主体。
- 4層：褐色(7.5YR4/3)砂質土。マンガン沈着層。
- 5層：黄褐色(10YR5/6)砂質土。鉄分沈着層。
- 6層：暗褐色(10YR3/4)砂質土。マンガン沈着層。
- 7層：にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土。
- 8層：暗褐色(10YR3/3)砂礫層。直径5cmから拳大の礫と粗粒砂主体。

第1表 試掘範囲確認調査一覧(都市計画道路池田沖田線関連)

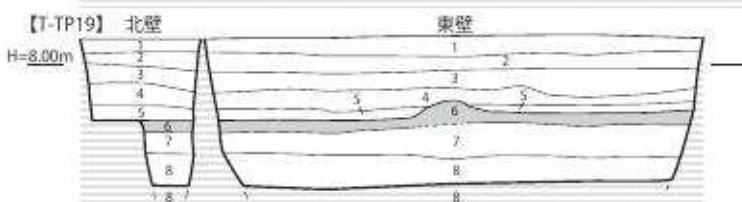
調査略号	遺跡名	所在地 (長崎県大村市)	調査期間	調査担当	面積 (m <sup>2</sup> )	年報 (号)	報告書 (号)	備考
TAK201311	竹松遺跡	竹松町1042番地1他	20131203～20131226	山梨・新井	86	22	県214集	平成26年度本調査
TAK201417	竹松遺跡	神田町133番地	20141110～20150108	中尾・本田	113	23	県217集	平成27年度本調査
TAK201426	竹松遺跡	竹松町885番地3	20150126～20150220	中尾・本田	20	23	-	慎重工事
TAK201516	竹松遺跡 川端遺跡隣接地 平野遺跡	竹松町2337番地1他	20151113～20151202	村川・川畑	117	24	埋セ26集	平成29年度本調査
HRN201425	平野遺跡	鬼橋町21番地1他	20150126～20150220	中尾・本田	16	23	-	本調査予定
KRR201605	川端遺跡隣接地	鬼橋町123番地1他	20160926～20160930	浦田・村川	8	25	未	平成30年度本調査
HRN201316	平野遺跡隣接地	鬼橋町128番地1他	20140116～20140123	山梨・新井	28	22	-	平成30年度本調査
TSJ201427	立小路遺跡	鬼橋町1169番地1他	20150206～20150217	中尾・本田	24	23	県216集	平成28年度本調査
GR0201202	小路口遺跡	小路口町下小路口1099-16	20120723～20120803	町田・今西	40	21	県213集	平成25年度本調査



第2図 試掘範囲確認調査調査坑配置図 (S=1/3,000)  
『大村市地形図 (平成11年3月)』に合成

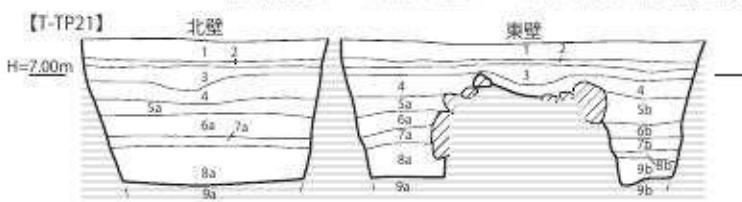


T-TP17 水田畦畔検出状況（南から）



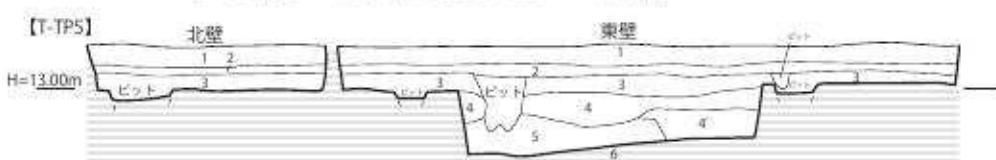
T-TP19 東壁土層（北西から）

[T-TP17・TP19 土層注記] 1層：褐灰色 (10YR4/1) 粘質土。水田耕作面及び床土。  
2層：褐色 (7.5YR4/3) 粘質土。鉄分が縦方向に筋状に混じる。よくしまる。  
3層：灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土。鉄分混じるが4層より少ない。中粒砂主体。  
4層：褐色 (10YR4/6) 砂砾層。鉄分多く含む。極粗粒砂～直徑 3cm の砾で構成。  
5層：褐色 (7.5YR4/6) 砂質土。粗粒砂で構成。ほとんど礫を含まない。  
6層：褐灰色 (10YR5/1) 粘質土。砂砾をやや含む。粘性やや弱い。水田耕作面及び床土。  
7層：褐色 (10YR4/4) 砂砾層。やや鉄分混じり黄色味が強い。直徑 2cm 程度の砾及び極粗粒砂で構成。  
8層：黄褐色 (10YR5/6) 砂層。極粗粒砂で構成。しまり弱い。  
9層：黒褐色 (10YR3/2) 砂層。直徑 3cm ～拳大～人頭大の砾で構成。部分的にマンガン沈着。



T-TP21 完掘状況（西から）

[T-TP21 土層注記] ※1層～4層：T-TP17・TP19 土層注記に同じ  
5a層：にふい黄褐色 (7.5YR5/4) 砂層。粗粒～極粗粒砂で構成。  
5a層：黑褐色 (10YR3/1) 砂砾層。粗粒砂～直徑 3cm の砾で構成。  
5a層より粒子粗い。拳大の砾がブロック状に堆積。  
7a層：褐灰色 (10YR4/1) 粘質土。ややしまり弱い。水分多く粘性強い。  
8a層：褐色 (10YR3/3) 砂砾層。鉄分やや混じる。粗粒砂～直徑 5cm の砾が主体。  
9a層：灰黄褐色 (10YR4/2) 砂層。直徑 5mm ～拳大～人頭大の砾で構成。  
5b層：褐灰色 (10YR4/1) 砂砾混じり層。粗粒砂主体。直徑 1cm の砾を 10% 含む。  
6b層：にふい黄褐色 (10YR4/3) 砂層。極粗粒砂主体。鉄分混じる。拳大の砾がブロック状に堆積。  
7b層：灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土。粗粒砂主体。鉄分含まない。  
8b層：黒褐色 (10YR3/1) 砂層。極粗粒砂主体。  
9b層：灰黄褐色 (10YR4/2) 砂砾層。極粗粒砂～直徑 5cm の砾で構成。



0 (S=1/60) 2m

[T-TP5 土層注記] 1層：灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土。水田耕作面及び床土。  
2層：黄褐色 (10YR5/6) 粘質土。鉄分沈着層。  
3層：培褐色 (10YR3/3) シルト質土。マンガン粒を含む。粘性弱い。  
4層：褐色 (10YR4/4) シルト質土。非常に固くしまる。直徑 5mm 未満の白色粒子・黄褐色粒子を含む (5%)。  
遺構検出面  
4'層：培褐色 (10YR3/4) シルト質土。非常に固くしまる。直徑 5mm 未満の白色粒子・黄褐色粒子を多く含む (10%)。  
遺物出土なし。  
5層：黒褐色土 (10YR3/2) 砂層。直徑 2-3cm の砾が主体。固くしまる。  
6層：培褐色 (10YR3/3) 砂層。拳大～人頭大の砾が主体。基盤砾層。



T-TP5 東壁土層（西から）



T-TP4 東壁土層（西から）



T-TP7 遺構検出状況（北から）

第3図 試掘範囲確認調査土層図 (S=1/60)

9層：暗褐色(10YR3/3)礫層。人頭大以上の礫主体。

扇状地礫層と思われる8~9層礫層の上位に、マンガン沈着砂質土と鉄分沈着砂質土が互層をなして2~3パターン堆積するのが典型的である。8~9層からは白磁IV類、白磁V類などが出土していて、11世紀後半~12世紀以降に断続的な水性堆積を繰り返しながら徐々に陸化したものと推測される。

#### 【南部調査区】

1層：灰黄褐色(10YR5/2)粘質土。水田耕作土及び床土。

2層：黄褐色(10YR5/6)粘質土。鉄分沈着層。

3層：暗褐色(10YR3/3)シルト質土。マンガン粒含む。

4層：褐色(10YR4/4)シルト質土。非常に固くしまる。直径5mm満の白色・黄褐色粒子を含む。

4'層：暗褐色(10YR3/4)シルト質土。非常に固くしまる。直径5mm未満の白色・黄色粒子を多く含む。

5層：黒褐色(10YR3/2)礫層。直径2~3cmの礫が主体。固くしまる。

6層：暗褐色(10YR3/3)礫層。拳大~人頭大の礫が主体。扇状地基盤礫層。

3層は弥生時代後期~中世までの遺物を含む包含層で、遺構検出面は3層中から4層上面になる。4~5層は遺物を含まないいわゆる古土層であるが、T-TP7以北では硬化が弱く、土壤化が進んでいる可能性がある。

#### ③遺構・遺物

#### 【北部調査区】

T-TP17の6層で水田遺構を検出した。畦畔の延長上にT-TP19を設定して掘り下げたところ、同様の層位から畦畔を検出した。また、T-TP21では東西方向に伸びる石積みを確認した。

#### 【南部調査区】

T-TP4で3層中から焼土や炭化物が伴う大型遺構を検出した。南側に直線的な遺構のラインが薄く確認でき、竪穴住居跡の可能性がある。T-TP5・TP6でもピットや土坑を検出した。遺物は、弥生土器や中世の土師器などが出でている。なお、T-TP6・TP8・TP9では遺構・遺物の出土はなかった。

#### ④小結

北部調査区では、水田遺構と石積み遺構を確認するとともに、中世以降の包含層を検出した。また、南部調査区では、弥生時代から中世にかけて遺構が存在する可能性がある。このため、北部調査区のうち表土直下で扇状地礫層を検出した北端部と南端部を除く4,500mと、南部調査区の北半部980mについて、開発側と協議が必要と判断した。

### 3 本調査の経過

#### (1) 本調査までの経緯

試掘範囲確認調査結果を受けて、事業主体である長崎県土木部都市計画課(当時)と協議を行った結果、試掘範囲確認調査で遺構及び包含層を検出した北部調査区4,500m<sup>2</sup>及び南部調査区の980m<sup>2</sup>、合計5,480m<sup>2</sup>を対象に、記録保存の調査が必要であるとの結論に達した。その後、調査日数の算出や発掘調査費の積算等を行い、最終的に平成27年5月28日～平成28年2月18日まで発掘調査を実施した。

#### (2) 調査の方法

調査区の設定にあたり、試掘範囲確認調査時の北部調査区と南部調査区を、それぞれA区・B区とした。A区は竹松遺跡の北端部、B区は中部に位置する(第5図)。A区は南北200m以上の細長い調査区であるため、座標境や旧田境を目安に4分割し、それぞれA1～A4区と呼称した(第4図)。

調査は、A1区、A3区、A2区、B区、A4区の順で行った。まず重機で表土及び搅乱層を除去し、遺構検出及び遺構掘削を人力で行った。また、状況に応じて隨時トレンチ掘削を行い、土層確認や調査対象深度の確定に努めた。また、国土座標に則って20m四方のグリッドを設定し、グリッド北西隅座標のX・Yの百の位、十の位の数字を組み合わせて、4桁のグリッド番号を付し、土層観察用ベルトの設定や包含層出土遺物の取上げの際に利用した(第4図)。

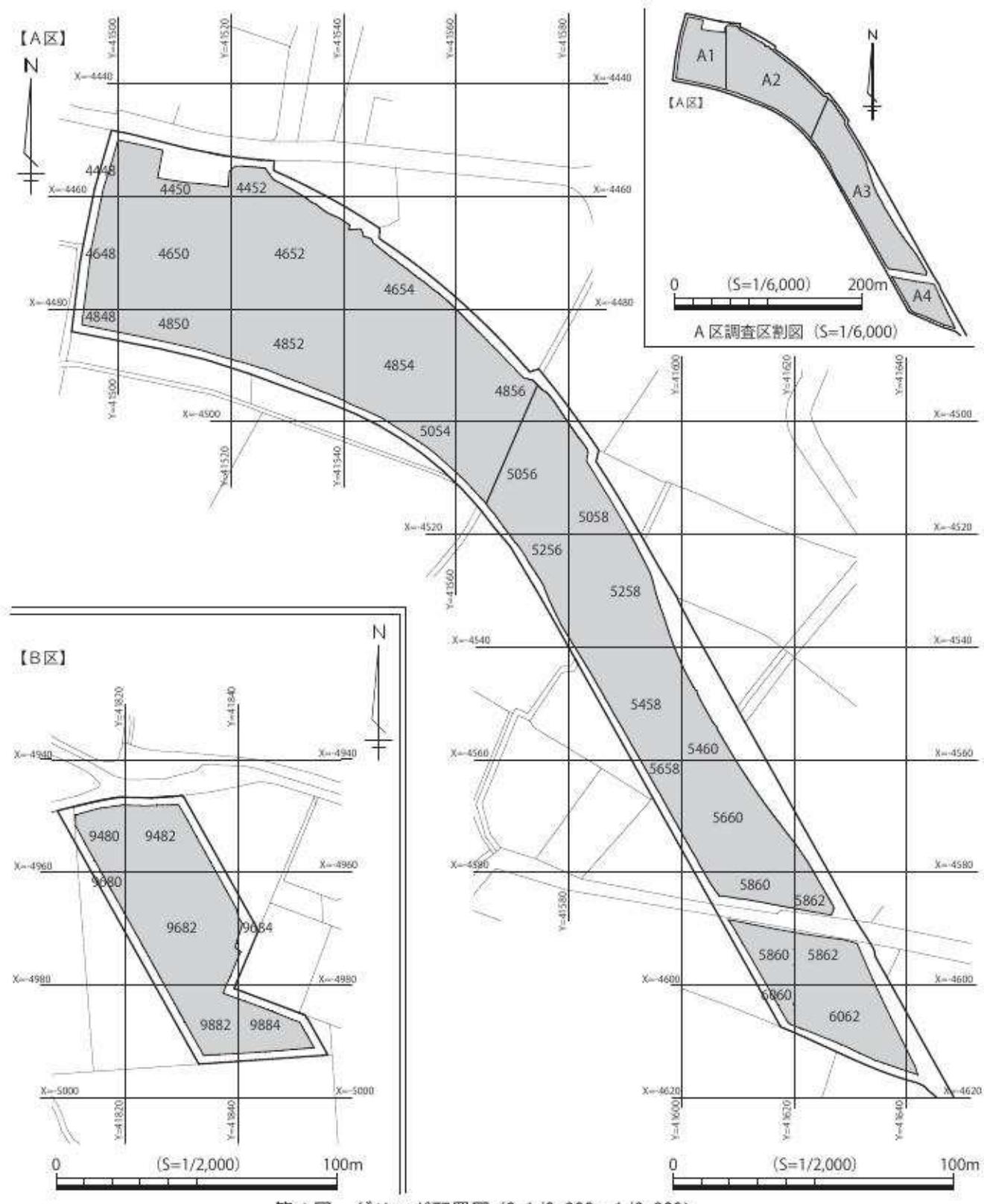
#### (3) 本調査の概要

A1～A4区では、中世から近現代にかけての流路跡を多数検出した。調査区は郡川の下流域にあたり、氾濫の影響が大きかったと推測された。また、中世の焼土坑・集石墓5基や近世の水田跡を検出し、度重なる氾濫の影響を受けつつも断続的な土地利用の痕跡を確認できた。

B区では、弥生時代の竪穴住居3基、縄文時代の埋甕2基とともに、古代末～中世のピット群377基、大型竪穴建物1基を検出した。ピット群は、真北から約8度西に振れる方向で直線的に配列しており、大半は柱穴と考えられる。これらの規模や配列を検討し、掘立柱建物8棟(総柱建物3棟、側柱建物5棟)、柵列1条を復元した。また、これらの遺構群の保存について事業主体と協議を行ったところ、道路は盛土造成するため、検出遺構まで施行深度は及ばないことを確認し、共同溝や水道敷設など今後予想される個人事業に際しては、個別に協議して協力を求めるとした。この協議の時点ですでにほとんど完掘していたが、柱穴の形状や深さを保存する目的で、遺構内に砂を充填し、廃土で埋め戻して現状復旧した。なお、保存に係る養生作業等に伴って、工期を当初予定していた平成28年1月19日から、平成28年2月18日まで延長した。

#### (4) 整理作業の概要

発掘調査と併行して、現場棟にて出土遺物の洗浄作業を行っていたが、調査終了後に久原現場事務所に遺物を搬入し、平成28年2月～3月にかけて重要遺物の抜き出しや分類、ID付与作業を行い、ナンバリングを行った。また、平成28年度以降は他現場の発掘調査と併行して作業を進め、平成29年度に遺物実測及び拓本作業を行い、平成30年8月までに遺物トレースを終了した。同年10月～12月にかけて、遺構図や土層のトレース及び原稿執筆、全体のとりまとめを行った。



第4図 グリッド配置図 (S=1/2,000・1/6,000)

## II 遺跡の環境

### 1 地理的環境(第5図)

大村市は県本土部のほぼ中央に位置し、西に大村湾、東に多良山系と接する。多良山系の山頂からは放射状に河川が発達し、深い渓谷を作りながら有明海や諫早湾、大村湾に注いでいる。これらの火山の裾には、土石流堆積物からなる多良火山麓扇状地が形成され、大村市東部で広く緩やかな台地を形成している。

郡川は、五家原岳、多良岳、経ヶ岳、遠目山を源とする萱瀬川や南川内川が合流した河川である。西流して大村扇状地の扇頂付近で北西に流れを変え、佐奈川内川と合流したのち寿古町の好武城付近で西に屈曲して大村湾に注ぐ。郡川流域には、下流域の扇状地や三角州、氾濫原や河岸段丘など特徴的な地形が見られる。

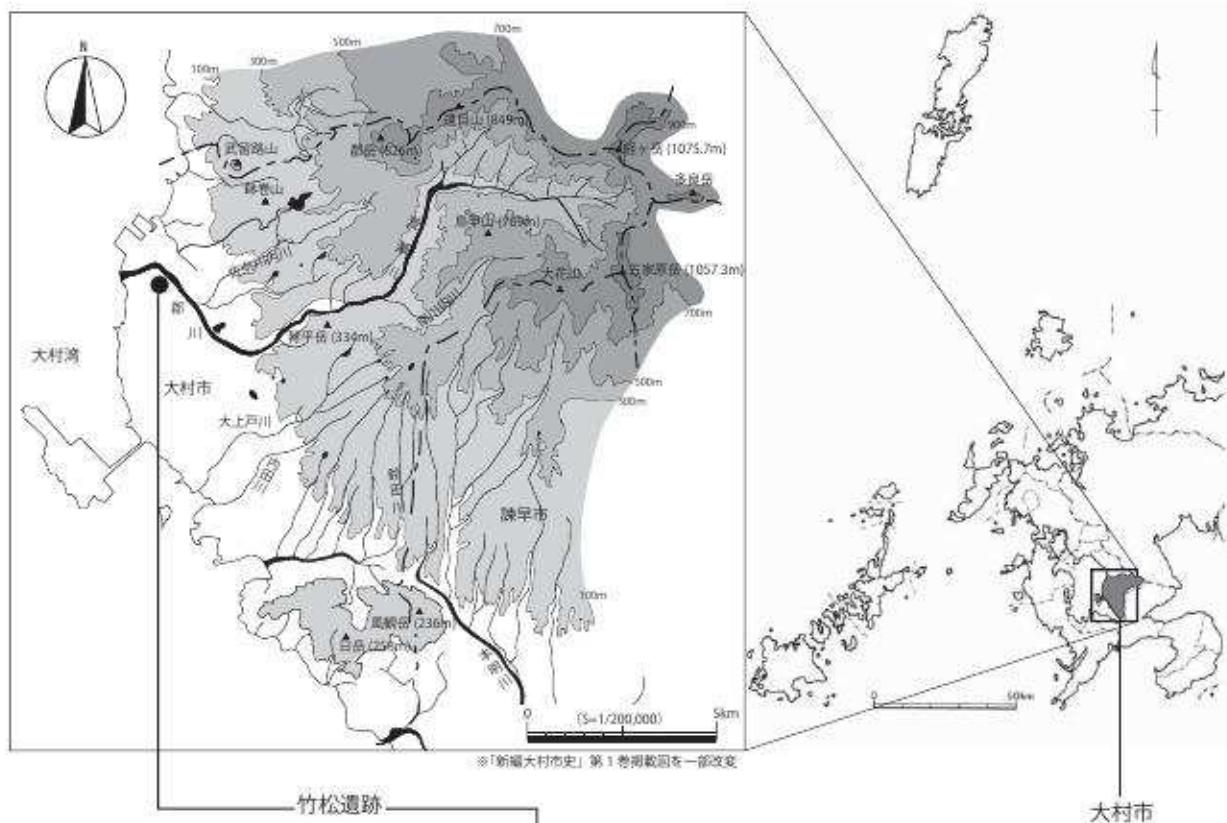
大村扇状地は、南北約7km、東西約3kmで、雲仙岳や多良岳周辺の火山麓扇状地を除くと、県内で最大の河成扇状地となる。現在の矢次橋から郡川河口に向けて広がる平野は、完新世の新期扇状地または三角州で、これ以外は更新世に形成された旧期扇状地である。三角州や新期扇状地は、厚さ10m以上の砂礫とシルト、粘土の互層及び貝殻片からなり、土石流堆や自然堤防と考えられる微高地が上流側から放射状に分布し、下流側には分流する旧河道が数多く認められる。郡川周辺の自然堤防や微高地上には現在宅地が並び、三角州や旧河道、扇状地末端は主に田畠として利用されている。

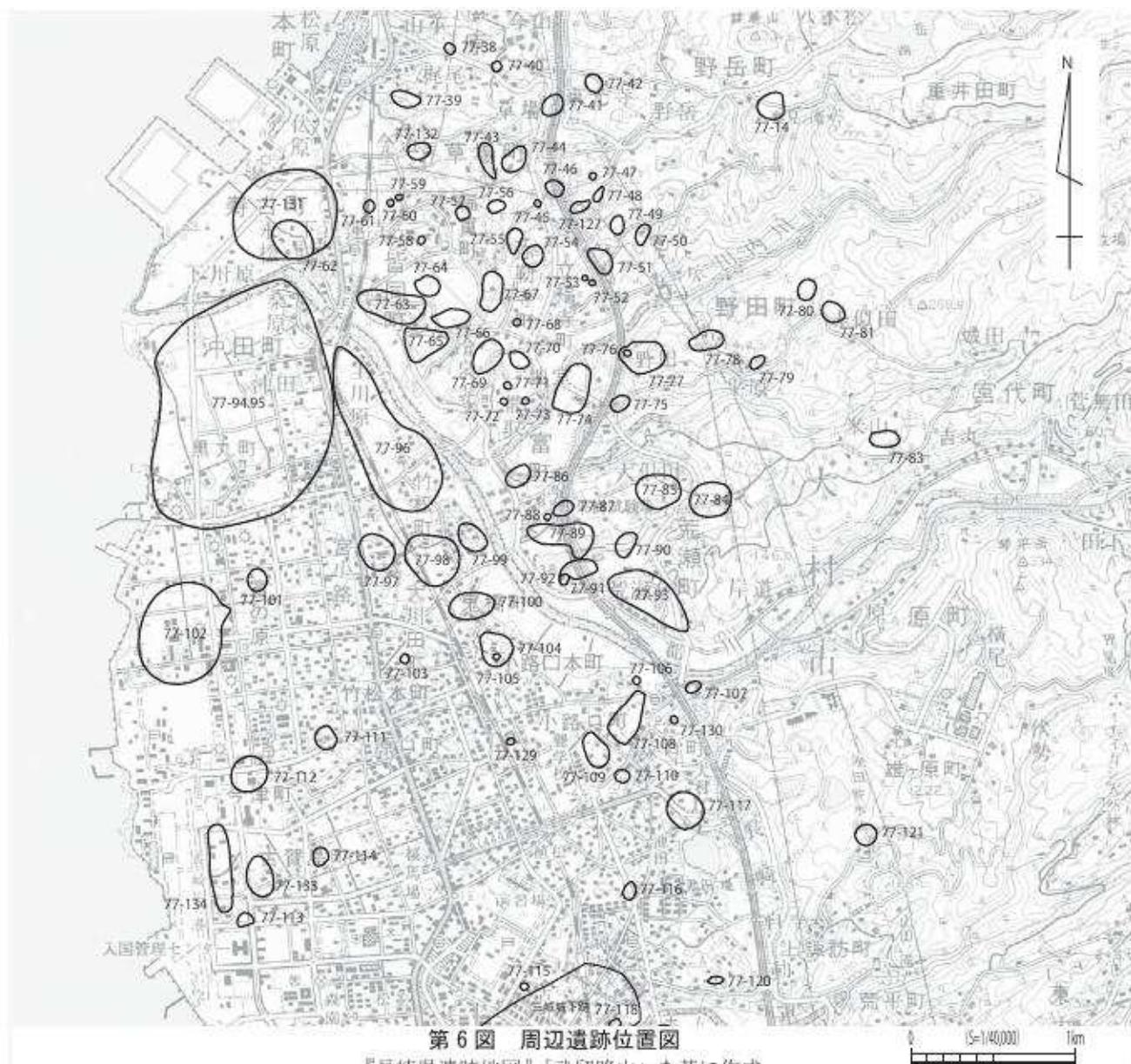
### 2 歴史的環境(第6図)

旧石器時代の遺跡は、多良火山麓扇状地の標高200~300m付近の湧水点やため池付近に立地する場合が多く、大村扇状地では現在のところ未確認である。縄文時代には、早期末に玖島城跡で低湿地型貯蔵穴が確認でき、この時期以降本格的に低地部への進出が顕著になる。縄文時代後期後半~晩期にかけて、黒丸遺跡では低湿地型貯蔵穴のほか、埋設土器や土坑などが確認でき、弥生時代中期にかけて連続的に遺跡が形成される。また、黒丸遺跡の南には弥生時代中期の環濠集落である富の原遺跡があり、鉄戈や鉄剣を副葬する大型甕棺が出土していて、この時期の拠点集落と考えられる。古墳時代には、大村市東部の火山麓扇状地に5世紀の黄金山古墳が形成され、6世紀以降も鬼の穴古墳、石走古墳、野田古墳群などが築かれる。

古代には、黒丸遺跡の北部、郡川の下流域に古代の条里遺構が残り、さらに国道34号線に沿った旧長崎街道は、古代官道ルートと推定されている。中世には、郡川北側の寿古遺跡で、12~13世紀の貿易陶磁器等が大量に出土し、その近隣には15世紀後半の15代純治築城とされる好武城跡や、16代純伊築城とみられる今富城跡といった、大村氏関係の城館跡が残る。

竹松遺跡は、郡川が形成した旧期扇状地から新期扇状地・三角州にかけて立地する。新幹線建設に伴う近年の本格的な発掘調査により、弥生時代の墓域や古墳時代前期の円墳のほか、古墳時代後期の竪穴建物群、古代の墨書き・刻書き土器、区画溝が伴う鎌倉時代の居館跡など、縄文早期から中世にかけての遺構・遺物が大量に出土し、大規模な複合遺跡であることが判明している。





第6図 周辺遺跡位置図  
『長崎県遺跡地図』「武留山」を基に作成

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
77-14	瓦斯道路	旧石器	77-67	稻田道路	縄文	77-92	竹松小学校道路	縄文
77-38	前酒跡	縄文	77-68	御坂石積道路	古墳	77-98	小野道路	古墳
77-39	大忠平遺跡	縄文	77-69	御坂道路	縄文	77-99	別瀬船跡	弥生
77-40	東光寺跡	中世	77-70	御越道路	縄文	77-100	豆小路道路	縄文
77-41	東光寺遺跡	縄文	77-71	黄金山西塙	古墳	77-101	西木道路	弥生・古墳
77-42	中宿道路	縄文	77-72	地蔵古墳	古墳	77-102	高少原(常磐)道路	弥生
77-43	下松原道路	縄文	77-73	大村市今富のキリタン廢塙	中世	77-103	大川田道路	縄文
77-44	上松原道路	縄文	77-74	中田道路	弥生・古墳	77-104	小路口道路	縄文
77-45	八龍古塙	古墳	77-75	御田田道路	旧石器	77-105	鷺の穴古墳	古墳
77-46	上八龍B道路	縄文	77-76	御田古墳	古墳	77-106	上小路口古墳	古墳
77-47	駿溝山峰道路	中世	77-77	大村市通路	縄文	77-107	吹口崩跡	中世
77-48	中田草薙跡	縄文	77-78	平原B道路	縄文	77-108	吹口・内鹿野道路	縄文
77-49	八ヶ久保道路	縄文	77-79	中商野道路	縄文	77-109	吹口・横道道路	縄文
77-50	笠石峠道路	縄文	77-80	豊方白瀬跡	旧石器	77-110	チサイイ木瀬跡	縄文
77-51	赤木道路	縄文	77-81	赤坂寺塙道路	旧石器・縄文	77-111	吹口・山下道路	縄文
77-52	赤木五輪塔	中世	77-82	河代道路	旧石器・縄文	77-112	今津道路	縄文・弥生
77-53	立霧寺松山跡道路	古墳	77-83	米丸山道路	縄文	77-113	西致島1号跡	縄文
77-54	赤松寺跡	中世	77-84	大坂田塙道路	旧石器・縄文	77-114	赤致島2号跡	縄文
77-55	赤松寺塙跡石仏群	中世	77-85	山田道路	旧石器・古墳・中世	77-115	乾坂塙道路	縄文
77-56	深山道路	縄文	77-86	多名道路	弥生	77-116	タツノ木原道路	縄文
77-57	山口上石塙	古墳	77-87	明田道路	旧石器	77-117	吹口下A道路	縄文
77-58	張力道路	古墳	77-88	御城古墳	古墳	77-118	陣の内道路	縄文
77-59	毛庄古墳群1号墳	古墳	77-89	御城埋酒跡	旧石器	77-120	野口道路	縄文
77-60	毛庄古墳群2号墳	古墳	77-90	水浦道路	縄文	77-121	ホースキ谷道路	旧石器・縄文
77-61	大堂道路	古墳	77-91	山下道路	旧石器・弥生	77-122	上八龍A道路	縄文
77-62	好武城跡	中世	77-92	山下中世墓群	縄文・中世・近世	77-130	吹口淨水場道路	旧石器
77-63	今富城跡	中世	77-93	御瀬道路	縄文	77-131	寿古瀬跡	旧石器・近世
77-64	中平田道路	縄文	77-94	奥丸道路	縄文・古墳・中世・近世	77-132	吉曾島3号跡	縄文
77-65	冷泉道路	古墳	77-95	御田里丸塙道路	半安・中世	77-134	西致島4号跡	縄文
77-66	諸岡郷古墳石柱	古墳	77-96	竹松道路	縄文・中世			

### III 本調査の成果

#### 1 調査組織

本調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が担当し、作業員の労務管理及び地形測量、遺構実測を竹松遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体株式会社埋蔵文化財サポートシステム・扇精光コンサルタンツ株式会社に委託した。調査組織は以下のとおり。

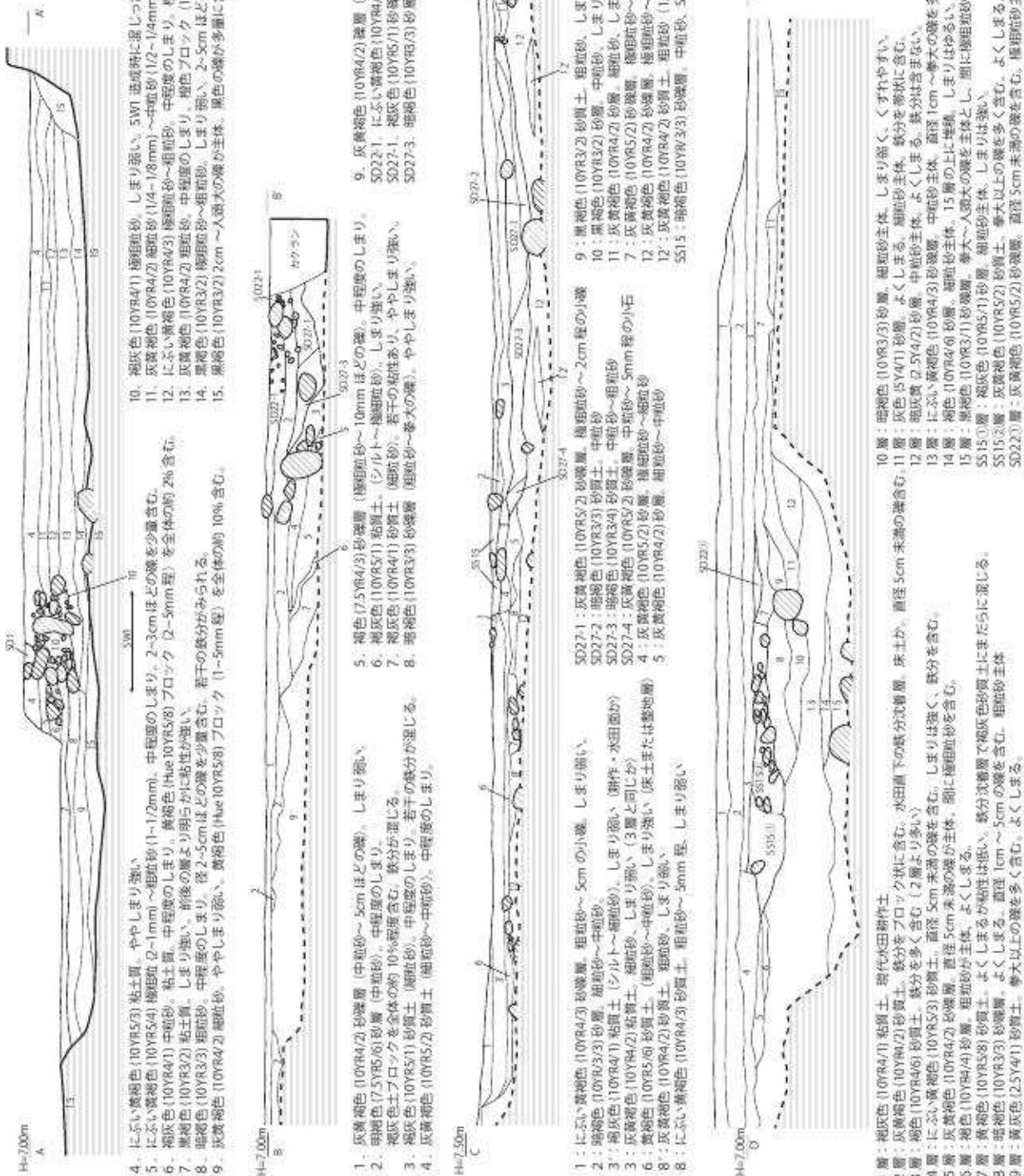
新幹線文化財調査事務所	所長 古門 雅高 課長 田尻 清秀(～平成27年度) 小島 克孝(平成28年度～) 杉原 敦史 係長 村川 逸朗(～平成27年度) 主任主事 浜口 広史(～平成28年度) 主事 水口真理子(平成28年度～)
試掘範囲確認調査担当	主任文化財保護主事 中尾 篤志 文化財保護主事 本田 秀樹
本調査担当	主任文化財保護主事 中尾 篤志 文化財調査員 小松 義博(現別府大学大学院)
整理・報告書担当	係長 中尾 篤志
竹松遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体	株式会社埋蔵文化財サポートシステム 山下 貢司 大坪 芳典 竹田ゆかり 伊達惇一郎
扇精光コンサルタンツ株式会社	織田 健吾

#### 2 A区の成果

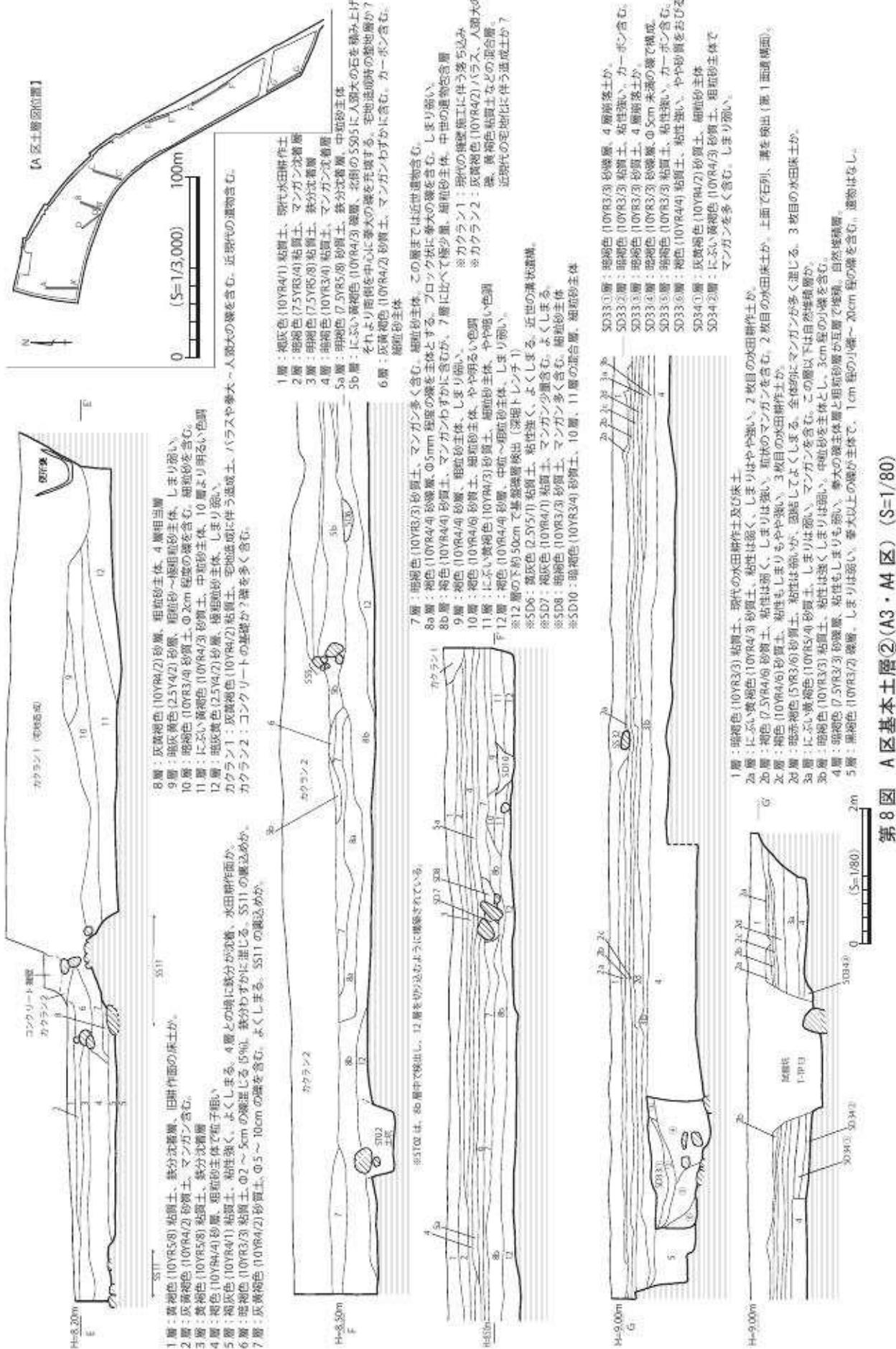
##### (1) 基本土層(第7図・第8図)

A区では、人頭大以上の円礫からなる扇状地礫層を基盤とし、極粗粒砂～粗粒砂、細粒砂～中粒砂が互層で堆積する。この特徴はA1～A4区まで共通するものの、地形的にA1～A2区とA3～A4区は高低差があり比高差1mほどの段で区別されるため、土層の細かい対応関係はつかめなかった。そのため、土層番号はA1～A2区とA3区～A4区で別に付与した。

遺構はこれらの砂層を切り込むように構築されるが、石列(SS)や石積み(SW)が伴う人為的な溝状遺構(SD)や、自然流路(SD)・旧河道(NR)が主体となる。A3区では、砂層に粘土を張った畦畔や水田面を確認したほか、A3～A4区にかけて砂層を掘り込んだ埋葬関連施設も検出している。これらの遺構群は砂層に覆われるように埋没しており、また鉄分沈着層が間層を挟みつつ繰り返し確認できることから、断続的に流水の影響を受け、冠水と離水を繰り返す環境にあったと考えられる。



第7図 A区基本土層①(A1・A2区) (S=1/80)



## (2) 遺構と遺物

A区では、自然流路を含む溝状遺構32条、石列32条、旧河道2条、土坑3基、土坑墓5基、水田畦畔15、不明遺構7、石積み1基を確認した。このうち、現代の水田畦畔直下で確認した石列・溝状遺構のうち、土層及び出土遺物の検討等から近現代の遺構と判断したもの(SD2・SS1・SD21・SN7・SS18・SS19・SE1・SS5・SS4・SS3・SS2・SD3・SD4・SD5・SN1・SS32・SS31・SS33・SS34・SN2・SN3・SN4・SD32・SN5)については、第9図にて検出位置の掲載に留めた。以下、近世以前の遺構について、A1～A2区とA3～A4区に分けて記述する。

### ① A1～A2区の遺構

#### ・ SW1(第9図1・第10図)

A1区中央の5層上面で検出した石積み遺構。人頭大の扁平な円碟を幅80cm前後で2～3段積み上げた状況で検出した。北東一南西方向に延長32m伸びる。A1区では、基底面の北側に粘土層(7層)を帶状に確認し、SW1の性格を当初は高低差のある水田の擁壁面と考えていたが、A2区の調査でSD13の延長に当たることから、この溝状遺構の南側の立ち上がりと考えた。北側の立ち上がりは削平で消失しているが、7層粘土層の範囲にSD13の幅が納まるとして推測している。遺物は出土していない。

#### ・ SD1(第9図1・第10図)

A1区4層上面で検出した溝状遺構。SW1埋没後に同遺構と同方向に掘削される。幅0.1m、延長13mで、南西一北東方向に伸びる。遺物は出土しなかった。

#### ・ SD12(第9図1・第10図)

A2区北の3層上面で検出した溝状遺構。SD13・SD14を切ってわずかに屈曲しながら東一南西方向に伸び、延長17m、幅3.0～6.0mである。両岸に石積みをし、さらに両岸を繋ぐように細い石積みが2.0～2.5m間隔で8条確認でき、溝の内部を細長い空間に区切っている(SD12-SS1～SS8)。この空間内は拳大の円碟で充填されていた。東に延長約130mで郡川に達することから、用水路の一部であろうか。遺物は、見込釉剥ぎの碗やコンニャク印判の染付などの肥前陶磁が出土しており(第12図1～9)、18世紀以降と考えられる。この他、トチン・ハマなど窯道具が出土した。

#### ・ SD13(第9図1・第10図)

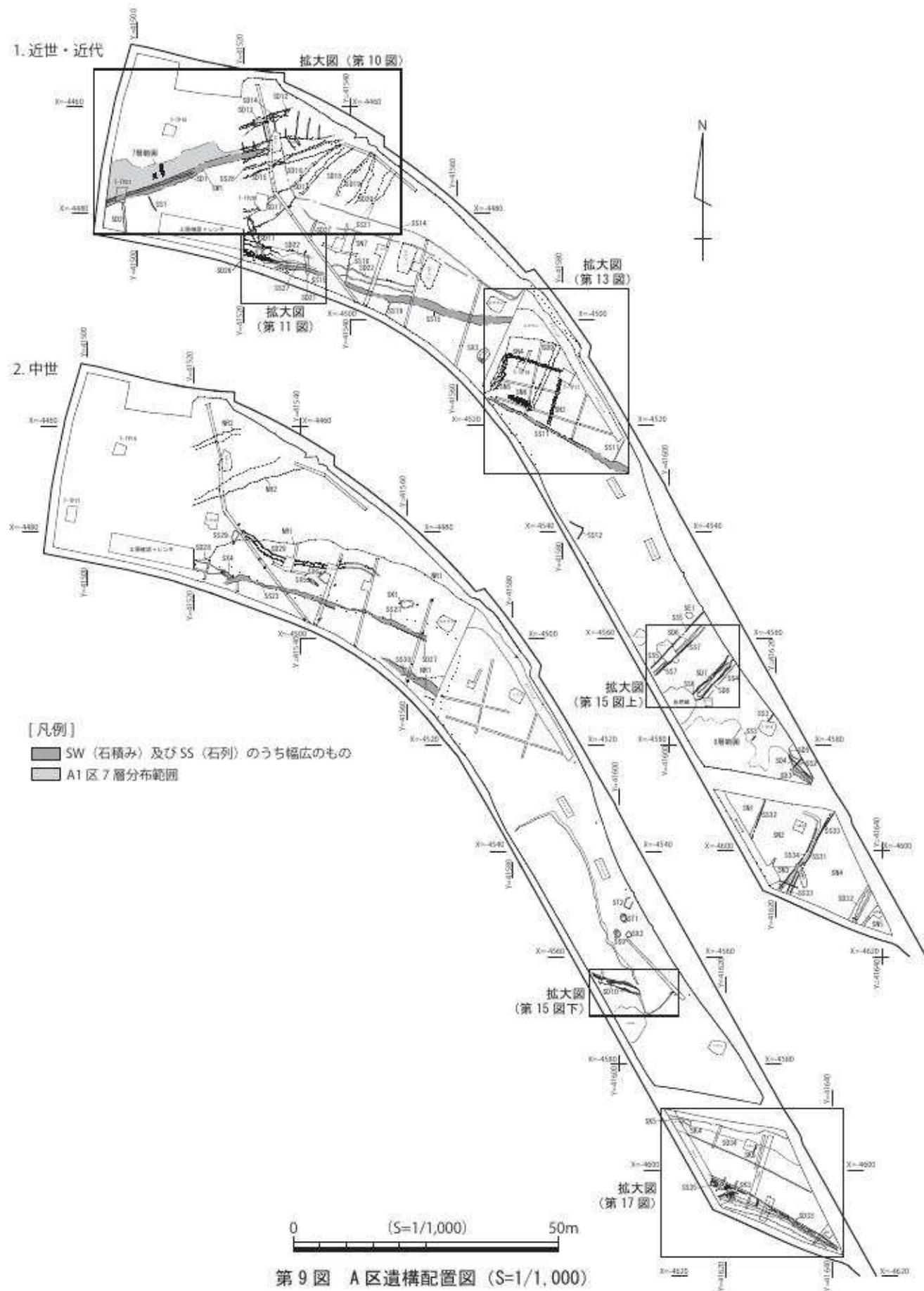
A2区北のSD12下で検出した溝状遺構。SD14→SD13→SD12の順に切り合う。北東一南西方向に延長10.5m、幅4.7m前後で伸びる。南の立ち上がりには石積みが伴い、A1区のSW1に対応すると考えられる。遺物は出土していない。

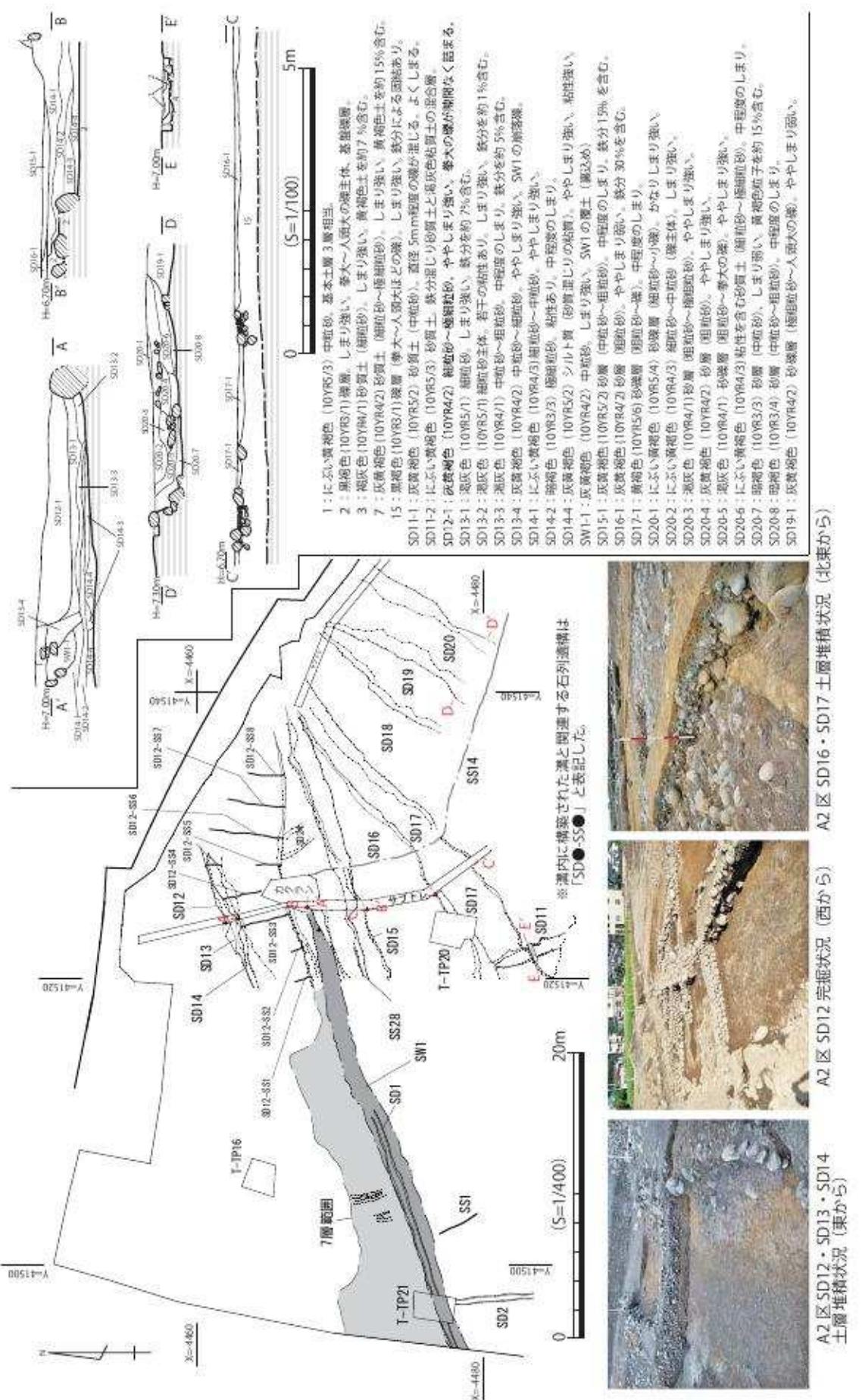
#### ・ SD14(第9図1・第10図)

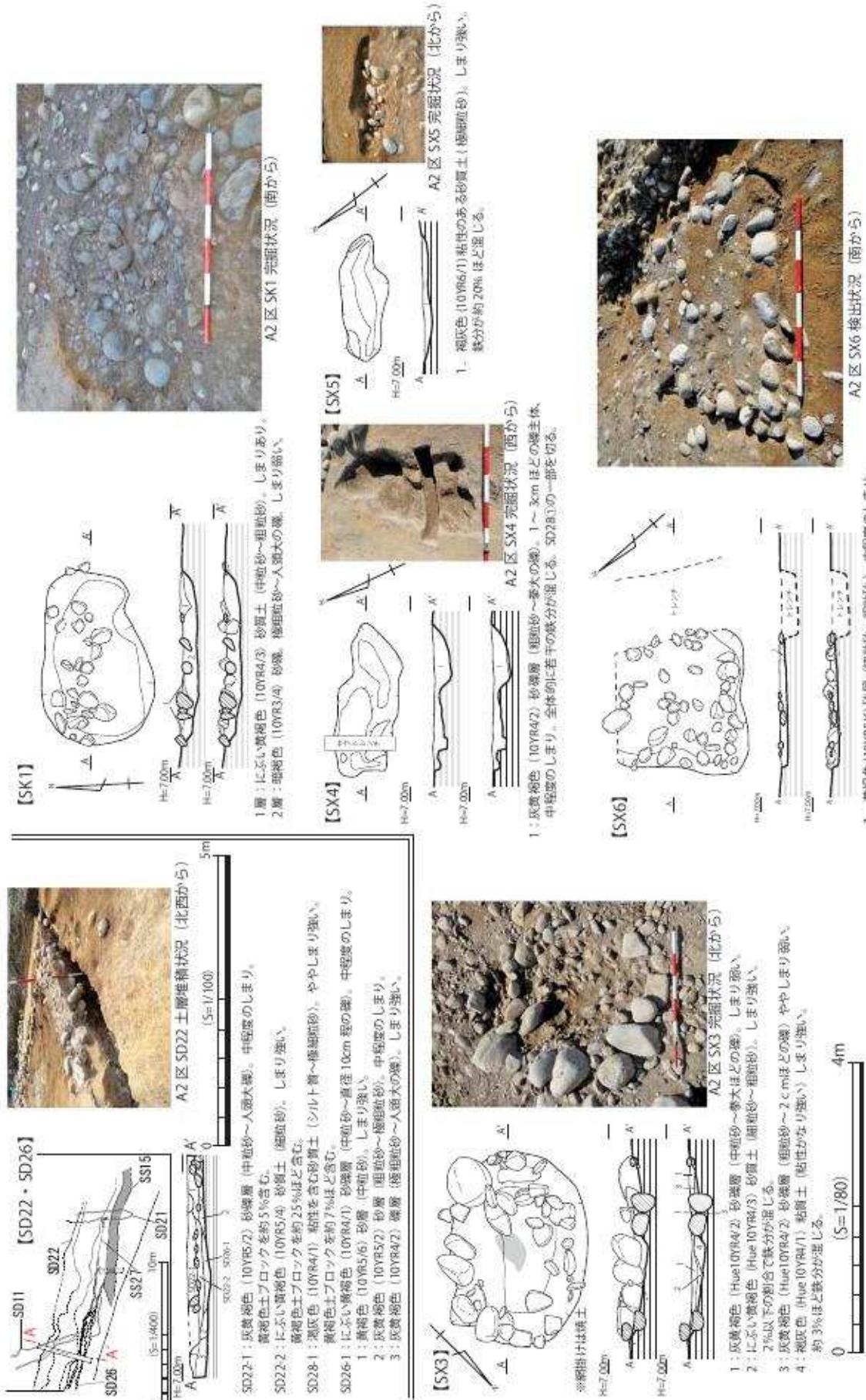
A2区北のSD13・SD15下で検出した自然流路。SD14→SD15→SD13の順に切り合う。北東一南西方向に延長19.0m、幅8.0～8.4mに伸びる。埋土はきめの細かい砂質土で、部分的にラミナが発達することから、自然堆積層と思われる。A1区では、基底面には粘質土が堆積し、A1区7層に対応するものか。遺物は出土していない。

#### ・ SD15～SD20(第9図1・第10図)

A2区北の基盤碟層で検出した自然流路。砂質土や碟を埋土とし、全体的に浅く立ち上がりも緩やかなことから、自然流路と考えた。北東一南東方向に八手状に伸びる。SD18が最も古く、これより北はSD18→SD17→SD16→SD15、南はSD18→SD19→SD20と切り合う。遺物は出土していない。







第11図 A1～A2区 SD・SK・SS遺構実測図②(S=1/80・1/100・1/400)



図版1 A1～A2区 SD・SS・NR 遺構写真

・SD22(第9図1・第11図)

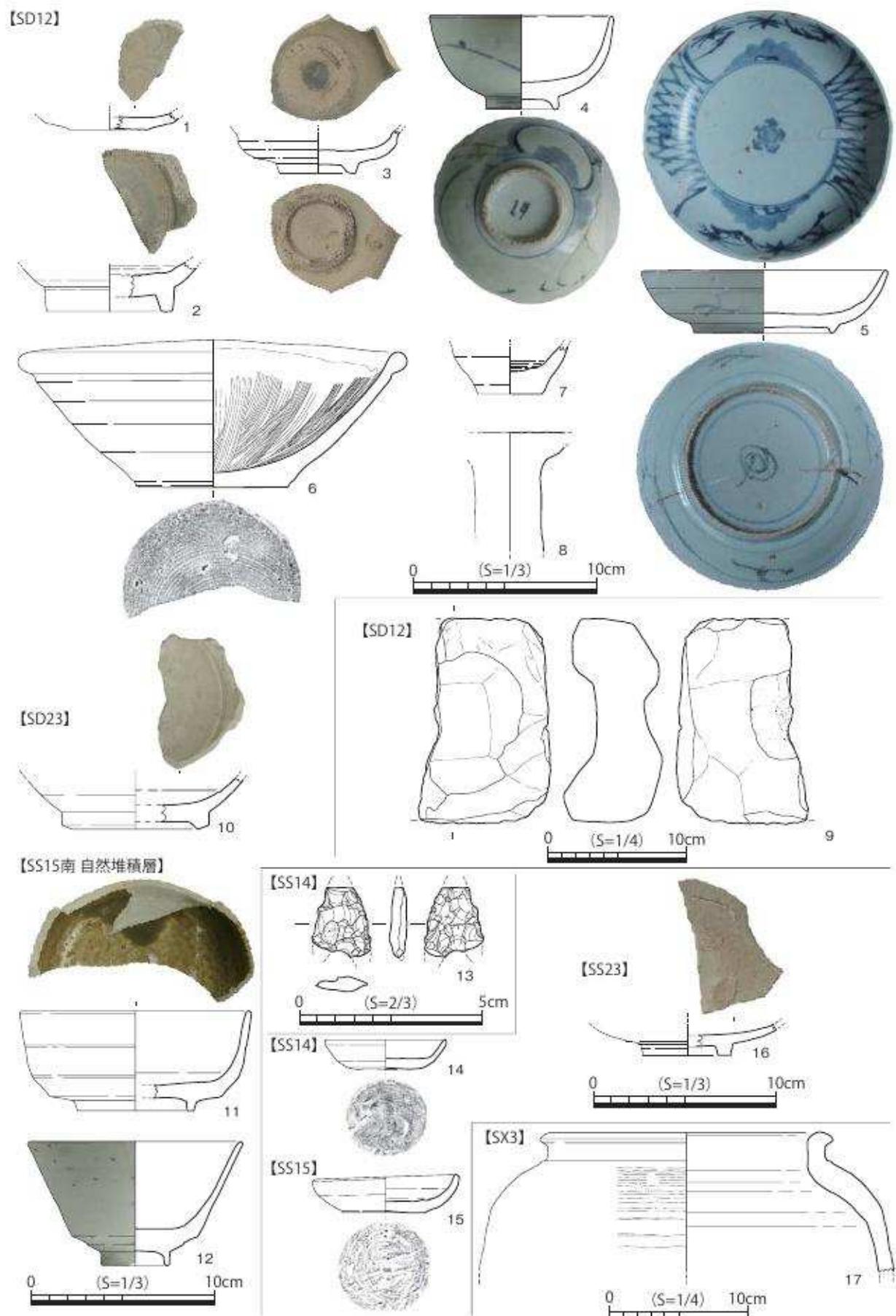
A2区南の1層上面(第7図 B-B'断面)で検出した溝状遺構。北西—南東方向に延長33m、幅1.2~2.2mに渡って断続的に検出した。深さは0.1~0.2mと浅く、埋土は砂礫が堆積する。遺物は出土していない。

・SD27(第9図2・第11図)

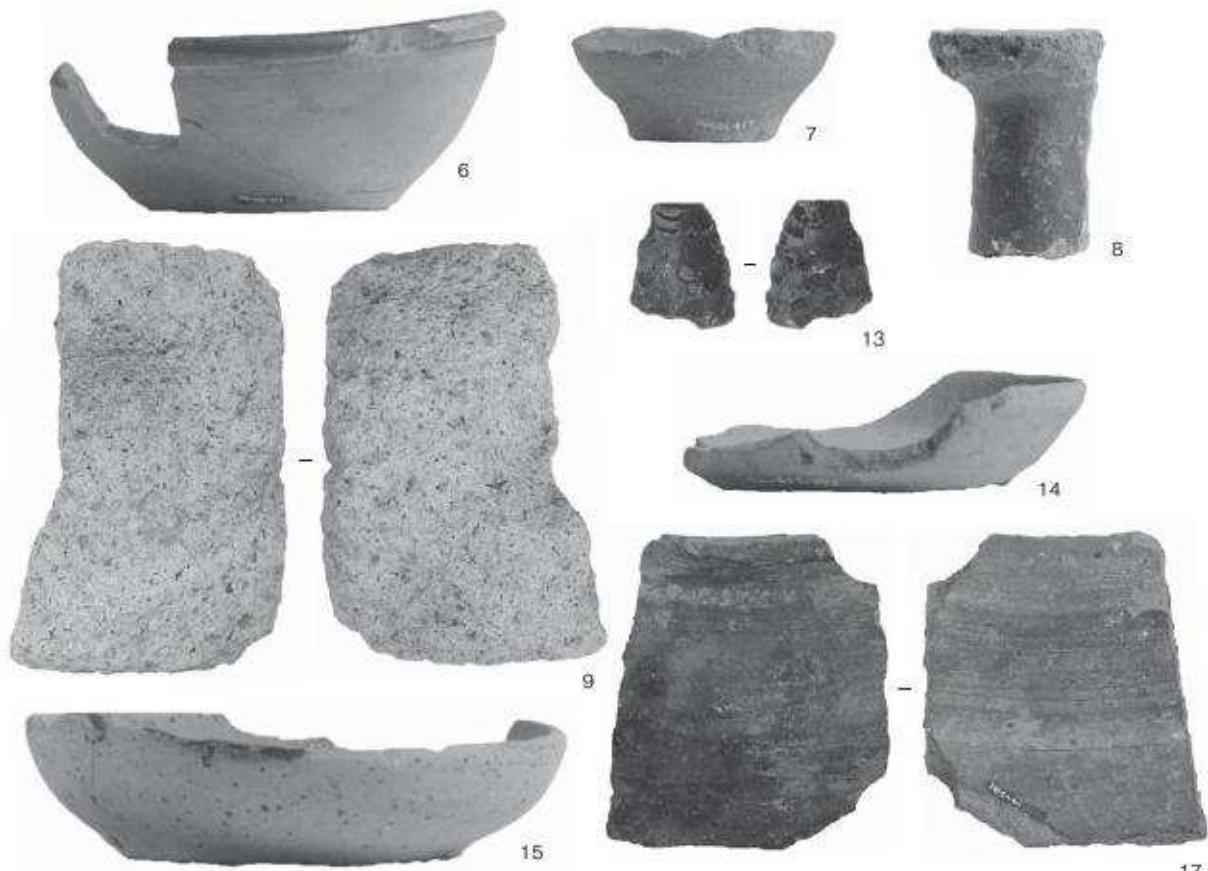
A2区南のSD22下で検出した溝状遺構。北西—南東方向に延長30m以上、幅6m、深さ0.3mを確認した。北側・南側の立ち上がりにはSS23・SS30の石列が伴う。遺物は出土していない。

・SD29(第9図2)

A2区中央で検出した溝状遺構。湾曲しながら東西方向に延長28m以上、幅0.7~1.0m、深さ0.1m程



第12図 A1～A2区 SD・SS・SX出土遺物実測図 (S=2/3, 1/3, 1/4)



図版2 A1区～A2区 SD・SS・SX出土遺物

第3表 A1～A2区 SD・SS・SX出土遺物観察表

番号	遺物名前	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考			
1	白磁・瓶	A1区4650	SD12・1層	-	4.2	0.9	中国				
2	白磁・瓶	A1区4650	SD12・1層	-	6.8	2.7	中国				
3	近世陶器・瓶	A1区4650	SD12・1層	-	4.1	2.4	肥前				
4	近世陶器・糞便瓶	A2区4652	SD12・1層	9.9	3.9	5.1	肥前				
5	近世陶器・糞便瓶	A1区4650	SD12・1層	13.4	7.6	3.4	肥前				
6	古世陶器・壺跡	A1区4650	SD12・1層	15.6	5.9	5.9	肥前				
8	近世陶器・トナン	A2区4650	SD12・1層 (玉移利町中筋所)	-	-	(6.4)	肥前				
10	白磁・瓶	A2区4852	SS23	-	8.0	2.8	中国				
11	近世陶器・糞	A2区4854	SD25・1層	12.4	6.4	5.4	肥前				
12	近世陶器・瓶	A2区4854	SD25D・1層	11.5	3.5	6.7	肥前				
14	土師器・小皿	A2区4854	SS14	6.5	4.3	1.6	—				
15	土師器・小皿	A2区4854	SS15南側(落ち込み部分)	8.0	4.5	2.1	—				
16	唐津焼・瓶	A2区4852	SS23	-	4.8	1.7	肥前				
17	近世陶器・甕	A2区4650	SS3内埋土	19.8	-	11.0	肥前				
調査 番号	出土区グリッド	層位	種類	部位	体積			測量	構成	付土	備考
7	AT1A網50	SD12・1層	角閃石岩・鐵	井戸底	1.54	0.98	157.61	母系 固形	良好	黒色粘子、砂粒	
調査 番号	器種	出土区グリッド	層位	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考		
9	不明石製品	A2区4652	SD12・南岸	角閃石安山岩	14.8	96.0	71.0	1,105			
13	石版	A2区4854	SS14	黒曜石	19.0	16.0	5.0	1,29			

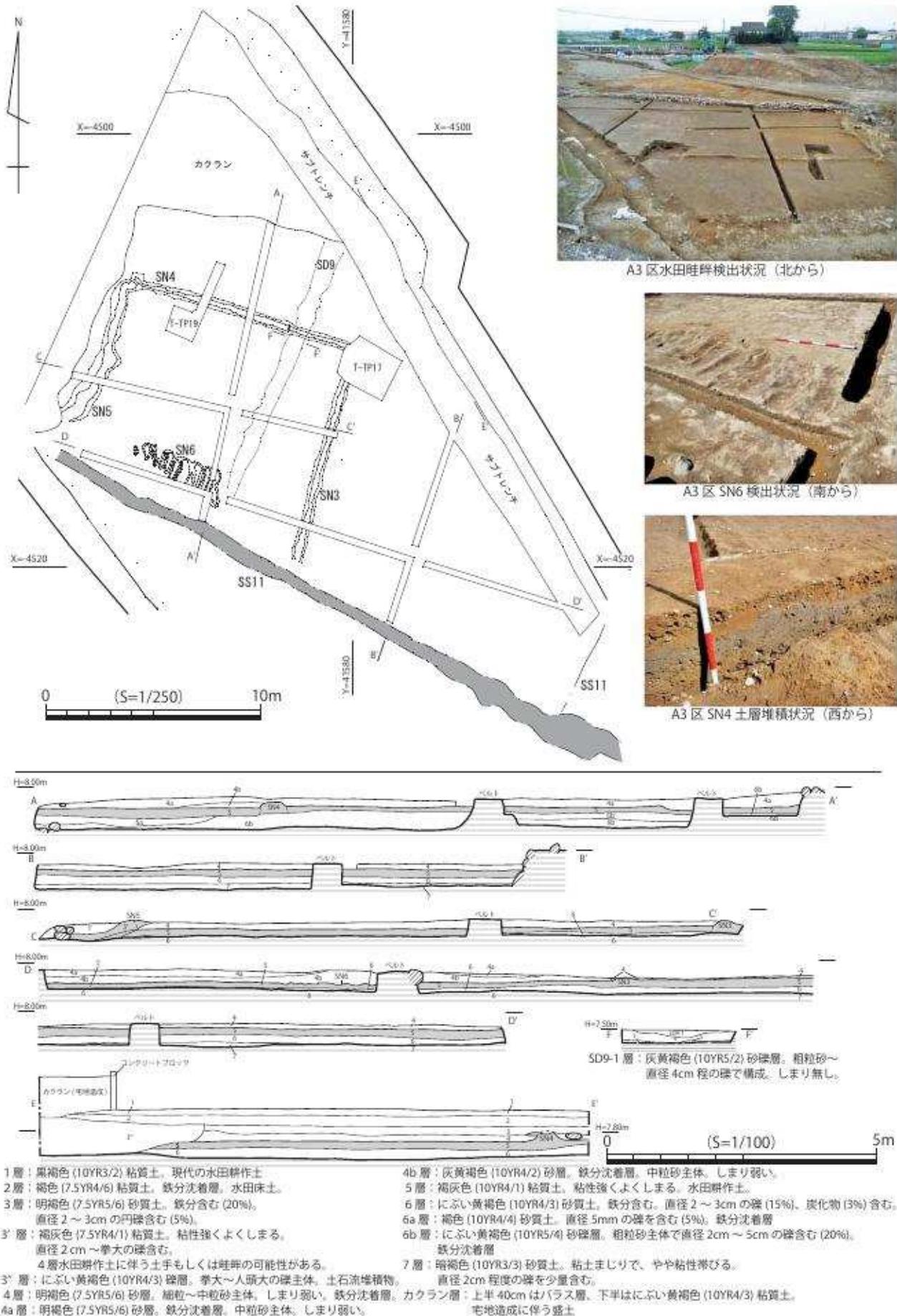
で伸びる。SS21南を併走しており、これに伴う溝状遺構か。遺物は出土していない。

#### ・SS14(第9図1)

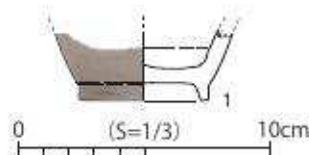
A2区中央で検出した石積み。現代の水田造成に伴う石積みの基礎であるが、底部系切りの小皿が出土したため(第12図14)、近世以前まで遡ると考えた。北西—南東方向で屈曲しながらも延長57m確認した。人頭大の円碟を積み上げている。

#### ・SS15(第9図1)

A2区南の1層上面(第7図 C-C'断面)で検出した石列。SD22と北西—南東方向に延長49m、幅0.8~1.6mで、SD22と併走する。断面の観察ではSD22と同時並存でも矛盾はなく、その場合 SS15は水田畦畔



第13図 A3区水田遺構実測図 (S=1/100・1/250)



第14図 A3区水田遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

第4表 A3区水田遺構出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地区	遺構・層位	口幅[cm]	底幅[cm]	底高[cm]	生産地	備考
1	古土器類・漆	A3(45208)	5層・水田層	-	4.7	3.9	製造	

の基礎、SD22は用水路と推測できる。土師器小皿1点が出土したほか(第12図15)、南側に隣接する自然堆積層から近世陶磁器が出土している。(第12図11・12)。

・SS23(第9図2)

A2区南のSS15下で検出した石列。北西—南東方向に延長40m、幅0.5~1.2m残る。人頭大の碟を1段列状に配置している。SD27の北岸にあたる。砂目跡が残る陶器碗出土(第12図16)。

・SS30(第9図2)

A2区南東隅で検出した石列で、北西—南東方向に延長12m、幅1.0~1.8mで伸びる。SS23と併走しSD27の南岸となる。人頭大～拳大の碟を帯状に配置したと考えられるが、乱れが激しく規則性は弱い。遺物は出土していない。

・SS21(第9図1)

A2区中央で検出した石列。SS14の南側を併走する。延長45m以上確認した。人頭大の扁平な円碟を列状に配置している。SS14以前の造成時の石積みと考えられる。遺物は出土していない。

・SK1(第9図2・第11図)

A2区東側で検出した廃棄土坑。長軸長2.4m、短軸長1.5mの不整楕円形で、深さ0.2mの掘り込みが伴う。埋土には小碟～人頭大の碟を含む。開墾時に碟を集積した廃棄土坑か。遺物は出土していない。

・SX3(第9図1・第11図)

A2区東端で検出した不明遺構。基盤碟層を浅く掘りこみ、拳大～人頭大の円碟を楕円形に配列する。長軸長2.7m、短軸長1.9m、深さ0.2mで中央には焼土が薄く残る。近世陶器甕が出土している(第12図17)。

・SX4(第9図2・第11図)

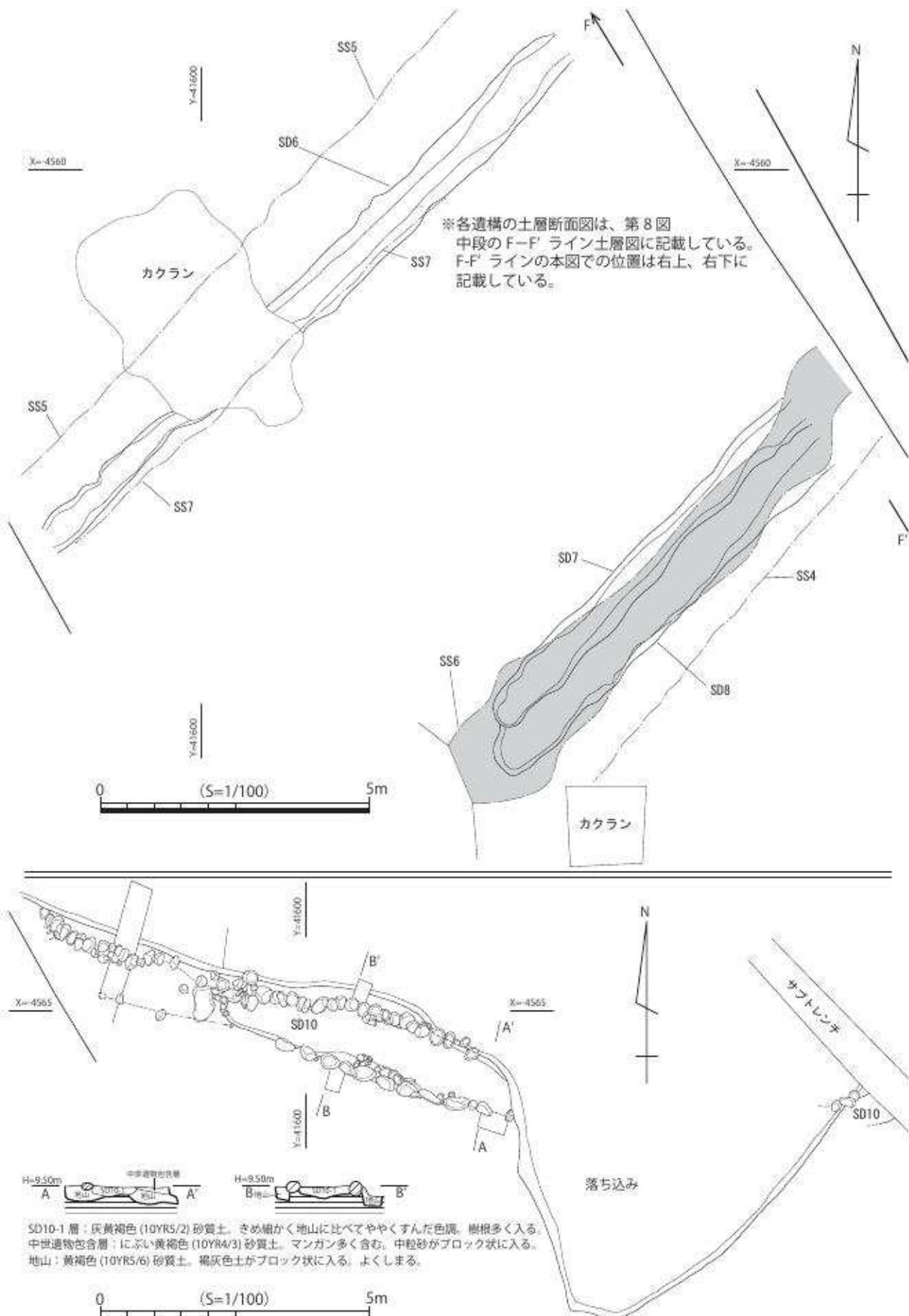
A2区南西隅でSD28を切る形で検出した不明遺構。長軸長2.1m、短軸長0.8mの不整楕円形で、床面は凹凸が激しい。遺物は出土していない。

・SX5(第9図2・第11図)

A2区で検出した不明遺構。長軸長1.7m、短軸長0.7mの不整楕円形で、深さ0.1mの浅い掘り込みが伴う。遺物は出土していない。

・SX6(第9図2・第11図)

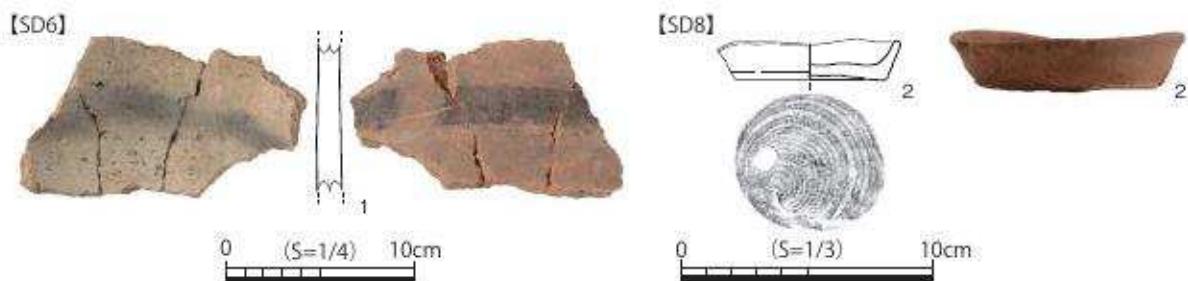
A2区のSX5東隣で検出した不明遺構。削平で一部消失するが、一辺1.7mほどの隅丸方形で、深さ0.1m。拳大の円碟を充填する。床面はピット等の検出はなかった。開墾時に碟を集積した廃棄土坑か。遺物は出土していない。



第15図 A3区 SD・SS 遺構実測図 (S=1/100)



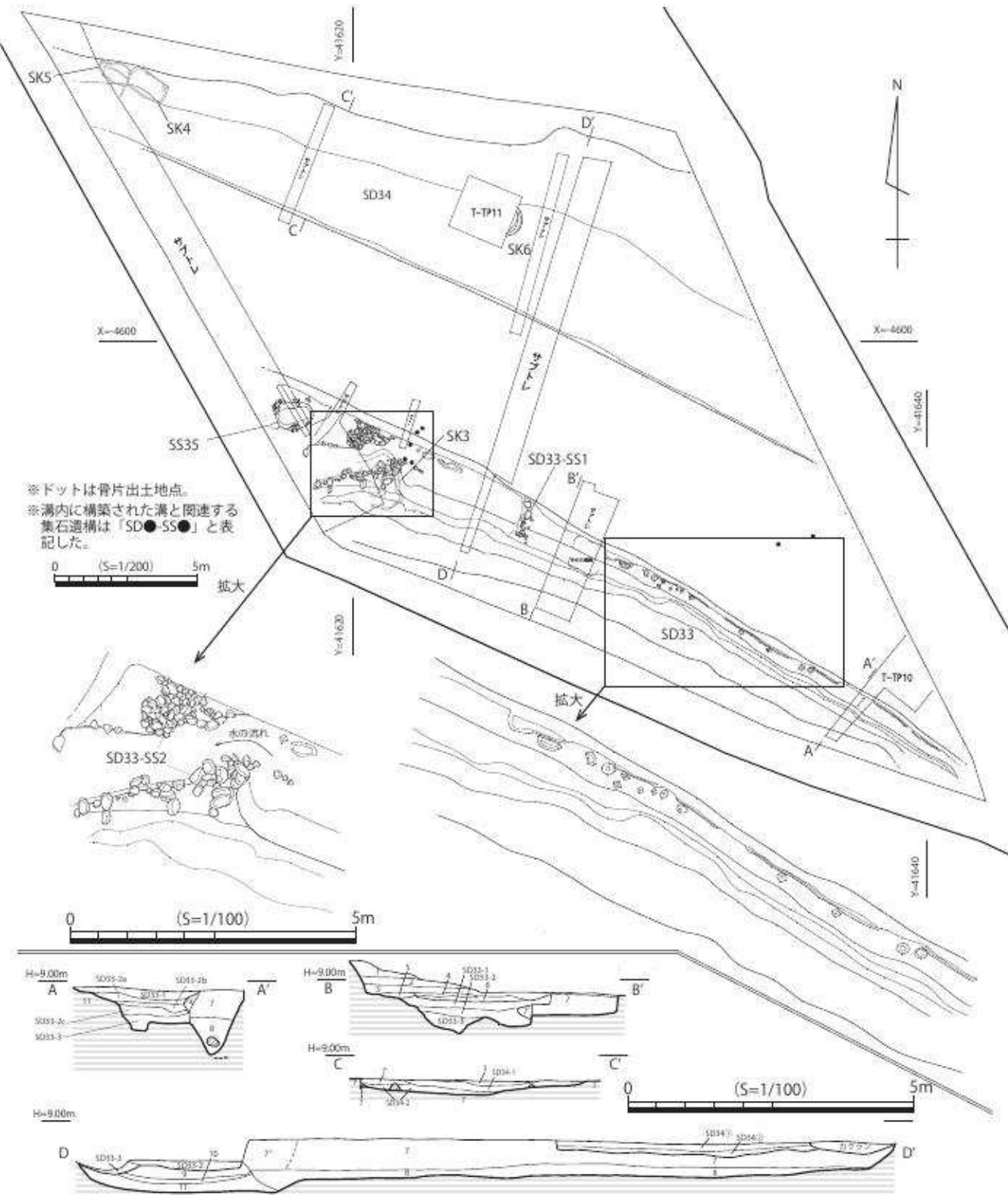
図版3 A3区 SD・SS 遺構写真



第16図 A3区 SD・SS 出土遺物実測図 (S=1/3, 1/4)

第5表 A3区 SD・SS 出土遺物観察表

番号	遺物名称	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
1	近世道路・甃	A3IA546B	SD6	-	-	-	—	
2	土師器・小皿	A3IX566B	SD8	7.3	6.8	1.7	—	底部斜切り



- 褐色 (10YR4/1) 粘質土 (シルト質～1cm程度の小礫)。現代の水田耕作土。
  - 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 (極細粒砂～粗粒砂)。水田耕作土・床土。約2%マンガンが混じる。
  - 暗褐色 (10YR3/3) 砂混じりの粘質土 (極細粒砂～2cm程度の小礫)。
  - 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (細粒砂)。約2%マンガンが混じる。
  - 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土 (細粒砂)。約5%マンガンが混じる。
  - 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (細粒砂～粗粒砂)。約10%マンガンが混じる。
  - 黒褐色 (10YR3/1) 砂疊層 (粗粒砂～拳大の礫)。2cmほどの玉砂利主体。
  - 褐色 (10YR4/1) 砂質土 (細粒～2cm程度の小礫)。SD33造成時に7層が崩れて堆積した層か。
  - にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂疊層 (5cm程度の円礫)。7層より礫大きい。
  - 褐色 (10YR4/4) 砂疊層 (極粗粒砂～2cm程度の礫)。自然堆積層。
  - 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂層 (中粒砂主体)。直徑1cm程度の礫が混じる(5%)。自然堆積層。
  - 褐色 (10YR4/1) 砂層 (粗粒砂～1cm程度の礫主体)。自然堆積層。
  - にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂層 (粗粒砂主体)。自然堆積層。
- SD33-1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 (細粒砂)。  
 SD33-2. 暗赤褐色 (5YR3/3) 砂質土 (中粒～粗粒砂)。約25%マンガンが混じる。  
 SD33-2a. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土 (中粒砂)。鉄分・マンガン多く含む。  
 灰褐色粘土との混合層。  
 SD33-2b. 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土 (細粒砂)。マンガン少ない。  
 SD33-2c. 褐色 (7.5YR4/6) 砂質土 (粗粒砂)。鉄分・マンガン多く含む。  
 SD33-3. 暗褐色 (10YR3/2) 砂質土 (粗粒～中粒砂)。約3%マンガンが混じる。  
 黑褐色粒子を含む。  
 SD34-1. 褐色 (10YR4/4) 砂質土 (細粒砂主体)。マンガン沈着層。  
 SD34-2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 (中粒砂主体)。  
 カクラン、拳大の礫主体。マンガン固結層。水田耕作時の搅乱か。

第17図 A4区 SD・SS遺構実測図 (S=1/200・1/100)



図版4 A4区 SD・SS 遺構写真

## ②A3～A4区の遺構

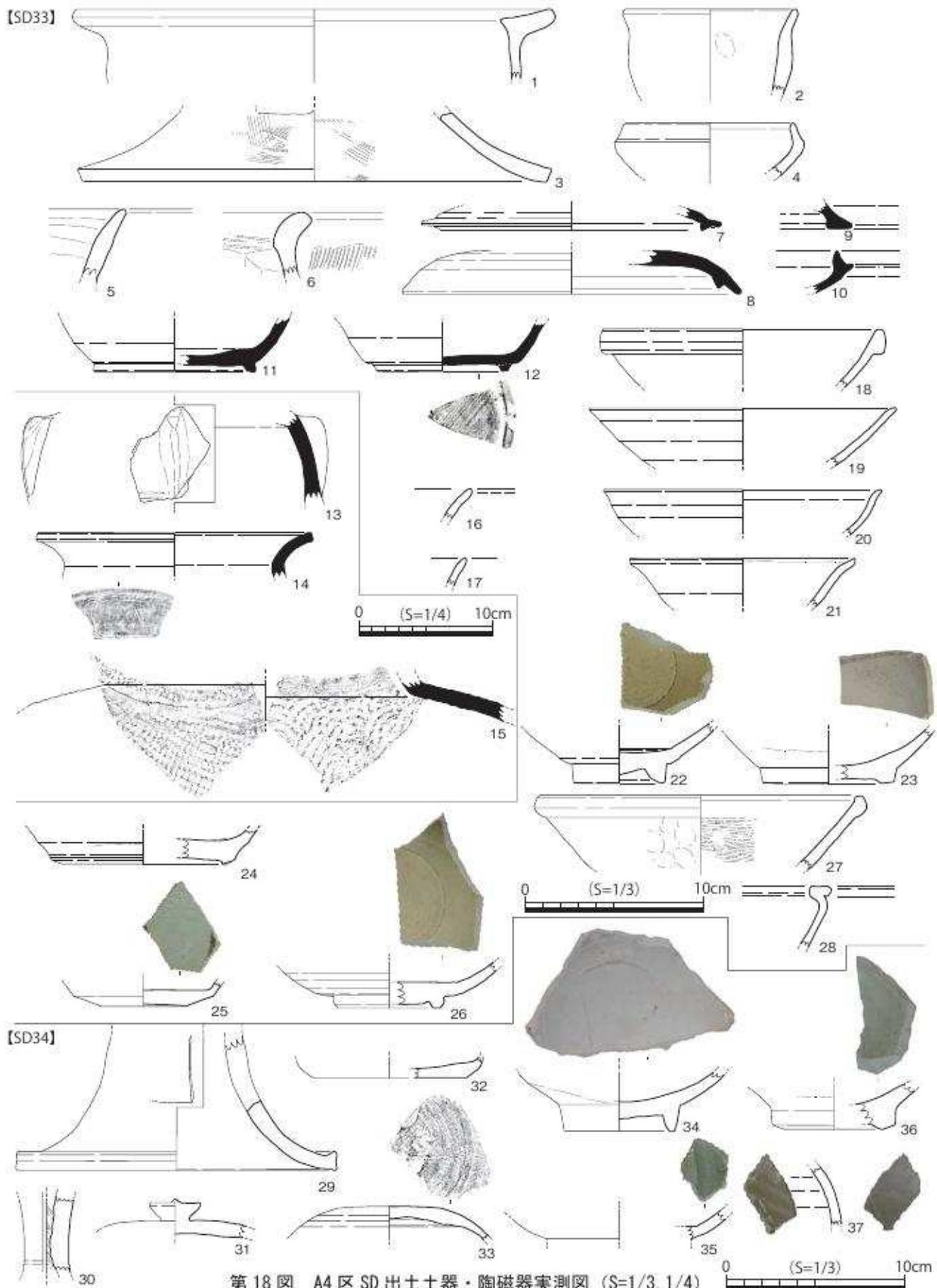
### ・SN3～SN6(第9図1・第13図)

A3区北端で検出した水田畦畔。範囲確認調査で検出した水田畦畔の広がりを確認できた。畦畔は、鉄分が沈着した細粒砂～中粒砂(4層・4b層)に覆われた状態で、高さ0.1mほどの粘土層の高まりとして観察できる。畦畔から連続して粘質土が水平に堆積しており、水田耕作土であろう。水田の南端には石列SS11が東西に伸びるが、この基底面から粘土が広がることから、水田とSS11は一連の遺構であり、石積みを伴う造成により平坦面を形成し、水田の造営が行われたと推測できる。

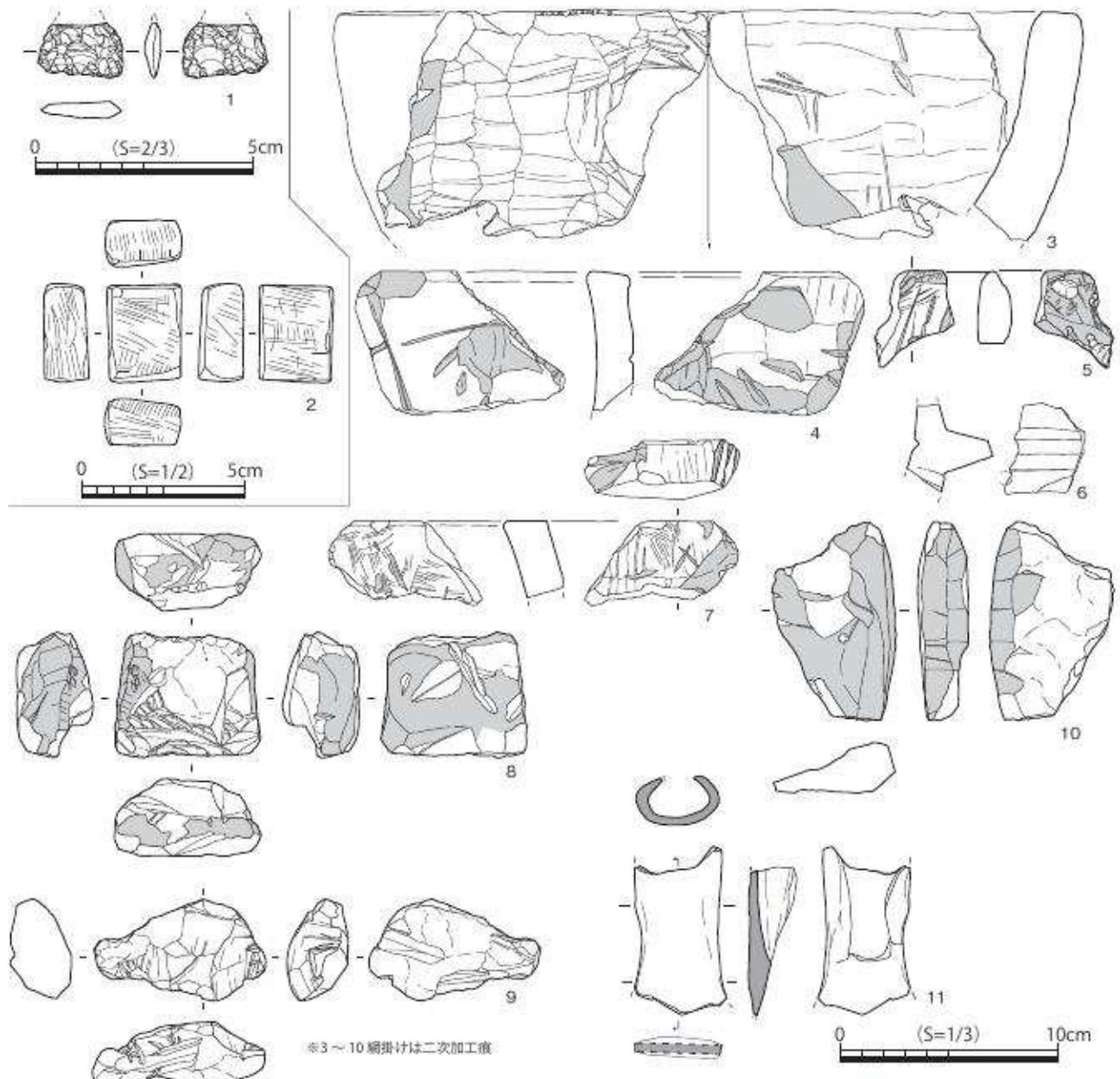
SN3は南北延長7.5m、SN4は東西延長10m、SN5は南北延長7mで、幅はいずれも0.5mほど、これらに囲まれた水田の面積は72.5m<sup>2</sup>である。SN6は南北に伸びる短く深い溝状遺構が東西に連続したもので、畝が伴う畠遺構と考えられる。5層のSS11付近で近世肥前磁器の瓶底部が出土した(第14図)。

### ・SD6(第9図1・第15図)

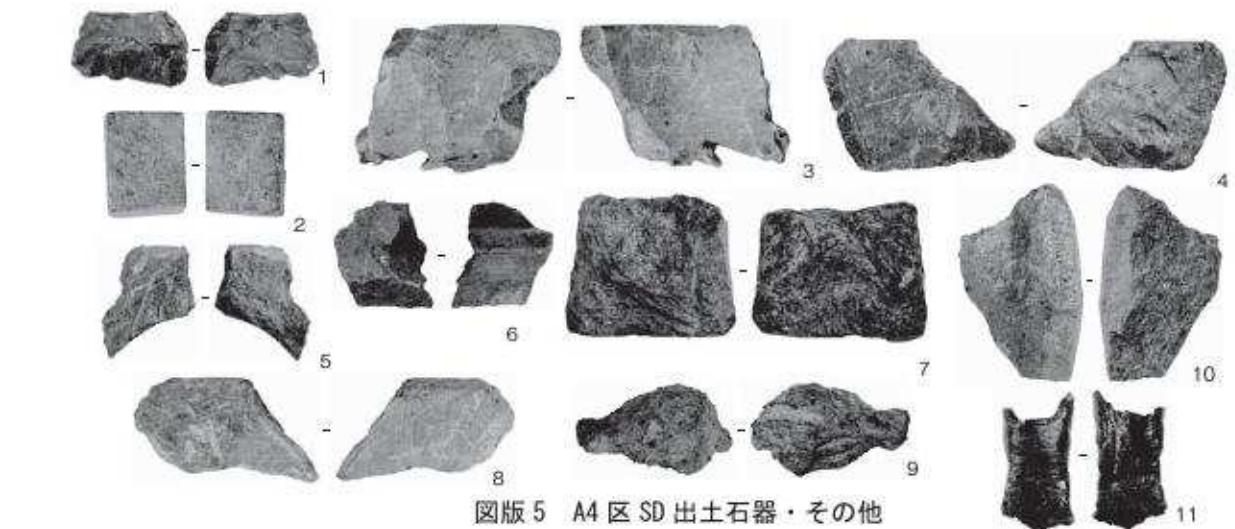
A3区中央で検出した溝状遺構。近現代の畦畔の一部と考えられる石列SS7掘削後に検出し、東壁土層の8b層から掘り込む。SD10の一部を切る。北東～南西方向に延長13.5m、幅0.8m、深さ0.4mで伸びる。素焼きの大型陶器胴部片が出土している(第16図1)。



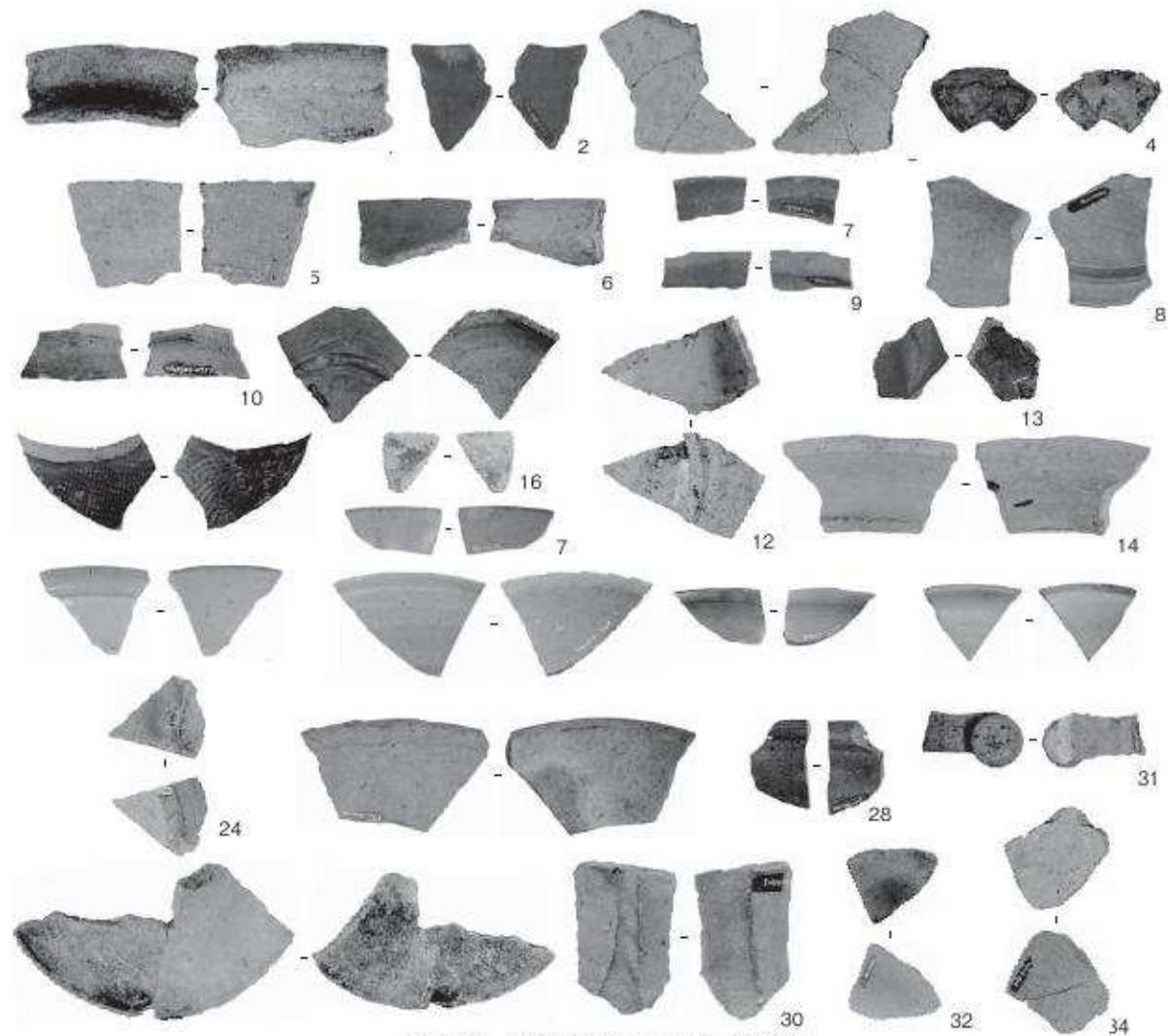
第18図 A4区SD出土土器・陶磁器実測図 (S=1/3, 1/4)



第19図 A4区SD出土石器・その他実測図 (S=2/3, 1/2, 1/3)



図版5 A4区SD出土石器・その他



図版6 A4区SD出土土器・陶磁器

・SD7・SD8・SS6(第9図1・第15図)

A3区中央で検出した石列及び溝状遺構。東壁土層の7層を掘り込んで、北東—南西方向に延長10m程確認した。溝状遺構はSD8→SD7の順に切り合っており、いずれも深さは0.2m前後と浅い。SD7に拳大～人頭大の円碟を詰めた遺構がSS6である。水田畦畔の基礎と考えられる。SD8で底部糸切りの土師器小皿が出土した(第16図2)。口径7.3cmと小型で、14世紀以降であろう。

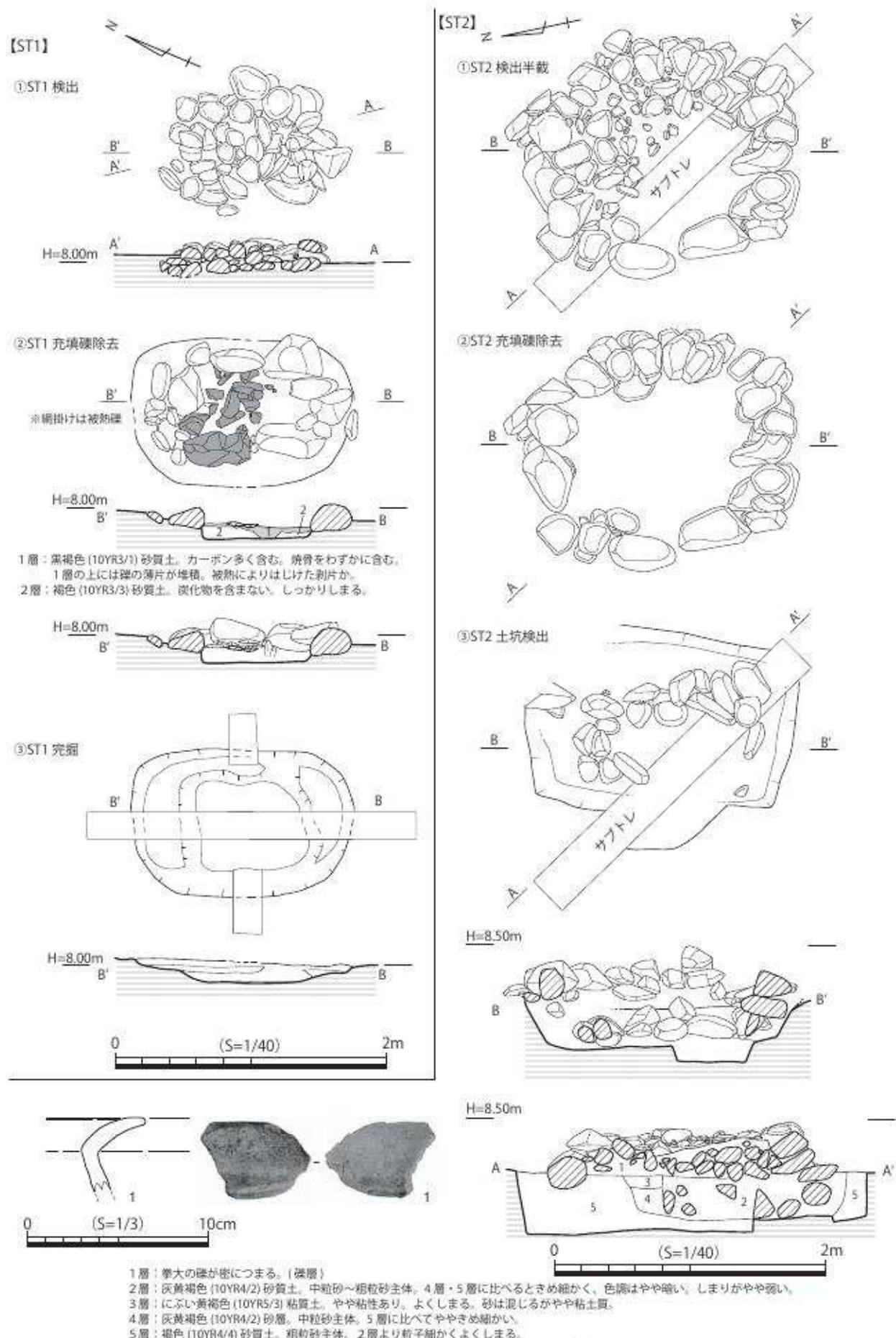
・SD10(第9図2・第15図)

A3区中央で検出した溝状遺構。東壁土層11層を掘り込んで、北西—南東方向に延長9m、幅1.5m前後、深さ0.2mで伸びる。SD6および中世の落ち込みに切られる。両岸に人頭大の円碟を1～2列帯状に配置する。遺物は出土していない。

・SD33・SD34(第9図2・第17図)

A4区南端で検出した溝状遺構。西壁土層4層(第8図G-G')を掘り込んで、北西—南東方向に併走する。SD33は延長25m、幅4m、深さ0.5m、SD34は延長26m、幅6.5m、深さ0.1mである。いずれも南東から北西方向に床面が傾斜している。SD33・34横断トレンチによる土層観察では、SD33南側、SD34北側の立ち上がりはなだらかであるが、SD33北側、SD34南側の立ち上がりは垂直に近い。これと関連して、SD33床面では、北側の立ち上がりに沿って小ピットや小規模な溝状遺構を検出していて、矢板や杭に

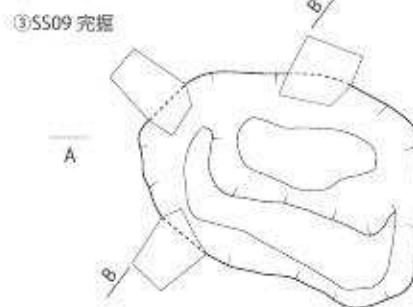
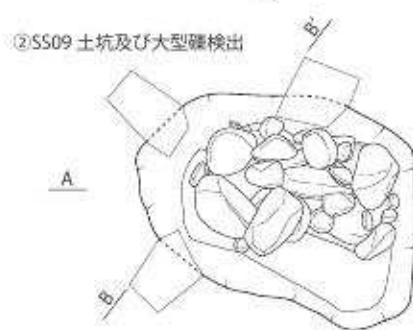
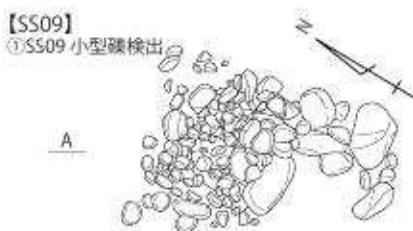




第20図 A3～A4区ST関連遺構実測図①(S=1/40)

第7表 A3区ST出土遺物観察表

実証 番号	出土品名	層位	器種	部位	性質	内面	外面	裏面	焼成	鉄土	備考
1	AS509-6	S12・下層	陶生・漆・漆	口縁	外底	糊付	ナフ	ナフ	無	無	無



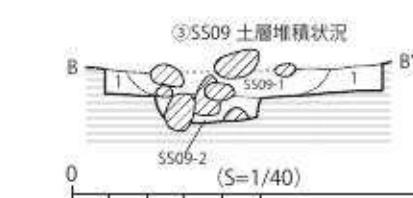
H=8.50m



H=8.50m



H=8.50m



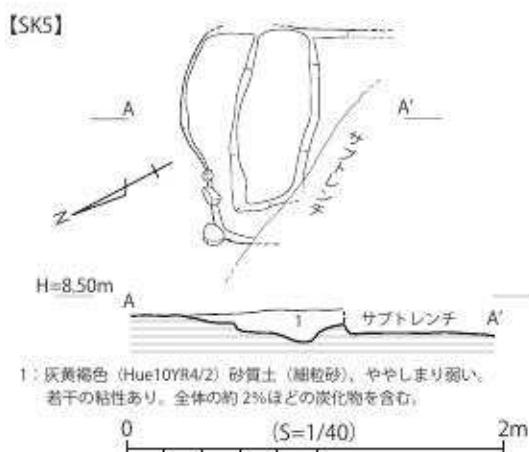
0 (S=1/40) 2m

SS09-1. 暗褐色(10YR3/4)細粒砂。ややしまり強い。約3%程度の炭化物を含む。  
SS09-2. 暗褐色(10YR3/4)中粒砂～粗粒砂。中程度のしまり。直徑1～3cm程の  
小砾が多量に混じる。SS09-1より色調が若干暗め。

1. 暗褐色(10YR3/3)細粒砂～中粒砂。しまり強い。調査区東壁土層の9層相当。

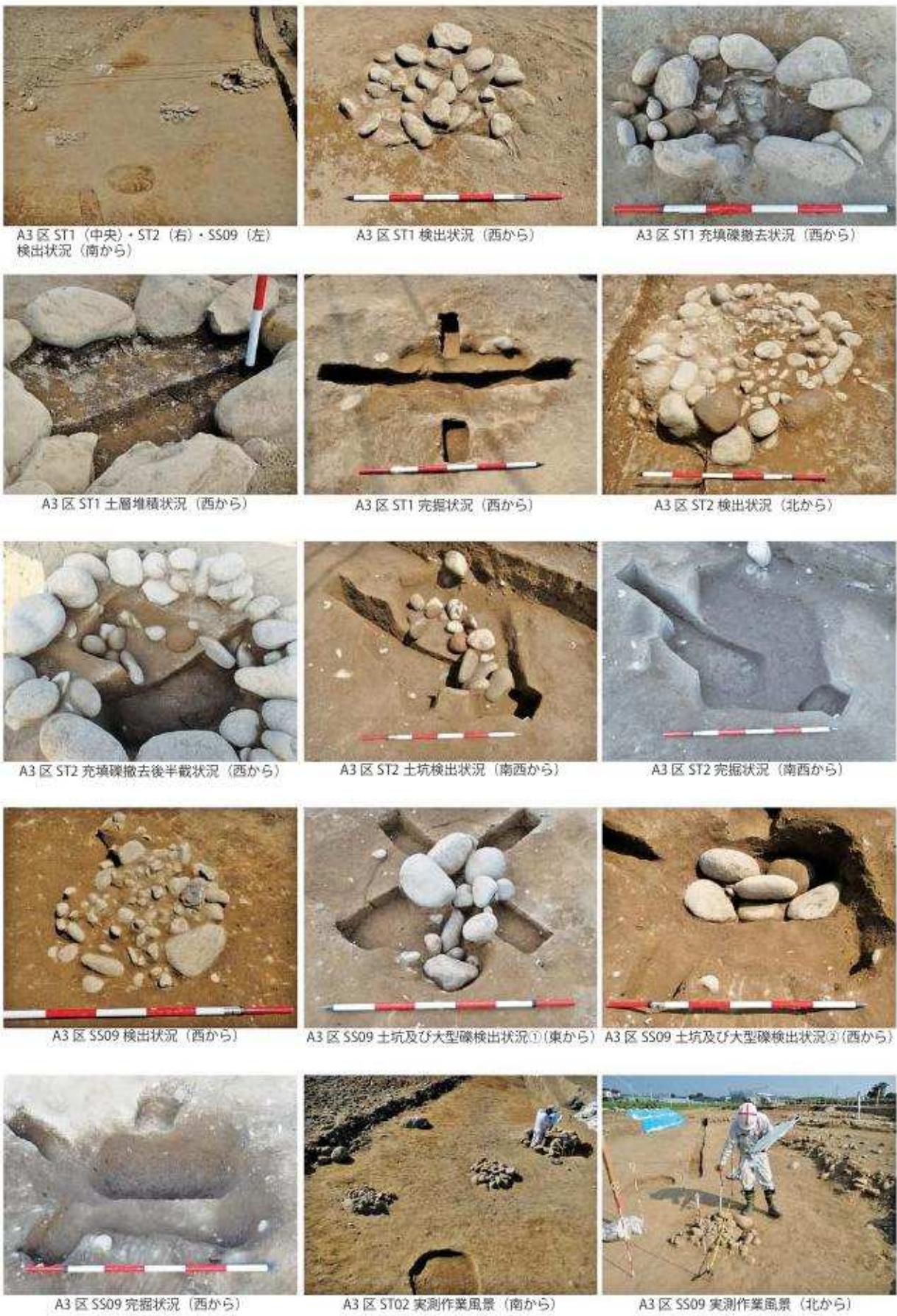


A4区 SK4 半截 (西から)

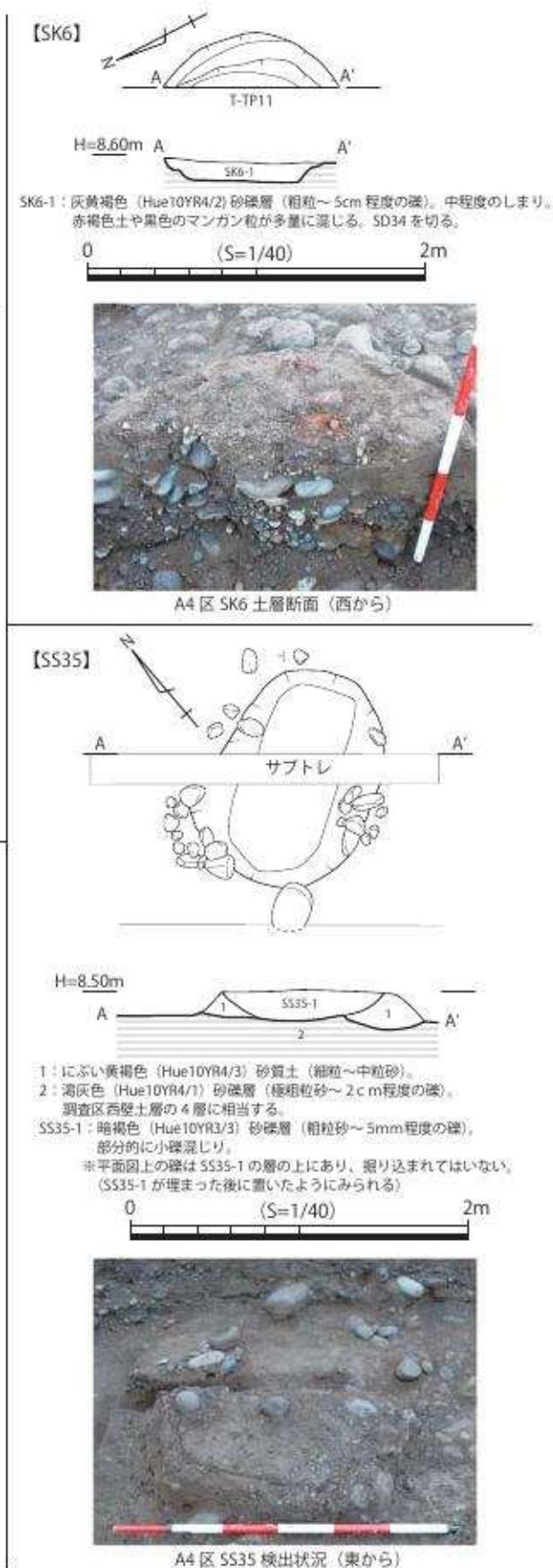
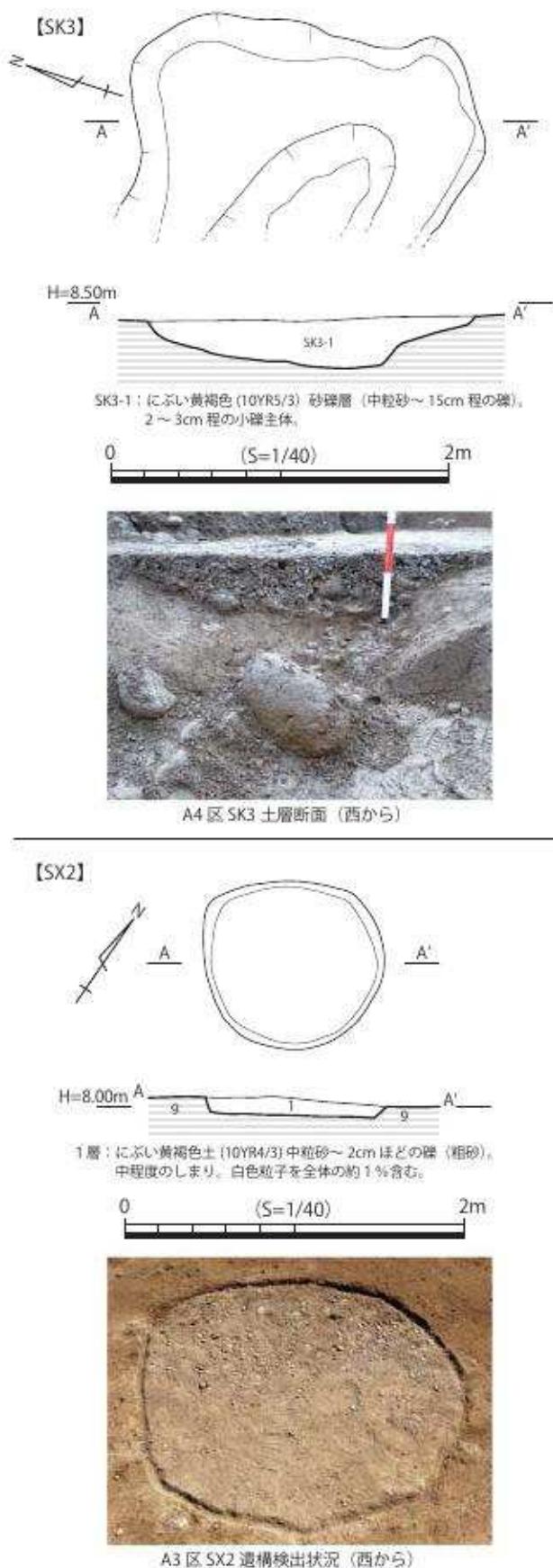


A区 SK4・SK5 検出状況 (北から)

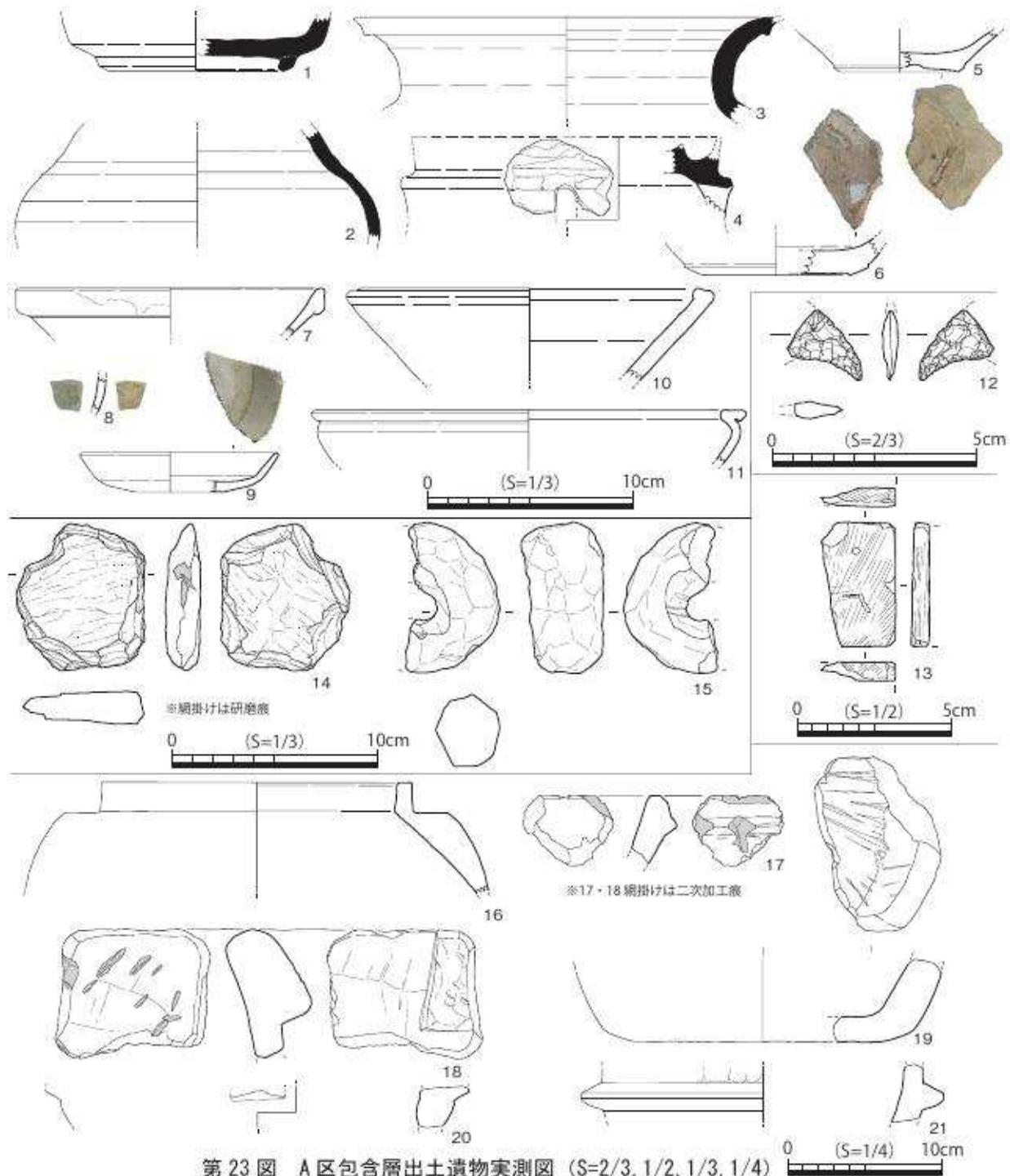
第21図 A3～A4区ST関連遺構実測図②(S=1/40)



図版7 A3区 ST関連遺構写真



第 22 図 A3・A4 区 SK・SS・SX 遺構実測図 (S=1/40)

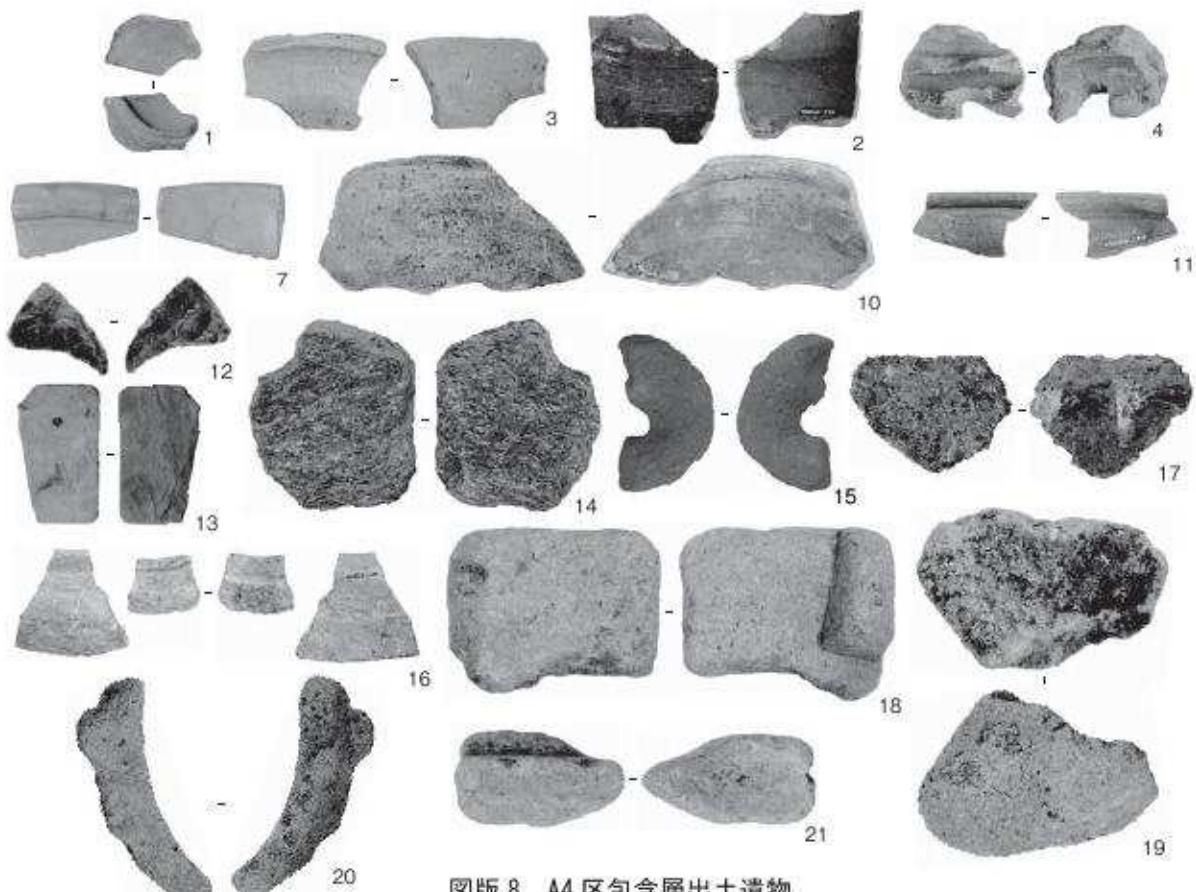


第23図 A区包含層出土遺物実測図 (S=2/3, 1/2, 1/3, 1/4)

認した。土坑の主軸は北西—南東方向である。土坑の輪郭に沿って人頭大の碟を長方形に配置する。また、配置された碟の一部は被熱により変色し、この碟が被熱してはじけた石片を土坑検出面にばら撒いていた。土坑内には炭化物が充填され、焼人骨片も散見された。また、土坑内の炭化物の放射性炭素年代測定を実施し、 $620 \pm 20$ 年BPの年代を得た(第4章参照)。

#### ・ST2(第9図2・第20図)

A3区中央で検出した土坑墓。ST1の北東約3mに位置する。長軸長2.2m、短軸幅1.8mの楕円形に人頭大の碟を楕円形に配列し、内部に拳大の碟を充填した状態で検出した。これらの碟群を除去すると、北西—南東方向に長軸長2.0m、短軸長1.4mの長方形土坑を検出した。土坑内には人頭大の碟を「コ」



図版8 A4区包含層出土遺物

第8表 A区包含層出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地区	遺構・層位	口徑(cm)	底径(cm)	基高(cm)	生産地	備考
1	須恵器・壺	A4区6062	4層	-	8.8	2.5	-	
2	須恵器・瓶	A4区6062	4層	-	-	(5.2)	-	
3	須恵器・壺	A4区5056	4層	19.7	-	4.9	-	
4	須恵器・円面鏡	A4区6064	2 b層	16.11(英傍付)	-	(3.2)	-	
5	越州系青磁・壺	A4区6064	3 b層	-	6.6	1.9	中国	
6	越州系青磁・壺	A4区6062	2 d層	-	7.1	1.8	中国	
7	白磁・瓶	A4区5060	7層	14.6	-	2.3	中国	
8	鍵輪附器	A4区6062	2 d層	-	-	-	-	
9	龍里高足碗・白	A4区5060	4層	11.3	6.2	2.3	中国	
10	五管土管・繩目	A4区5056	下レンチ同層土	16.3	-	4.5	-	
11	陶器・鉢	A4区6062	4層	18.8	-	2.6	中国	

図版番号	器種	出土区グリッド	層位	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
12	石鏡	A2区5056	4層	馬鹿石	77.0	18.5	4.0	9.69	
13	石鏡	A2区5056	4層	ホルンフェルス	40.0	24.0	6.0	7.62	
14	円盤狀石器	A4区5058	4層	粘晶片岩	71.0	62.5	17.0	93.11	
15	有孔石製品	A2区4452	13層(縄層)	多孔質玄武岩	73.0	46.0	40.0	51.29	
16	経筒	A4区5060	南北ベルト下層	滑石	-	-	-	245.06	復元口径 16.4cm、器高 7.2cm
17	石鏡	A4区6062	3 b層	滑石	45.0	59.0	29.0	64.71	
18	石鏡	A4区5060	7層	滑石	83.0	101.0	55.5	444.45	
19	石鏡	A4区5460	南北ベルト砂礫層造土	滑石	-	-	-	360.91	復元底径 14.4cm、器高 6.3cm
20	石鏡	A4区5062	7層	滑石	-	-	-	120.66	月牙の径 25.4cm、器高 2.6cm
21	石鏡	A4区6062	南北トレーンチ西壁 4層	滑石	-	-	-	118.23	復元鏡径 23.5cm、器高 3.7cm

の字形に配列しており、木棺の裏込めと考えられる。土坑内の埋土は砂質土で、炭化物や人骨片、鉄釘等の遺物は出土しなかった。弥生土器が1点出土している(第20図1)。混入であろう。

#### ・SS09(第9図2・第21図)

A3区中央で検出した集石土坑。ST1の南西約3mに位置する。集石土坑であるが、ST1・ST2と等間隔で直線状に配列することから、これらと関連する遺構として報告する。検出時は、直径0.8mの円形に、拳大に満たない小碟が集積した状態であった。小碟撤去後、南北方向に長軸長1.5m、短軸長1.1mの不整椭円形の土坑を検出した。土坑は二段掘りで、人頭大の碟が密に詰まっていた。埋土はわずかに炭化物を含む細粒砂で、遺物は出土しなかった。

・ SK4(第9図2・第17図・第21図)

A4区北西端で検出した土坑墓。SD34埋没後に掘削される。SK5とわずかに切り合っており、SK4が新しい。長さ1.5m、幅0.8m、深さ0.15mの長方形で、埋土には炭化物を多く含み、焼骨片も多い。遺物は出土しなかった。

・ SK5(第9図2・第17図・第21図)

A4区北西端で検出した土坑墓。SD34埋没後に掘削される。サブトレンチで一部切られているが、長さ1.1m、現存幅0.95m、深さ0.15mである。二段掘りになっており、中央の長さ0.95m、幅0.45mの土坑が主体部と考えられる。埋土には炭化物を含むが、SK4ほど多くはない。遺物は出土しなかった。

・ SK3(第9図2・第17図・第22図)

A4区南端で検出した土坑。SD33-SS2埋没後に掘削される。現存長軸長2.0m、幅1.3m、深さ0.3mである。埋土は2~3cmの小円碟を主体とする砂碟である。遺物は出土しなかった。

・ SK6(第9図2・第17図・第22図)

A4区北半部で検出した土坑。試掘坑で切られるが、現存長1.0m、幅0.3m、深さ0.1mである。埋土にはマンガン粒を多く含む。遺物は出土していない。

・ SS35(第9図2・第17図・第22図)

A4区南西部で検出した集石土坑。SD33-SS2埋没後に掘削される。長軸長1.3m、短軸長1.0m、深さ0.15mの楕円形土坑の縁に沿って拳大の円碟を配置する。埋土は直径5mm程度の小碟を主体とする砂碟層で、遺物は出土しなかった。

・ SX2(第9図2・第22図)

A3区中央で検出した不明遺構。SS09の西2.5mに位置する。長軸長1.05m、短軸長1.0m、深さ0.1mのややいびつな円形を呈す。遺物は出土していない。

### ③包含層出土遺物(第23図)

1~4は須恵器である。1は壺底部で低い高台を貼り付ける。2は瓶。なで肩で頸部と胴部の屈曲は緩やかである。3は壺口縁部。頸部から口縁部にかけて強く外反する。4は円面硯。欠損著しいが、海部から外堤部と突帯及び脚柱部の一部が残る。脚部にはわずかに長方形透かしが残ることから圈足円面硯であろう。5・6は越州窯系青磁碗。5は蛇ノ目高台の底部でI類、6は高台が低く畠付や底部内面に目跡が残りII類であろう。7は白磁碗で玉縁口縁である。8は緑釉陶器の胴部片。9は龍泉窯系青磁皿。底部外面は焼成前に釉を搔き取る。見込にヘラ描き花文がわずかに残る。10は瓦質土器口縁部で口縁端部が内面に突出する。防長系擂鉢か。11は陶器鉢口縁部。口縁部を折り曲げて上面を平坦にする。12は石鎚。黒曜石製の凹基鎚でかなり幅広になる。13は石帶(巡方)の一部。片面のみ残るが、全面に入念な研磨痕が残る。14は結晶片岩製の円盤状石器。縁辺に剥離を加えて整形するが、側縁の一部に研磨による平坦面が確認できる。15は有孔石製品。多孔質玄武岩製。周囲をケズリにより円形に整え、中央を表裏両面から削り込んで穿孔する。16は滑石製経筒の口縁部。接合しない同一個体の破片が2点ある。口縁部に蓋受けの返しが直立する。内外面とも丁寧な加工で平滑に整える。17~21は滑石製石鍋。18~21はローリングによる磨耗が著しい。17は鍔付型石鍋口縁部であるが、鍔の削り出しが浅く低い突起状になる。18・20は縦耳型石鍋。19は底部。内面に整形時のノミ痕が放射状に残る。21は鍔付型石鍋の胴部片。

### 3 B区の成果

#### (1) 基本土層(第24図)

B区は、旧期扇状地である礫層(7層)をベースに、固結したいわゆる「古土層」(6層)、縄文時代晚期の包含層である褐色土(4層・4'層)、縄文時代から中世の包含層である黒褐色土(3層)、近現代の水田堆積物である1~2層からなる。調査区は南から北にかけて緩やかに傾斜しており、3層は北半部で厚く堆積する。調査区南半部では、4層相当層がマンガン粒や小礫を多く含むしまりの強い土層となっており、4'層とした。4層と4'層の関係は、壁面の観察では漸移的で明確な上下関係をなさず、本来同一層だが何らかの理由で南半部のみ変質している可能性が考えられる。遺構検出面は4層及び4'層上面であったが、3層下半では風倒木痕や樹根が多く、また、大型土器片がまとまって出土する地点もあり、検出はできなかったものより上位から掘り込まれていた可能性もある。

#### (2) 遺構と遺物(第25図)

B区では、ピット377基、土坑4基、竪穴建物跡4基、配石遺構2基、遺物集積1基、不明遺構3基を確認した。ピット群は、配列や床面標高の検討から掘立柱建物8棟、柵列1条に復元でき、柱痕が確認できるものもあることから、そのほとんどが柱穴と考えられる。また、土坑や石列遺構、不明遺構の中には、縄文時代や中世の埋葬施設と考えられる遺構も含まれる。なお、ピット群および掘立柱建物・柵列については、観察表を付した(第9表・第16表~第17表)。

##### ①柵列

###### ・ SA1(第25図・第26図)

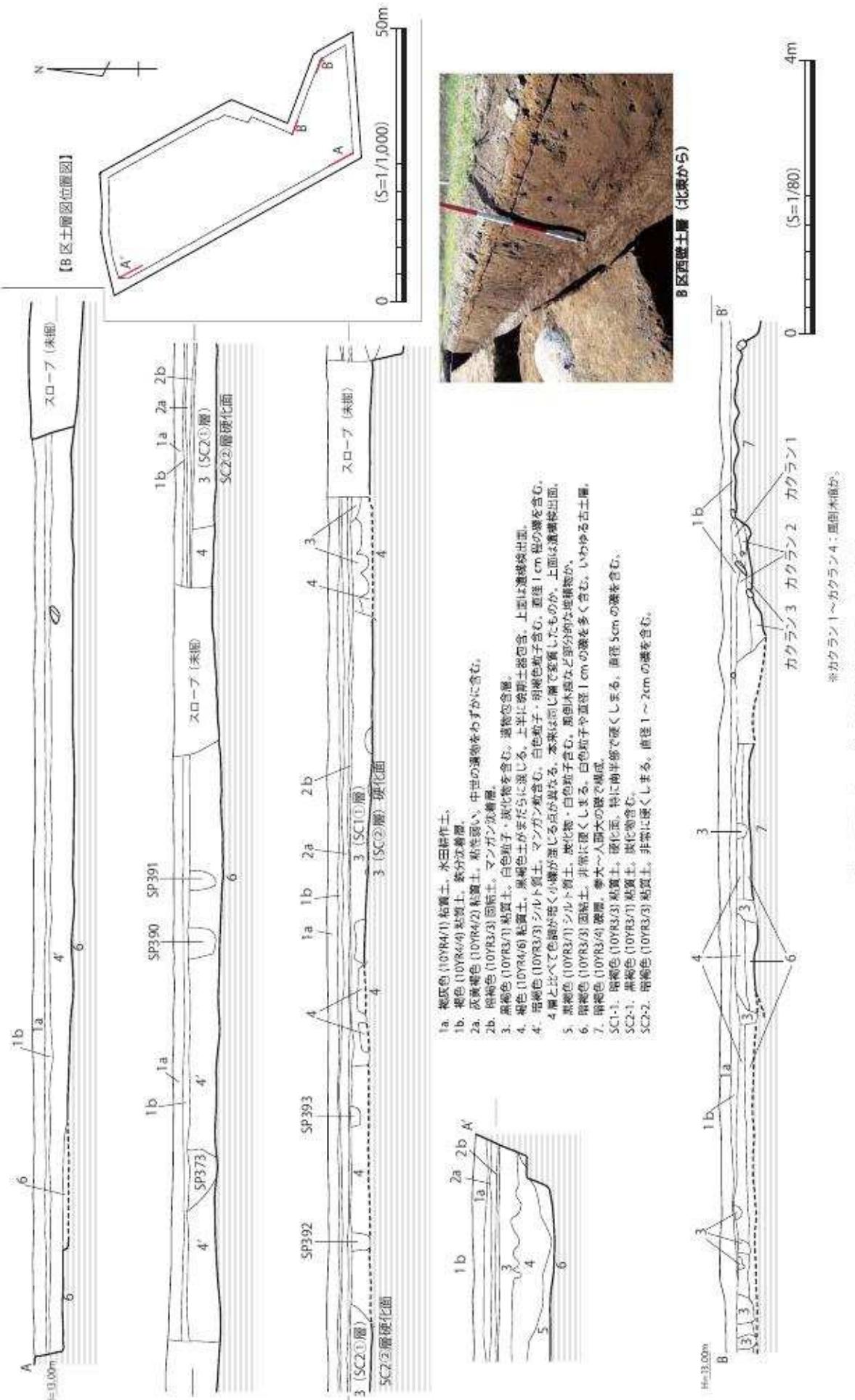
B区9680~9482グリッドで検出した柵列。10基の柱穴で構成し、東西方向に延長15m確認したが、さらに東西に伸びる可能性もある。南隣のSB1・SB4の梁間と平行し、遺構間の距離はいずれも1.2mである。柱間は1.5~2.1mとばらつきがあるが、南隣のSB1やSB4の桁行と通りの良い柱穴も含まれる。柱穴は円形を主体とし、径は最小0.4m、最大0.9m、深さは0.2~0.45mである。埋土はいずれも黒褐色土が単層で堆積しており、柱痕は確認できなかった。

遺物はSP78・SP147・SP183から出土した(第27図)。1~3は小皿でいずれも底部はへラ切り、板状圧痕が残る。1は底径1/4程度、2・3は底径1/6程度残存する。3は丸底気味で内面には炭素が付着して黒色をなす。4は丸底壊で底部に板状圧痕が残る。底径1/3程度残存。内面は丁寧にならるが、底部押し出しに伴うコテ当ての痕跡がわずかに残る。5は滑石製石鍋の胴部片。内外面とも工具による整形痕が顕著で、外面は煤が付着する。

##### ②掘立柱建物

###### ・ SB1(第25図・第28図)

B区9682グリッドで検出した総柱建物。2間×4間で主軸方向はN·8°·Wである。中軸線はSB2・SB3と揃い、梁間の柱筋はSB4と通りがよい。遺構間の距離は、SA1とは1.2m、SB2とは2.1m、SB4とは2.1m、SB8とは2.1mとなる。建物規模は、梁間3.0m、桁行8.4m、床面積25.2m<sup>2</sup>で、柱間寸法は梁間1.5m、桁行2.1mである。柱穴の平面形は、円形を含むものの隅丸長方形が主体を占め、径は最大1.1m、最小0.6m、検出面からの深さは0.3~0.4mである。柱痕はSP130・SP178で確認でき、直径は0.2~0.5mとなる。柱痕の周囲には黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合層が堆積するが、版築状につき固めた痕跡



第24図 B区基本土層実測図 (S=1/80)

第9表 B区SA・SB観察表

遺構名	全長(m)	柱間長(m)
SA1	15.0	1.5~2.1

遺構名	建物規模 (間)	梁間長(m)	柱間長(m)	桁行長(m)	柱間長(m)	面積(m <sup>2</sup> )
SB1	2×4	3.0	1.5	8.4	2.1	25.20
SB2	2×3	2.4	1.2	3.6	1.2	8.64
SB3	2×4	3.0	1.5	8.4	2.1	25.20
SB4	1×6	2.1	2.1	12.9	1.8~2.4	27.09
SB5	1×4以上	2.1	2.1	9.0以上	2.1	18.9以上
SB6	1×3	1.8	1.8	7.2	2.4	12.96
SB7	2×2	2.4	1.2	3.6	1.8	8.64
SB8	1×2	1.2	1.2	4.2	2.1	5.04

は確認できなかった。また、柱抜き取り痕は平面での観察が不十分であったが、断面観察ではSP380・SP381・SP388でその可能性がある。

遺物は、SP130・SP131・SP178・SP379・SP381・SP385・SP387から出土した(第29図)。1・2は須恵器坏底部。胴部が立ち上がる屈曲部分よりやや内側に矩形の高台がつく。3は黒色土器A類で内面に炭素を吸着しヘラミガキを施す。4~6は土師器小皿。それぞれ口径で1/4、1/6、1/3程度残存する。4・5は底部外面をなで消す。6は全体に薄手で、底部は糸切り。底部内面を軽く横なでする。7・8は土師器坏底部。それぞれ底径で1/8、1/4程度残存する。7は底部ヘラ切りでやや丸底気味だが、胴部の立ち上がりが屈曲しわずかに稜線が残る。8は底部ヘラ切りでやや厚手である。9は土師器坏。底部は糸切りで底径が小さく、口縁部が内湾気味に立ち上がる。薄手のつくりで明褐色を呈し、焼成は良好。豊前型土師器であろう。10は土師器坏口縁部。胴部からわずかに内屈し稜線が見える。11は白磁碗口縁部で大宰府分類の白磁碗II類。内湾気味に立ち上がり端部がわずかに肥厚する。12は滑石製石鍋の表面剥落片である。湾曲がなく平坦である点や加工痕の観察から、底部の一部であろう。

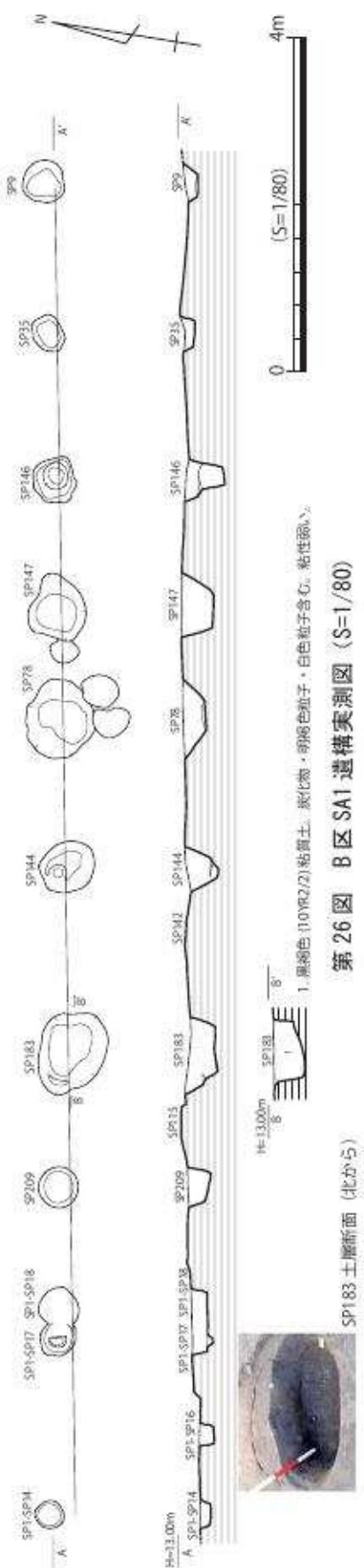
#### ・SB2(第25図・第30図)

B区9682グリッドで検出した総柱建物。2間×3間で主軸方向はN·8°·Wである。中軸線はSB1・SB3と揃い、梁間の柱筋はSB4・SB5と通りがよい。遺構間の距離はSB1とは2.1m、SB3とは1.8m、SB4とは2.4m、SB5とは2.1mとなる。建物規模は、梁間2.4m、桁行3.6m、床面積8.64m<sup>2</sup>で、柱間寸法は梁間、桁行とも1.2mである。柱穴の平面形は円形が主体で、径は最大0.9m、最小0.6m、検出面からの深さは0.2~0.7mである。柱痕はSP198で確認でき、直径0.4mとなる。柱痕周囲の埋土は、黒褐色土と黄褐色土の混合層だが、版築状につき固めた痕跡は確認できなかった。柱抜き取り痕は断面の観察ではSP359・SP360・SP368で可能性がある。

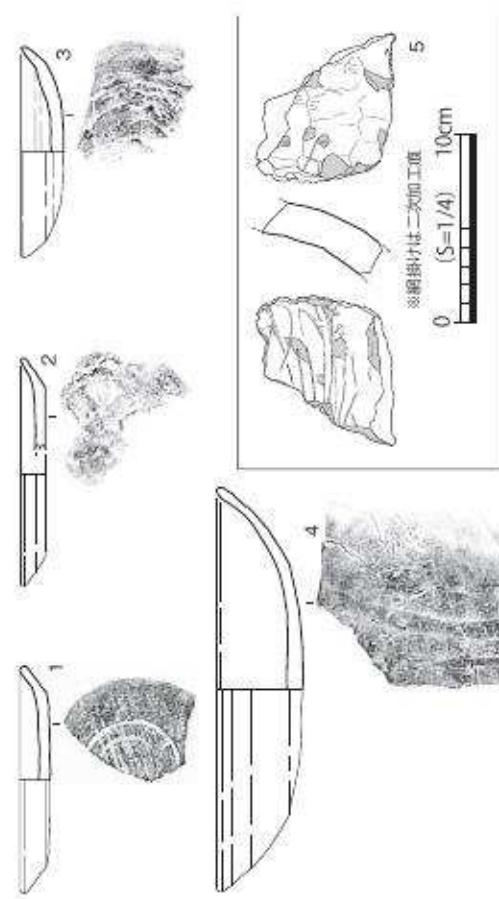
遺物は、SP360・SP371から出土した(第31図)。1は黒色土器B類。丸みの強い胴部で内外面とも漆黒色を呈し丁寧なヘラミガキで仕上げる。内湾気味の高台は内面端部に段がつく。2は黒色土器A類口縁部。直線的に開く口縁部で内面はヘラミガキが残る。

第25図 B区遺構配置図 (S=1/200)

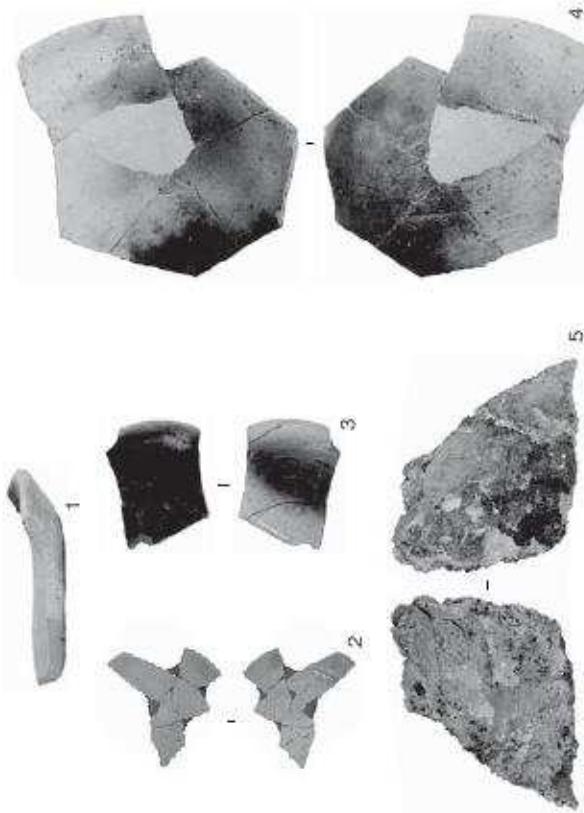




第26圖 B區 SA1 遺構實測圖 (S=1/80)



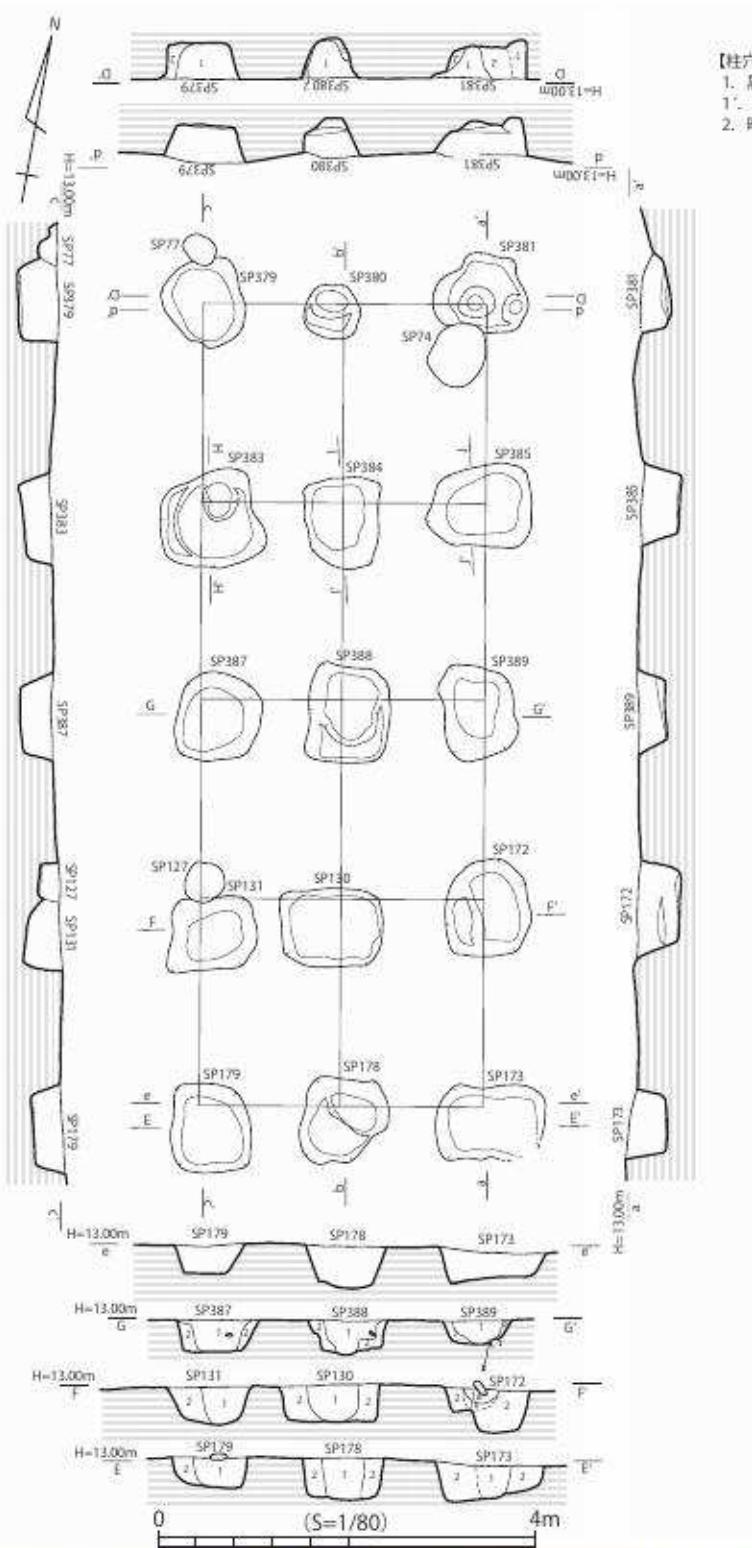
第27圖 B區 SA1 出土遺物實測圖 (S=1/3, 1/4)



第28圖 B區 SA1 出土遺物

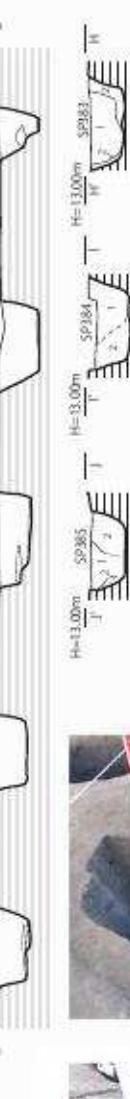
第10表 B區 SA1 出土遺物觀察表

番号	遺物名稱	測量部位	直徑·厚度	口徑(cm)	厚度(cm)	形狀	生長地	鑿打	
								横徑(cm)	縱徑(cm)
1	土削器・小刀	BK9482	SP78	9.0	7.0	1.2	—	～2.0	～1.0
2	土削器・小刀	BK9482	SP147	9.1	6.8	1.0	—	～2.0	～1.0
3	土削器・小刀	BK9482	SP147	8.5	5.8	1.7	—	～2.0	～1.0
4	土削器・小刀	BK9482	SP147	10.0	10.0	1.4	—	～2.0	～1.0
5	石器	SP183	SP183	73.0	38.0	164.36	—	—	—

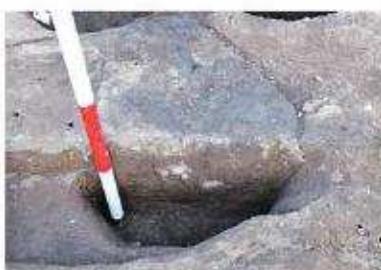


#### 【柱穴土層記】

1. 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土。黄褐色粒子・白色粒子含む。
- 1'. 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土。1層より炭化物少ない。
2. 増褐色 (10YR3/4) 粘質土。よくしまる。



SP130 土層断面（南から）



SP131 土層断面（南から）



SP172 土層断面（南から）

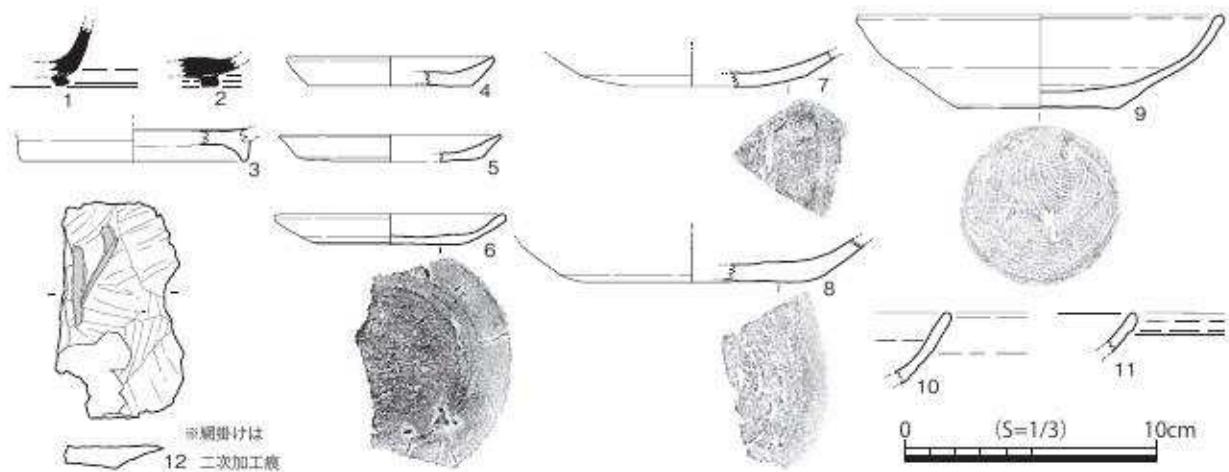


SP179 土層断面（南から）

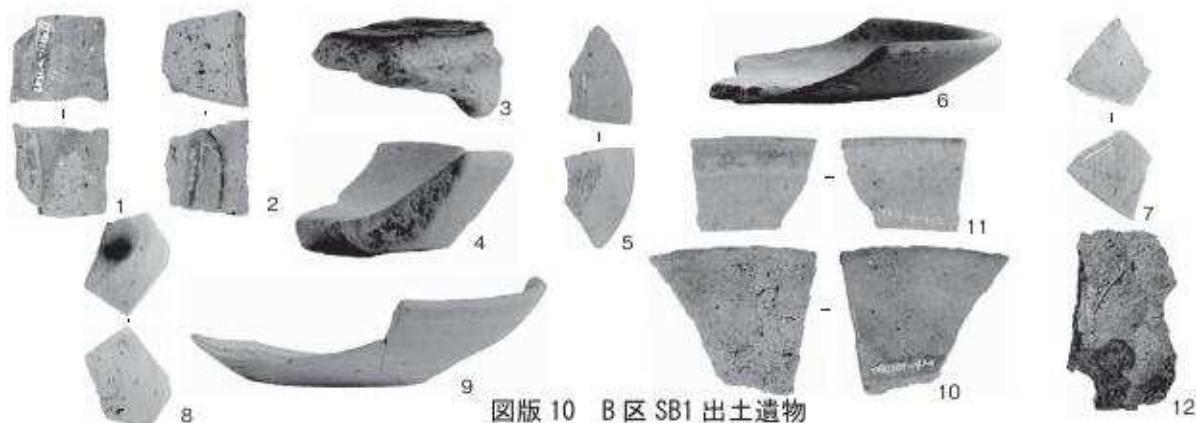


SP388 土層断面（南から）

第28図 B区SB1遺構実測図 (S=1/80)



第29図 B区SB1出土遺物実測図 (S=1/3)



図版10 B区SB1出土遺物

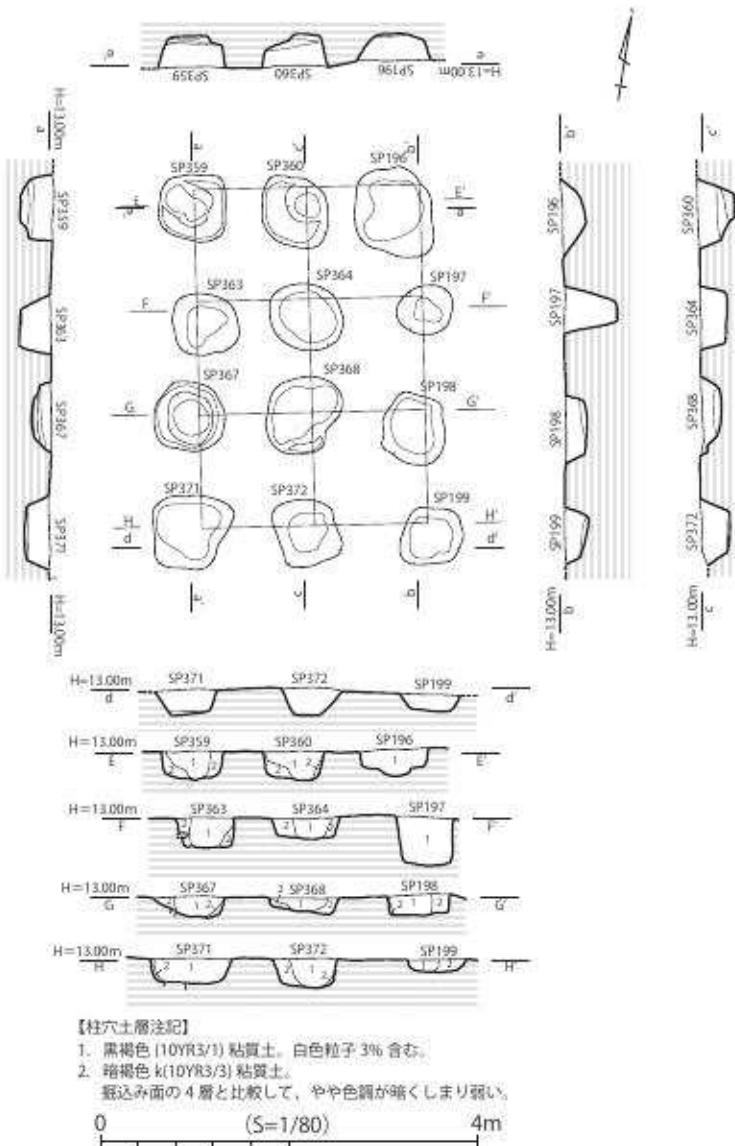
第11表 B区SB1出土遺物観察表

番号	遺物名称	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
1	須恵器・杯	BIK9682	SP178	-	-	(2.9)	—	
2	須恵器・杯	BIK9682	SP387	-	-	(1.1)	—	
3	黒褐色土器・碗	BIK9682	SP180	-	9.4	(1.3)	—	
4	土師器・小皿	BIK9482	SP385	8.2	6.4	1.2	—	ヘラ切り
5	土師器・小皿	BIK9682	SP178	8.8	6.8	1.1	—	ヘラ切り
6	土師器・小皿	BIK9682	SP131	9.2	6.0	1.2	豊前系	糸切り
7	土師器・杯	BIK9682	SP131	-	5.1	(1.4)	—	ヘラ切り
8	土師器・杯	BIK9482	SP385	-	9.0	(1.7)	—	ヘラ切り
9	土師器・杯	BIK9682	SP387	14.6	6.4	3.7	豊前系	糸切り
10	土師器・杯	BIK9482	SP381	-	-	(2.8)	—	
11	白磁・瓶	BIK9682	SP379	-	-	(1.5)	—	白磁Ⅱ類
調査番号	基種	出土区グリッド	層位	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
12	石鍋	BIK9682	SP178	滑石	85.5	51.0	11.0	51.06

#### ・SB3(第25図・第32図)

B区9682~9882グリッドで検出した総柱建物。2間×4間で主軸方向はN-8°-Wである。中軸線はSB1・SB2と揃い、梁間の柱筋はSB5と通りが良い。遺構間の距離は、SB2とは1.8m、SB5とは1.8mとなる。建物規模は、梁間3.0m、桁行8.4m、床面積25.2m<sup>2</sup>で、柱間寸法は梁間1.5m、桁行2.1mである。柱穴の平面形は隅丸方形も含むが円形が主体で、径は最大1.2m、最小0.5m、検出面からの深さは0.2~0.4mである。柱痕はSP176・SP184で確認でき、直径0.3~0.5mである。柱痕周囲の埋土はよくしまる暗褐色土だが、版築状につき固めた痕跡は確認していない。柱抜き取り痕は、断面の観察ではSP177・SP187・SP192でその可能性が考えられる。

遺物はSP185・SP191・SP238から出土した(第33図)。1は須恵器杯底部で断面方形の高台が付く。2は瓦器碗底部で低い高台が付く。内外面ともヘラミガキ調整で胎土には細かい雲母を多く含む。3は



第30図 B区SB2遺構実測図 (S=1/80)



第31図 B区SB2出土遺物実測図 (S=1/3)

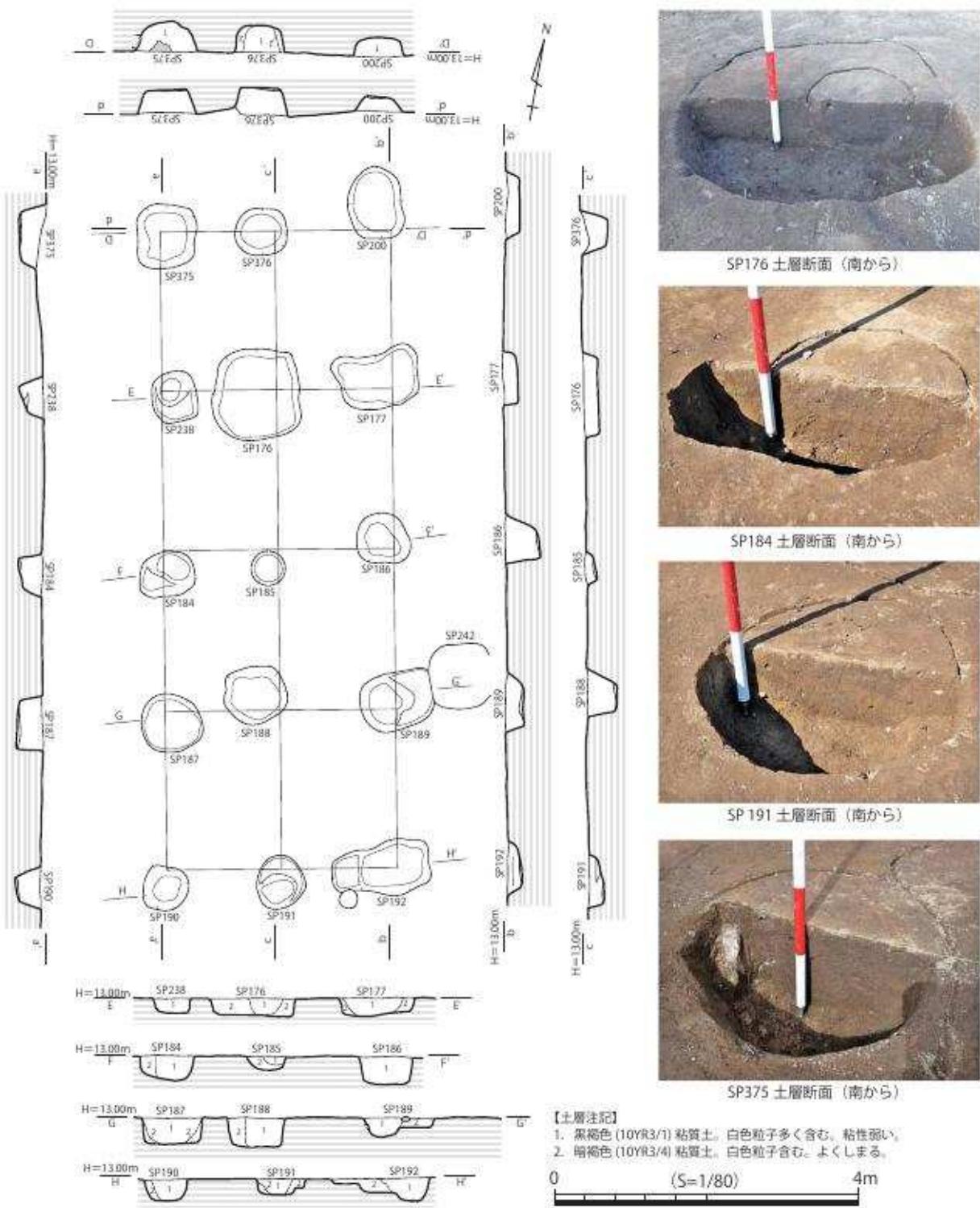
第12表 B区SB2出土遺物観察表

遺物名	出土箇所グリッド	層位	形状	大きさ	材質		特徴	備考	出土	備考
					外観	内部				
1	SB2-9682	24.94	角柱状	直径7.3cm×高さ10cm	陶器	表面無	ヘリコリボン、カスケードチャコ	表面無	SB2	SB2
2	SB2-9682	24.95	角柱状	直径7.3cm×高さ10cm	陶器	表面無	ヘリコリボン、カスケードチャコ	表面無	SB2	SB2

土師器壊。底径1/8程度残存する。全体に薄手で底部は糸切りか。胎土に金雲母含む。

#### ・SB4(第25図・第34図)

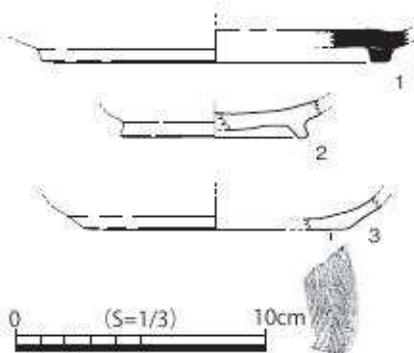
B区9682グリッドで検出した側柱建物。1間×6間で主軸方向はN-8°-Wである。SA1・SB1・SB5と向きを同じくし、遺構間の距離はSA1とは1.2m、SB1とは2.1mとなる。また、これらの遺構群との柱の通りが良い。建物規模は梁間2.1m、桁行12.9m、床面積27.09m<sup>2</sup>、柱間寸法は梁間2.1m、桁行1.8~2.4mである。桁行の柱間は2.1mを基本とするが、SP334-SP386とSP285-SP355間、及びSP285-SP355と



第32図 B区SB3遺構実測図 ( $S=1/80$ )

SP222-SP182間は2.4mとやや幅広く、SP222-SP182と SP357-SP358間は1.8mとやや狭い。柱穴の平面形は、円形を含むものの隅丸方形に近いものが多く、径は最大1.0m、最小0.6m、検出面からの深さ0.25~0.5mである。柱痕はSP148で確認でき、直径0.3mである。柱痕周辺の埋土はよくしまる暗褐色土だが、版築状につき固めた痕跡は確認できなかった。柱抜き取り痕は、断面の観察ではSP387でその可能性が考えられる。

遺物は、SP148・SP285・SP366・SP378で出土した(第36図1~5)。1は小型の須恵器蓋で、欠損する



第33図 B区SB3出土遺物実測図 (S=1/3)



図版11 B区SB3出土遺物

第13表 B区SB3出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査区	遺構・遺物	口径(cm)	通徑(cm)	器高(cm)	生産地	備考
1	須恵器・矛	B区9682	SP238	-	13.7	(1.3)	—	
2	瓦質土器・瓶	B区9482	SP191	-	7.4	(1.5)	—	
3	土師器・环	B区9882	SP186	-	10.5	(1.4)	—	系弱り?

ものの返しの痕跡が残る。天井部にイネ圧痕がある。2は土師器高坏の坏部か。口径で1/2近く残る。底部中央に脚部の剥落痕が残り、脚部跡から放射状に胴部下半に手持ちヘラケズリを施す。胎土には石英粒を少量含む。3は土師器丸底坏。口径1/2程度残る。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。丸底と胴部の境には稜が残り、内面にはコテ当て痕がわずかに確認できる。胎土に金雲母を多く含む。4は土師器坏。口径1/8程度残る。ヘラ切り痕が器高の中位近くまで確認できることから、底部は欠損するものの内面を押し出した丸底坏と考えられるが、3と比べてかなり浅い器形となる。底部と胴部の境に稜線が明瞭に残る。5は土師器坏口縁部の小片。胎土に金雲母を多く含む。

#### ・SB5(第25図・第35図)

B区9682～9882グリッドで検出した側柱建物。南端は調査区外となるが、1間×4間以上で主軸方向はN-8°-Wである。北端部はSB4と重なり、SB2・SB3とは向きを同じくし、遺構間の距離はそれぞれ2.1m、1.8mである。SB2・SB3とは梁間方向の柱の通りが良い。建物規模は梁間2.1m、桁行9.0m以上、床面積18.9m以上、柱間寸法は梁間2.1m、桁行2.1mである。柱穴の平面形は円形を主体とし、径は最大0.9m、最小0.5m、検出面からの深さ0.15～0.4mである。柱痕は確認できなかったが、抜き取り痕は断面観察ではSP370に可能性がある。SP374はSK1に切られていて、床面がわずかに残る程度である。

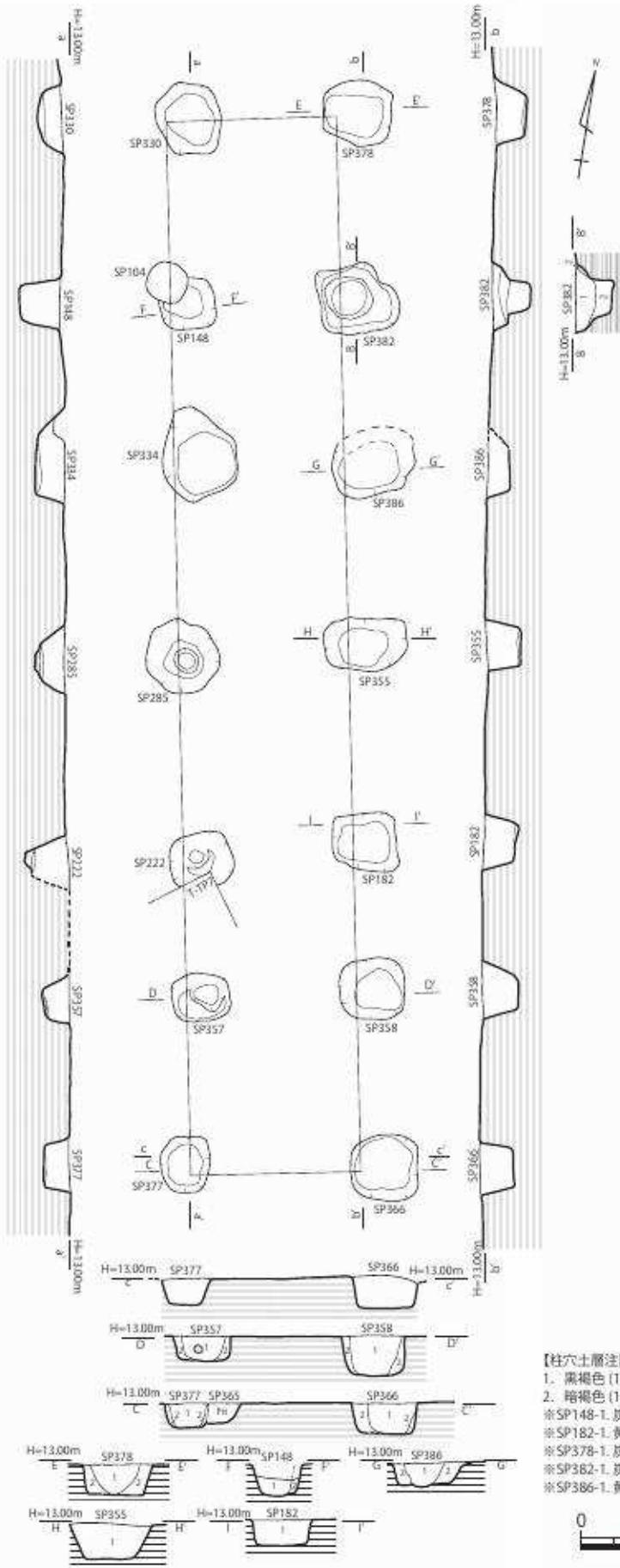
遺物はSP374から須恵器蓋口縁部が1点出土した(第36図6)。全体に薄手で短い返しが付く。

#### ・SB6(第25図・第37図)

B区9682グリッドで検出した側柱建物。1間×3間で主軸方向はN-98°-Wである。SB1及びSB4と重なる。南西隅及びその西隣の柱穴は確認できなかった。建物規模は梁間1.8m、桁行7.2m、床面積12.96m<sup>2</sup>、柱間寸法は梁間1.8m、桁行2.4mである。柱穴の平面形は隅丸方形と円形が混在し、径は最大1.0m、最小0.8m、検出面からの深さは0.3～0.5mである。埋土は版築状につき固めた痕跡は確認できなかった。柱痕や抜き取り痕は確認できていない。遺物は出土しなかった。

#### ・SB7(第25図・第37図)

B区9482グリッドで検出した側柱建物。2間×2間で主軸方向はN-98°-Wである。SA1の北側に向きをそろえて隣接し、遺構間の距離は3.6mである。南西隅の柱穴は確認できなかった。建物規模は梁間2.4m、桁行3.6m、床面積8.64m<sup>2</sup>、柱間寸法は桁行1.2m、梁間1.8mである。柱穴の平面形は円形で、径は最大0.7m、最小0.4m、検出面からの深さは0.1～0.5mである。中央のSP289は周囲の柱穴に比べ



第34図 B区SB4遺構実測図 (S=1/80)



SP148 土層断面(南から)



SP148 遺物出土状況(南から)



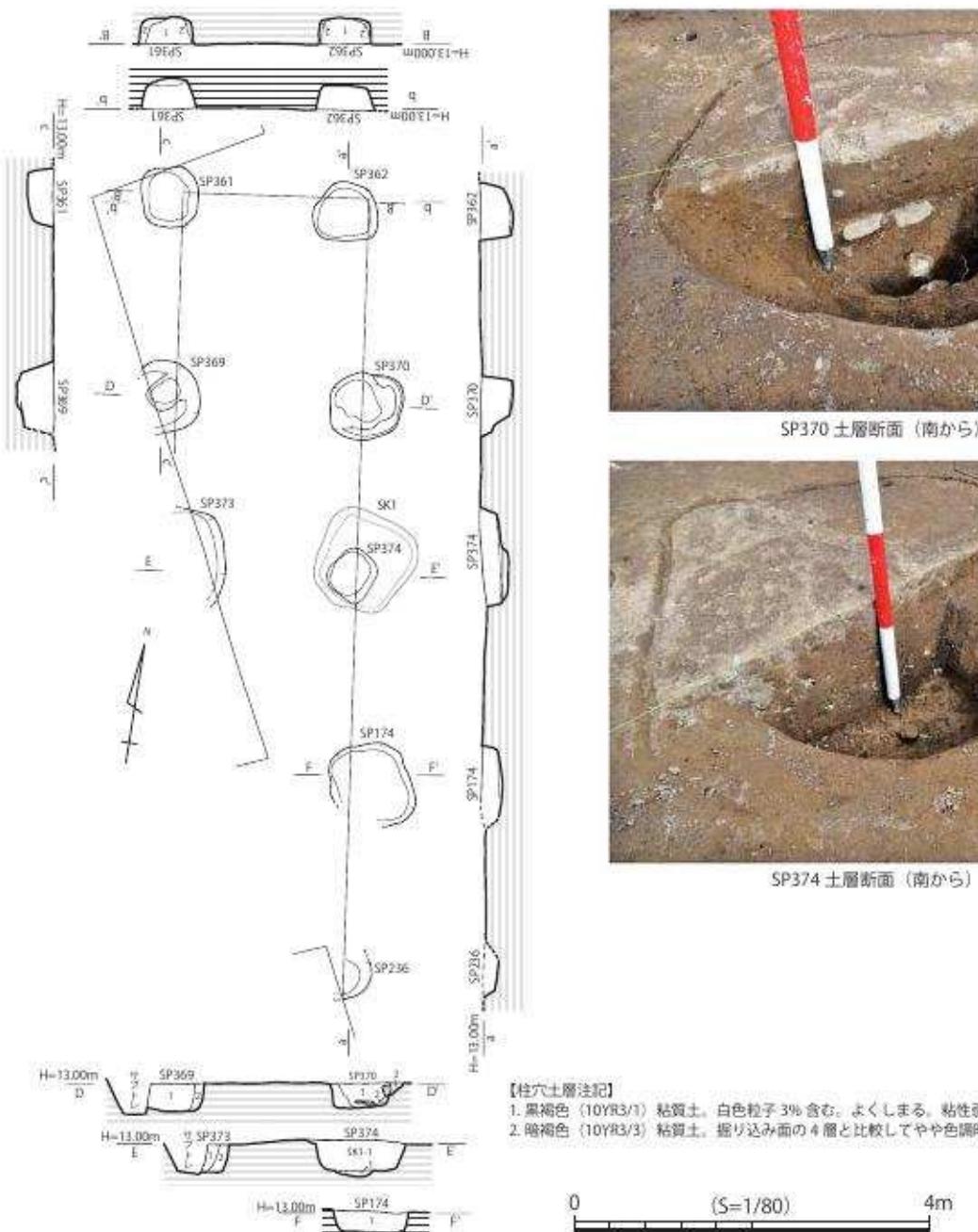
SP182 土層断面(南から)



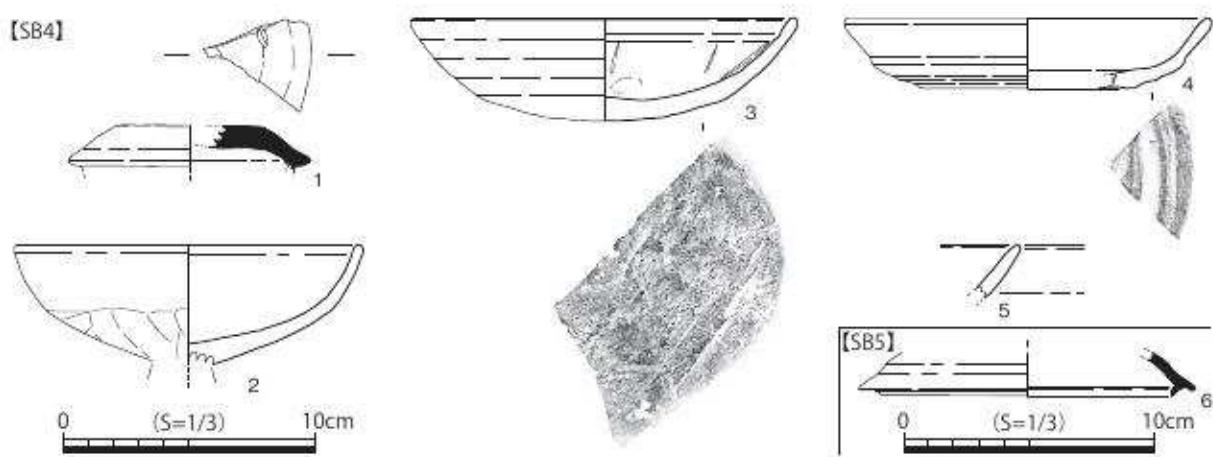
SP355 土層断面(南から)

#### 【柱穴土層記述】

1. 黒褐色(10YR3/1)粘質土。黄褐色粒子及び白色粒子を含む。粘性弱い。
  2. 暗褐色(10YR3/4)粘質土。粘性弱い。よくしめる。
- ※SP148-1. 炭化物が多く含む。  
 ※SP182-1. 黄褐色土を多く含む。  
 ※SP378-1. 炭化物、燒土粒を多く含む。  
 ※SP382-1. 炭化物、燒土粒を多く含む。  
 ※SP386-1. 黄褐色土をブロック状に含む。



第35図 B区SB5遺構実測図 ( $S=1/80$ )



第36図 B区SB4・SB5出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )



図版 12 B 区 SB4・SB5 出土遺物

第14表 B 区 SB4・5 出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地区	測量・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生溝	備考
1	須恵器・蓋	B区9682	SP285	9.6	-	(1.8)	-	
2	土師器・高杯	B区9682	SP285	13.8	-	(4.7)	-	手打ちヘラケダリ
3	土師器・丸底坪	B区9682	SP148	15.3	10.2	4.1	-	内面コテア、ヘラ切り、板状圧痕あり
4	土師器・坪	B区9482	SP266	14.6	12.4	2.8	-	ヘラ切り
5	土師器・坪	B区9482	SP378	-	-	(2.1)	-	
6	須恵器・蓋	B区9682	SP374	13.3	-	(1.7)	-	

て浅く、束柱や間仕切り柱と考えられる。柱痕や抜き取り痕は確認できなかった。遺物は出土していない。

#### ・ SB8(第25図・第38図)

B区9482～9682グリッドで検出した側柱建物。1間×2間で主軸方向はN-8°-Wである。SA1の南及びSB1の東に隣接し、遺構間の距離はそれぞれ1.2m、2.1mである。SA1・SB1との柱の通りはよい。南西隅の柱穴は確認できなかった。建物規模は梁間1.2m、桁行4.2m、床面積5.04m<sup>2</sup>、柱間寸法は梁間1.2m、桁行2.1mである。柱穴の平面形は円形で、径は最大0.7m、最小0.4m、検出面からの深さは0.2～0.4mである。柱痕や抜き取り痕は確認できなかった。

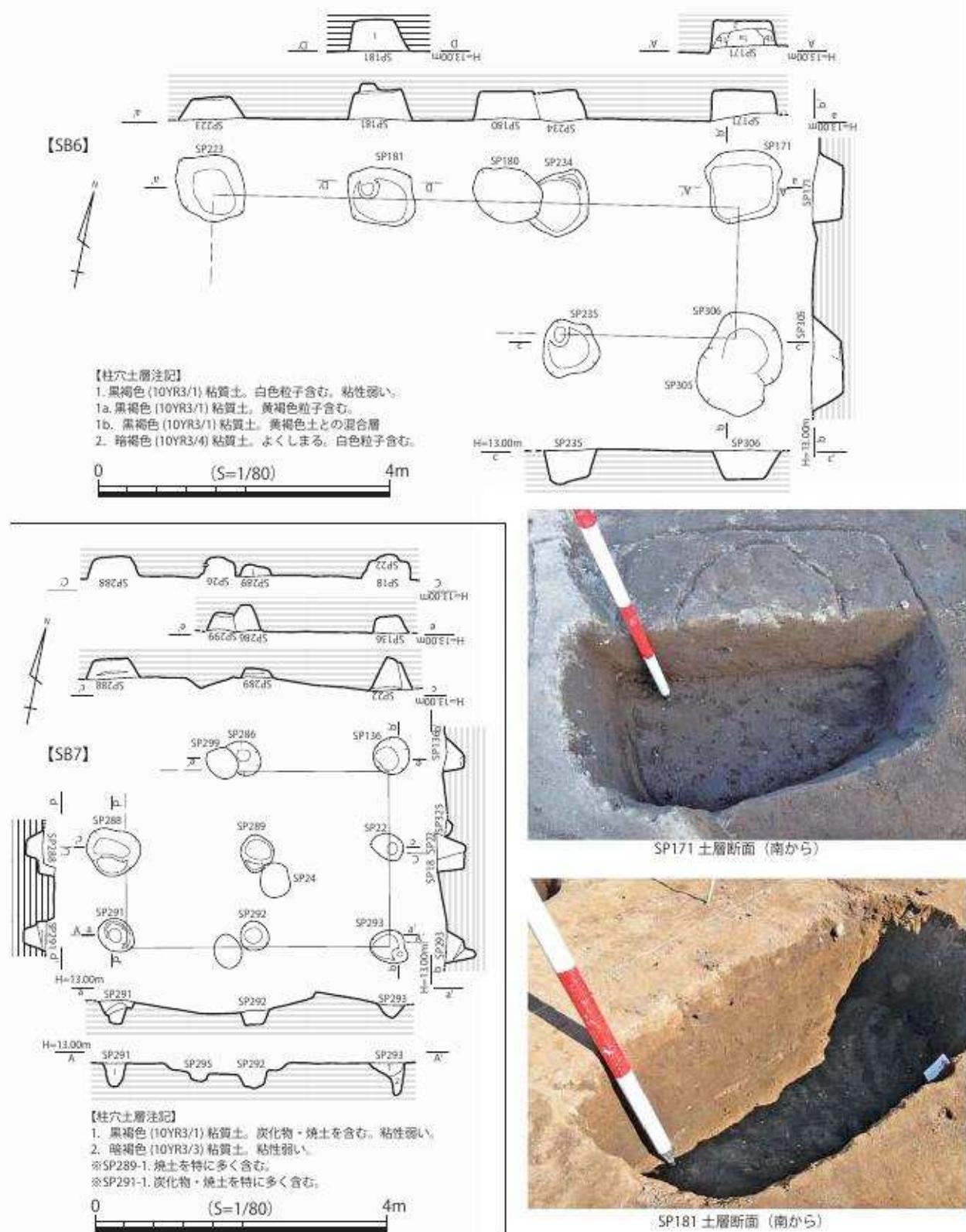
遺物はSP52から出土した(第39図)。1は土師器坪で底径1/3程度残る。平底で底部はヘラ切り、板状圧痕が残る。胎土に石英及び雲母を多く含む。

#### ③豊穴建物

#### ・ SC1(第25図・第40図)

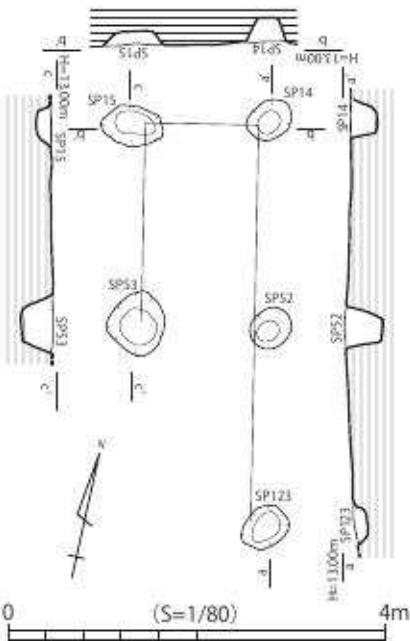
B区9480～9680グリッドで検出した大型豊穴建物。北西隅は調査区外に延びる。平面正方形で南東側の一辺に細長いテラスがつく。主軸は北西～南東方向で、規模は長軸長7.0m(テラス含む)、短軸長5.4m、検出面からの深さ0.3mである。柱穴は南北方向の3ヶ所(SP3・SP12・SP18)が主柱穴、豊穴掘方際付近に分布するピットも柱穴を構成すると考えられる。SP3・SP4では掘方に沿って根固め石と考えられる扁平な円礫を検出した。東側の壁面寄りに被熱した粘質土が帶状に馬蹄形に盛り上がる遺構を4ヶ所確認し、カマドの一部と考えた(SL1～SL3・SL6)。西側部分は調査区外に伸びるためはっきりしないが、壁面の観察では少なくとも2箇所で同様の遺構の存在が推測できる(SL4・SL5)。カマド内部は炭化物や焼土ブロックを含む埋土で充填される。また、カマド遺構周辺の床面は硬化面となっており、床面直上で砂岩製の大型砥石が出土している(第42図30)。

遺物は埋土中から多く出土した(第41図～第42図)。第41図1・2は縄文晩期土器浅鉢口縁部である。いずれも胴部から内屈して口縁部が外反する器形で、内外面をヘラミガキで丁寧に調整する。1は頸部内外面にヘラミガキ以前の条痕の痕跡が残る。2の胎土には雲母片を多く含み、口縁端部にはリボン状突起が付く。3～7は弥生土器。3・4は口縁部が「く」の字に外反する甕口縁部で、胴部を中心にハケメ調整が残る。5は平底の甕底部で外面に縦方向のハケメが残る。6・7は壺。6はソロバン球状の胴部で、屈曲部や上位に平行沈線と重弧文を施す。肥後南部の免田式であろう。7は頸部の付根付近でシャープな三角突帯が付く。第42図8は須恵器蓋。ボタン状の扁平なつまみが付く。9は黒色土器B類の小壺。低い高台がつき外面は丁寧なヘラミガキを施す。10～14は土師器小皿。10は口径1/

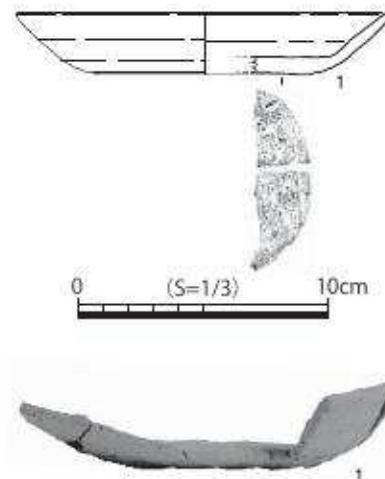


第37図 B区 SB6・SB7 遺構実測図 (S=1/80)

8程度残存。底部から丸みを持って体部が立ち上がる。摩滅により調整や底部切り離しは不明。11は底部径1/8程度残存。体部は直線的で器高は低い。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。12は口径1/8程度残存。体部は直線的で底部はヘラ切りで板状圧痕残る。13は口径1/4程度残存。体部はやや丸みをおびて内湾気味に立ち上がる。底部はナデ消して切り離しは不明だが、わずかに板状圧痕が残る。胎



第38図 B区SB8遺構実測図 ( $S=1/80$ )



第39図 B区SB8出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )

第15表 B区SB8出土遺物観察表

番号	遺物名前	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	備考
1	土師器・鉢	H区9482	SP52	14.8	9.8	2.5	—	ヘラ切り、板状・壺あり

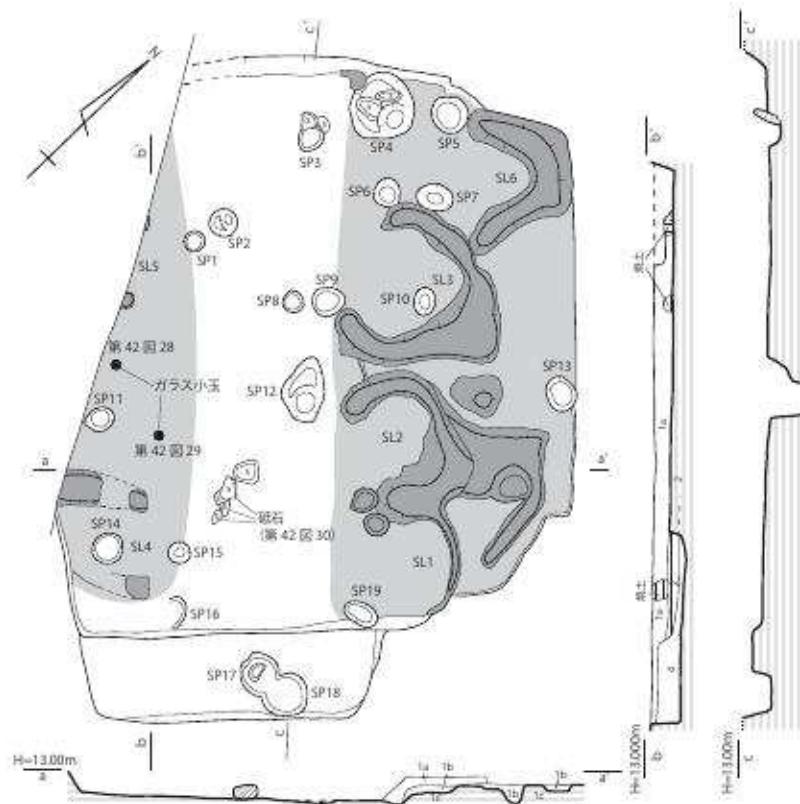
土に金雲母を多く含む。14は口径1/4程度残存。底部はヘラ切り。胎土に金雲母含む。15は黒色土器A類の壺底部で底径1/4程度残存。内面は炭素を吸着し丁寧なナデ調整。底部外面は高台をわずかに欠くが、横に張り出しの大きい低高台と思われる。胎土に雲母を多く含む。16は土師器壺底部で底径1/2程度残存。底部はヘラ切りで板状圧痕残る。底部内面はヨコナデが残る。17は土師器壺底部で底径1/8程度残存。底部の切り離しは不明だが、底部外面にヘラ書き文があり、刻書の可能性もあるが不明。18は土師器壺口縁部で口径1/8程度残存。口縁は内湾気味に立ち上がる。19は越州窯系青磁の水注。接合しない頸部～底部片が断片的に出土し、図上で復元した。胴部は丸みを帯び頸部との境は肩が張って屈曲し、屈曲部には隆線2条が巡る。胴部には複線による縦の区画線があり、区画線を挟んで木瓜文形の輪郭の一部が確認できる。底部は高台がつき、高台内には目跡がわずかに残る。これらの特徴は森達也編年のII-c期(11世紀中葉～12世紀前半)に相当し(森2015)、類例は鹿児島県喜界島の小野津八幡神社境内、博多遺跡群第6次・同遺跡群第80次で出土している(亀井2014)。20は白磁碗口縁部。胴部下半が丸みを持って内湾し、口縁部端部はわずかに外反する。内面には底部と胴部の境に段を形成する。大宰府分類の白磁碗V-1類か。

21～27・30は石器。21は黒曜石製の縦長剥片で主要剥離面の両側縁に調整剥離を加える。22・23は石鎌。いずれも安山岩製の凹基鎌である。22は基部が浅い。23は剥離調整後に表裏とも体部を部分的に研磨する。24は石包丁。25は軽石製品。卵形に整形し、長軸に沿ってスリット状にわずかに刻む。竹松遺跡では、TAK201303のSC1、TAK201408のSC01のように、弥生時代後期前葉～中葉の竪穴建物跡から軽石製品の出土がある。26・30は砥石。26は細粒砂岩製で長軸方向の4面に砥面が残る。一部に煤が付着する。30は粗粒砂岩製で、床面直上でバラバラに割れた状態で出土した。扁平な縦長三角形で、裏面の一部は欠損する。表裏両面の平坦面と側縁に砥面が残り、表裏両面の砥面には細い線状の使用痕が見える。27は滑石製石鍋片。胴部片で丁寧な加工痕が縦方向に規則的に並ぶ。破片の二次加









SC1 完掘状況①(南から)

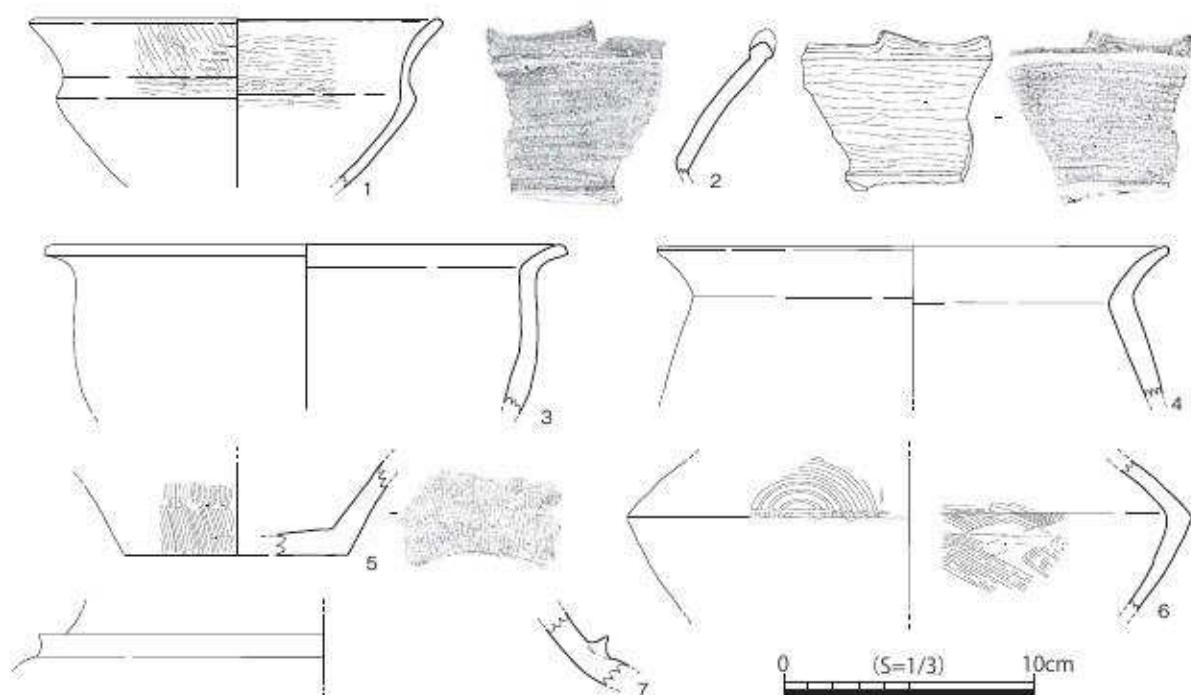


SC1 完掘状況②(西から)

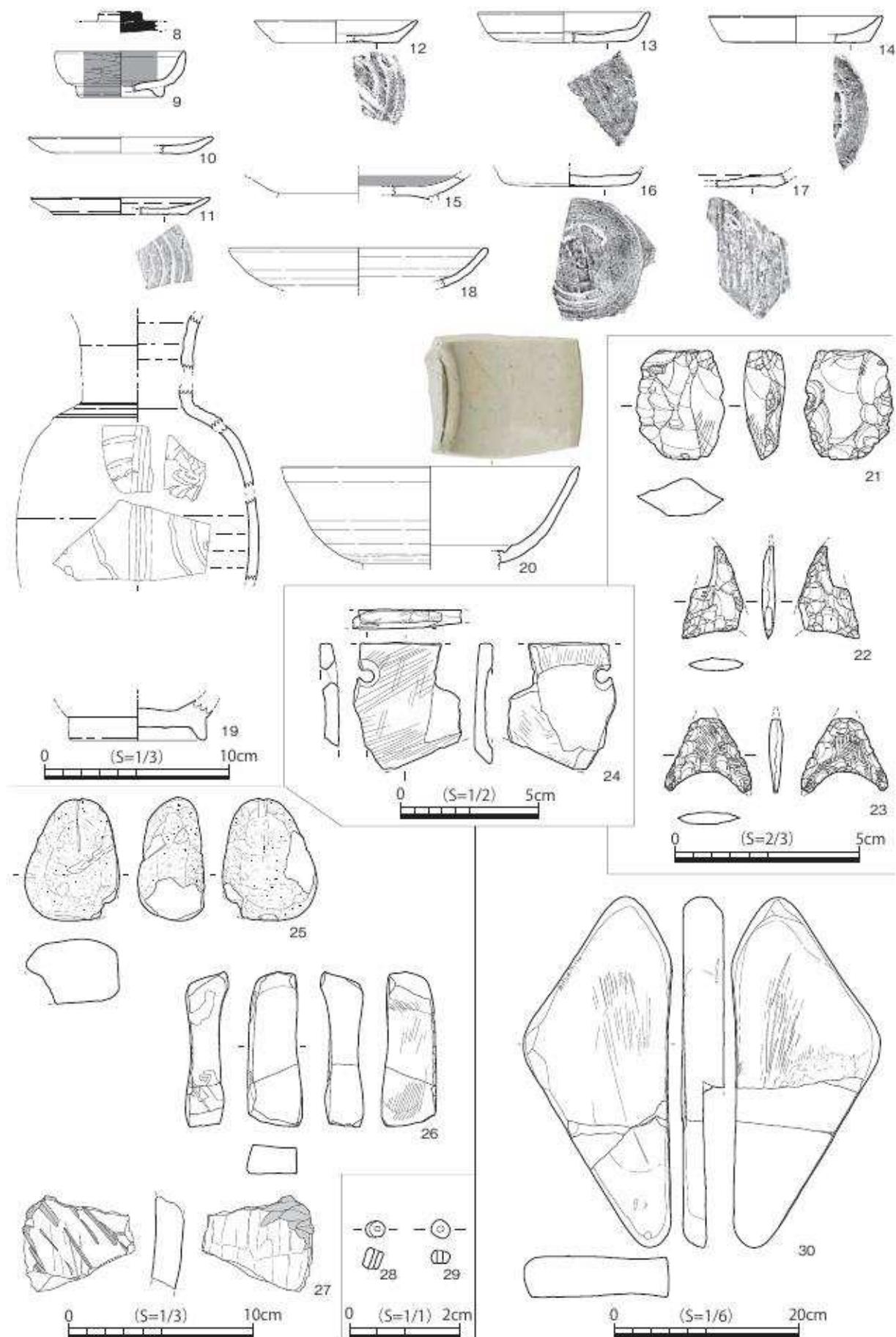


SC1-SL2 土層堆積状況(南から)

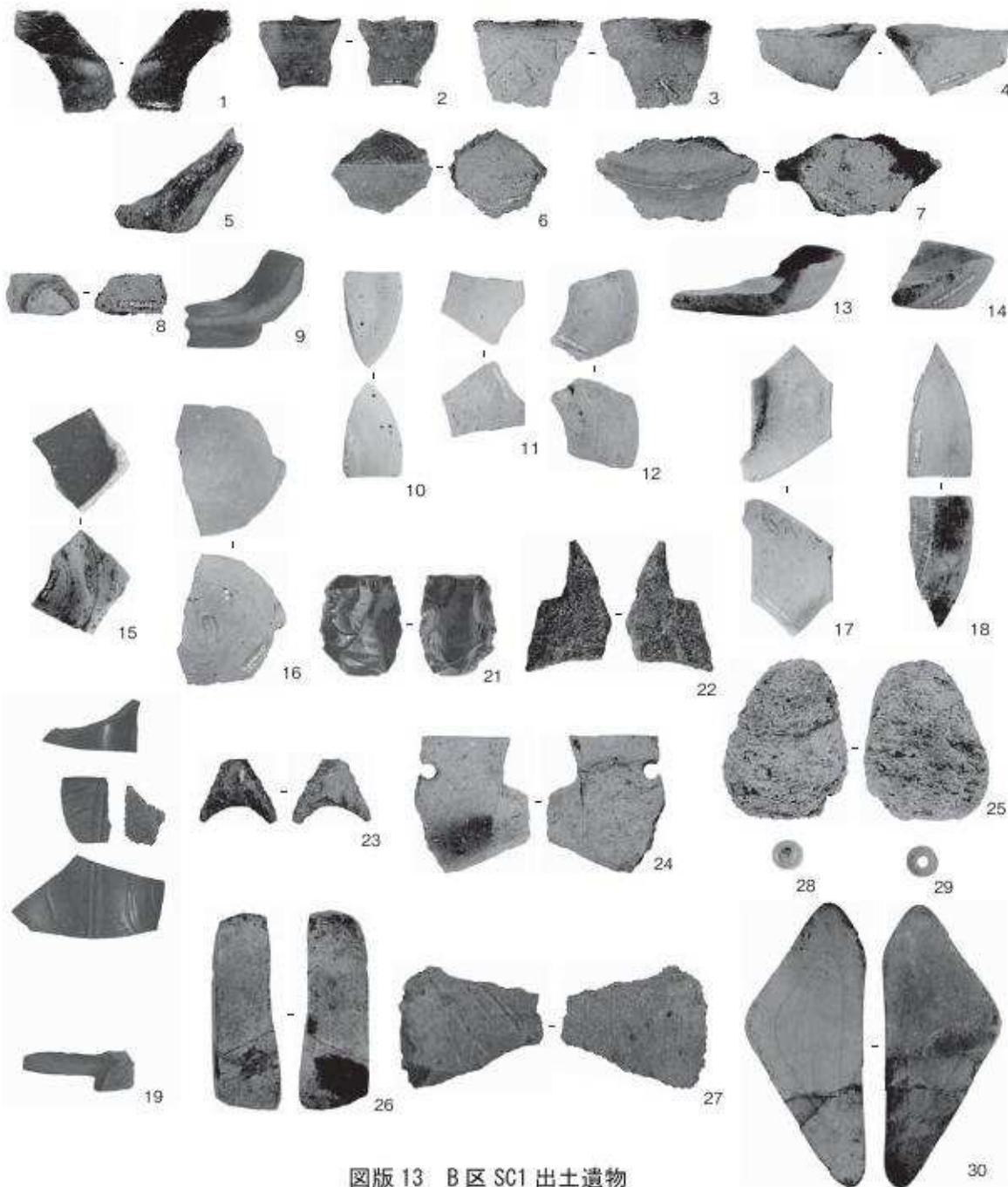
第 40 図 B 区 SC1 遺構実測図 (S=1/80)



第 41 図 B 区 SC1 出土遺物実測図①(S=1/3)



第42図 B区SC1出土遺物実測図②(S=2/3, 1/2, 1/3, 1/4, 1/6)



図版 13 B 区 SC1 出土遺物

工痕と思われる工具痕も残る。28・29はガラス小玉。いずれもエメラルドグリーンの発色である。

なお、SC1-SL6床面付近で検出した炭化物を元に放射性炭素年代を測定したところ、 $1,970 \pm 20$ 年 BP という年代が得られた(第4章参照)。出土遺物には相当量の弥生土器があるものの、古代末～中世の遺物を含むことから、SC1はこの時期の遺構とするのが妥当であろう。年代測定した炭化物は、SC1掘削時に弥生時代の遺構を搅乱し、埋没時に混入したものと考えられる。

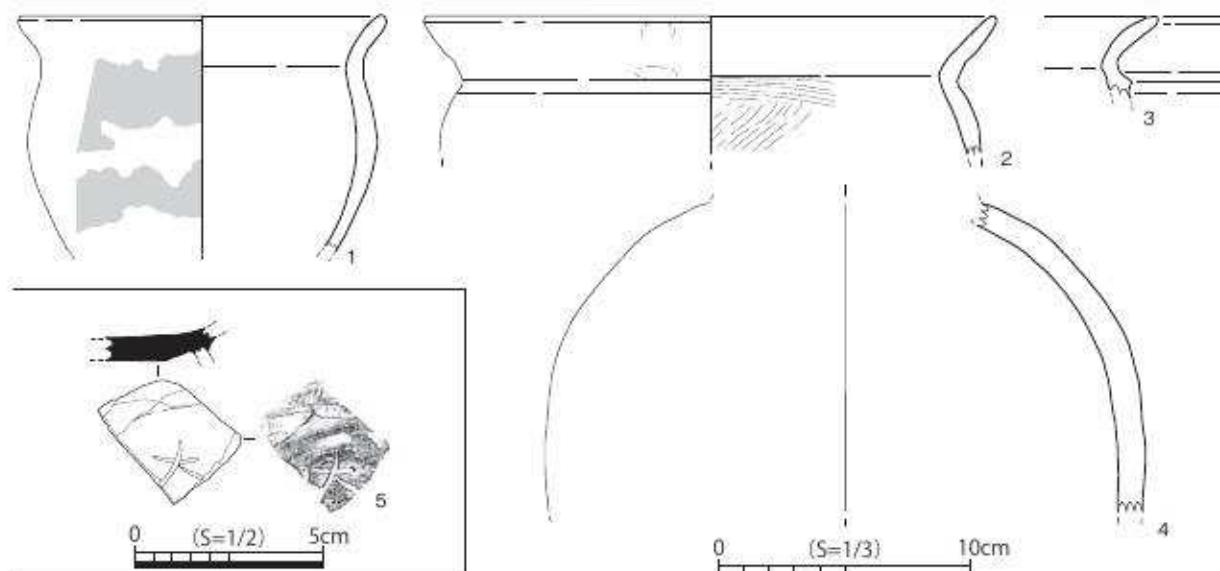
#### ・ SC2(第25図・第43図)

B区9680～9682グリッドで検出した堅穴建物。調査区西端で一部を検出したのみで、大部分は調査区外に延びる。平面方形もしくは長方形と推測され、主軸は北西～南東方向である。規模は長軸長4.1m、検出面からの深さ0.25mである。床面検出時に拳大の礫が集中して見つかり、これらの礫に混じっ

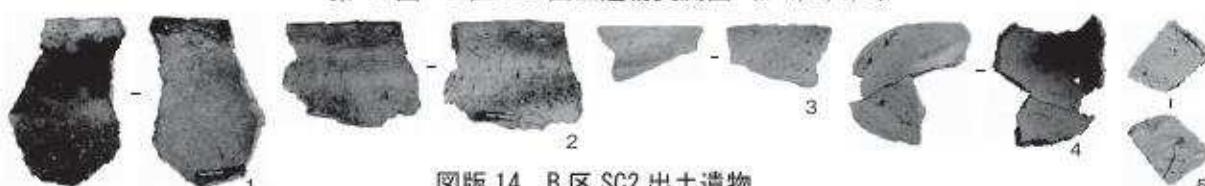




第43図 B区SC2遺構実測図(S=1/80)



第44図 B区SC2出土遺物実測図(S=1/2, 1/3)



図版14 B区SC2出土遺物

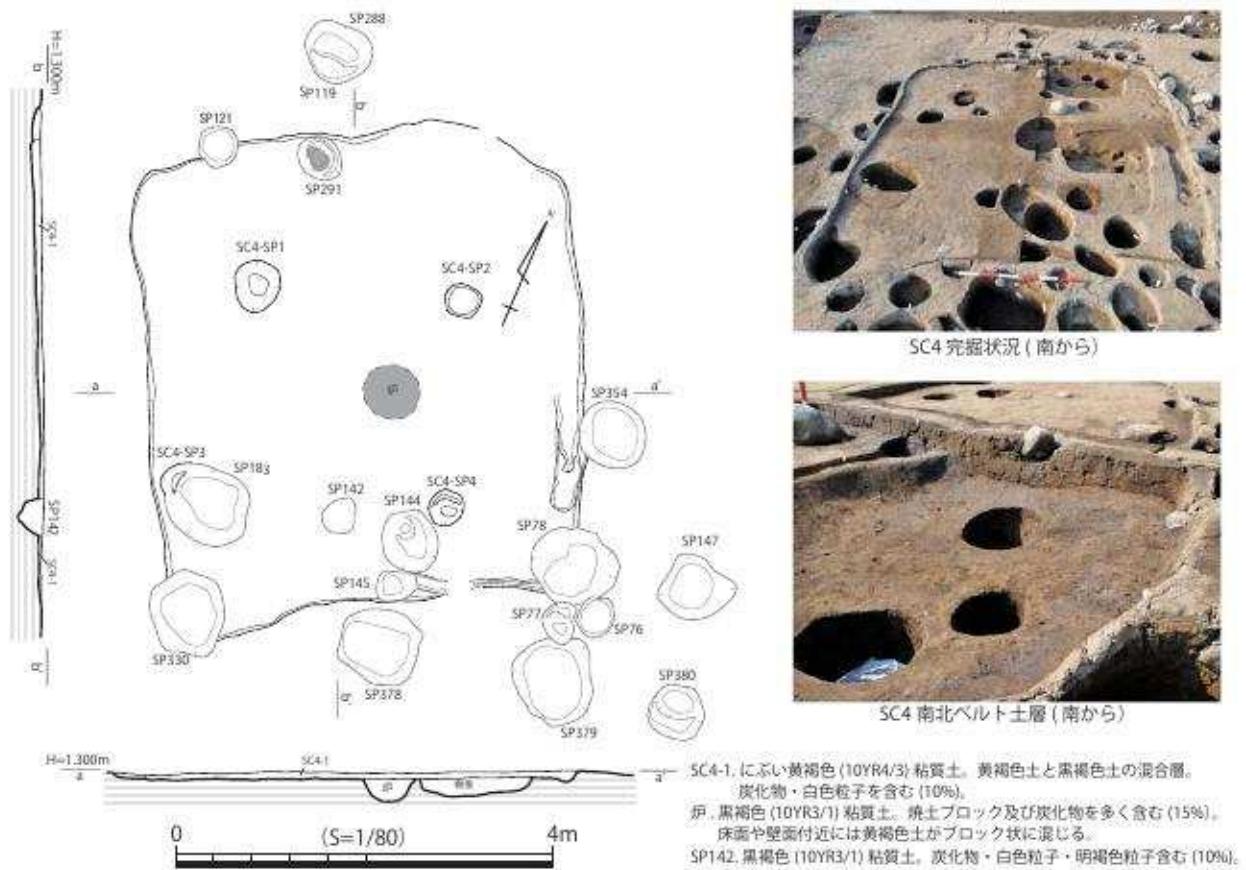
第20表 B区SC2出土遺物観察表

番号	出土箇所/リット	層位	種類	形状	外観	内観	特徴	削土	備考
1	BK9480	SC2-1底面	漆付土器・鉢	口縁	外側: 黒褐色(10YR3/1) 内側: 黄褐色(10YR3/3)	外側: 黑褐色(10YR3/1) 内側: 黄褐色(10YR3/3)	平滑	平滑	漆付、黒褐色、内側黄褐色
2	BK9480	SC2-1底面	漆付土器・鉢	口縁	外側: 黒褐色(10YR3/1) 内側: 黄褐色(10YR3/3)	外側: 黑褐色(10YR3/1) 内側: 黄褐色(10YR3/3)	ナメル化	ナメル化	漆付、黒褐色
3	BK9480	SC2-1底面	漆付土器・鉢	口縁	外側: 黒褐色(10YR3/1) 内側: 黄褐色(10YR3/3)	外側: 黑褐色(10YR3/1) 内側: 黄褐色(10YR3/3)	ナメル化	ナメル化	漆付、黒褐色
4	BK9480	SC2-1底面	漆付土器・鉢	口縁	外側: 黒褐色(10YR3/1) 内側: 黄褐色(10YR3/3)	外側: 黑褐色(10YR3/1) 内側: 黄褐色(10YR3/3)	ナメル化	ナメル化	漆付、黒褐色
5	組合器・灰	B区948B SC2-1溝							底部、「火」の刻畫あり

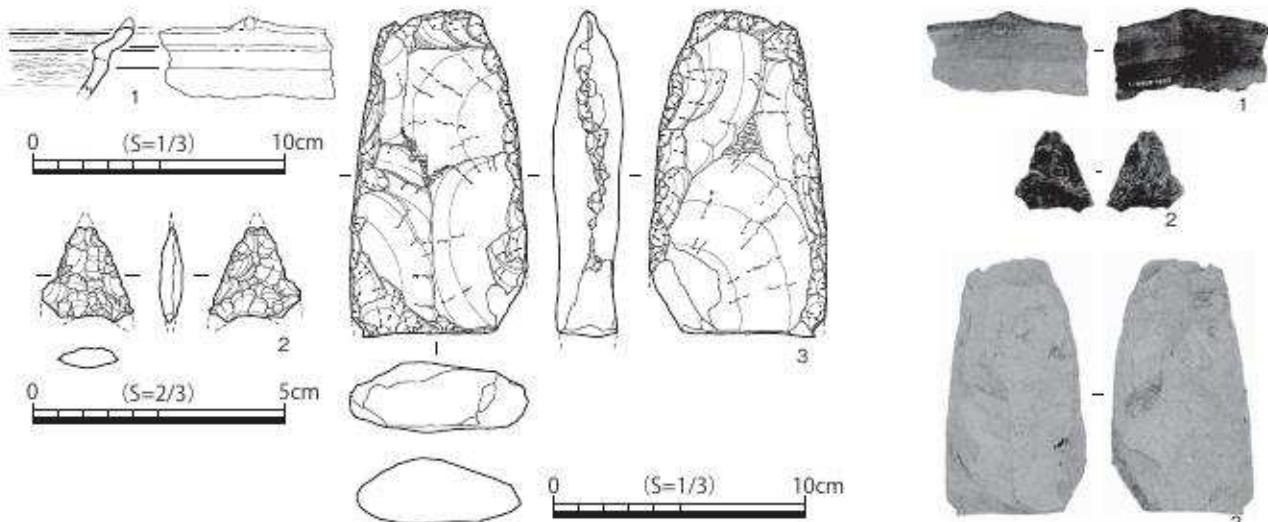
#### ・SC5(第25図・第47図)

B区9480～9482グリッドで検出した堅穴建物。北側の一部が調査区外となる。平面方形で主軸は南北方向である。規模は東西長4.5m、検出面からの深さ0.1mである。埋土が薄いうえ、SP309・SP310といった大型遺構に切られており、残存状況は良くない。柱穴は4基を方形に配置する。床面で硬化面や炉跡は確認されなかった。

遺物は縄文晩期土器浅鉢腔部片が出土した(第48図1)。胴張浅鉢の腔部で内外面とも横方向のヘラ



第45図 B区SC4遺構実測図 ( $S=1/80$ )



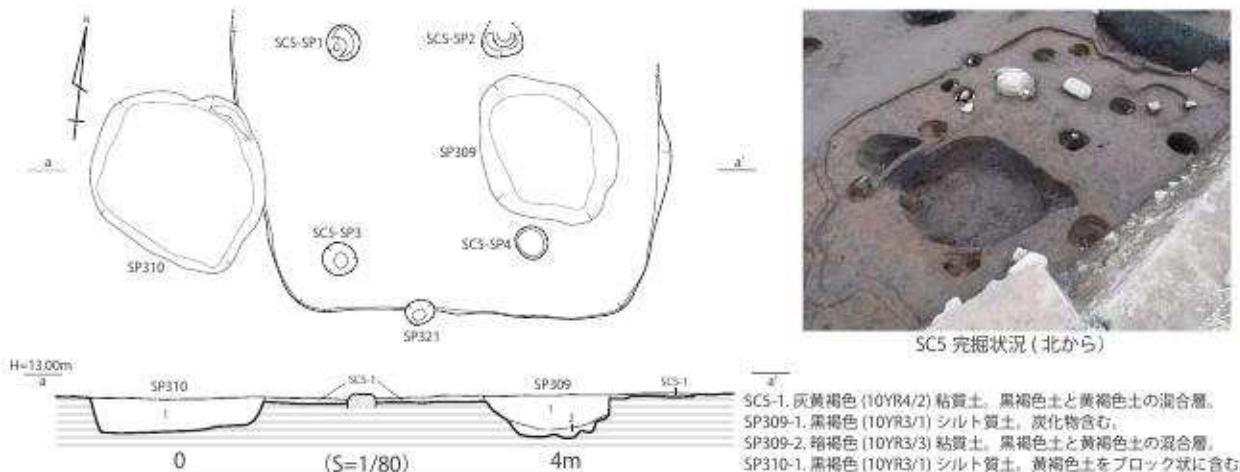
第46図 B区SC4出土遺物実測図 ( $S=2/3, 1/3$ )

図版15 B区SC4出土遺物

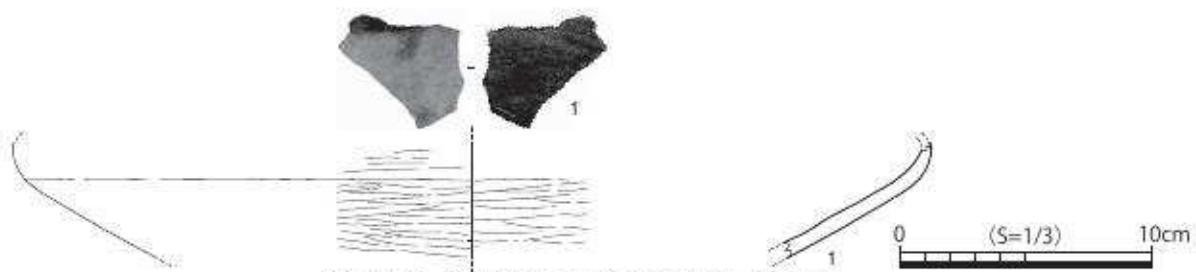
第21表 B区SC4出土遺物観察表

図版番号	出土位置(マッシュ)	層位	基準	層位	外観		内部		外観		内部		形状	地質	様子
					外観	内面	外観	内面	外観	内面	外観	内面			
1	B区9682	SC4-a	陶瓦(瓦・瓦底)	瓦底	丸窓	内面	丸窓	内面	丸窓	内面	丸窓	内面	丸窓	粘土	瓦底
2															
3															

ミガキで丁寧に調整する。胎土に雲母を多く含む。出土遺物は非常に少なく図化できる遺物は限られていたが、竪穴の平面形や規模、柱穴の配置はSC2・SC4と共通点が多いことから、弥生時代後期の遺構と判断した。出土遺物は、SC5が縄文時代晩期の包含層(4層)を掘削して構築されていることから、



第47図 B区SC5遺構実測図 (S=1/80)



第48図 B区SC5出土遺物実測図 (S=1/3)

第22表 B区SC5出土遺物観察表

項目	出土品グループ	層位	特徴	周囲	外観	内面	特徴	内面	周囲	構成	胎土	備考
1	ES9102	SB5	柱穴	外縁:100mm×15mm 内縁:100mm×15mm	丸底	内面:100mm×15mm	外縁:100mm×15mm	内面:100mm×15mm	外縁:100mm×15mm	内面:100mm×15mm	内面:100mm×15mm	

包含層からの混入と推測される。

#### ④土坑

##### ・SK1(第25図・第49図)

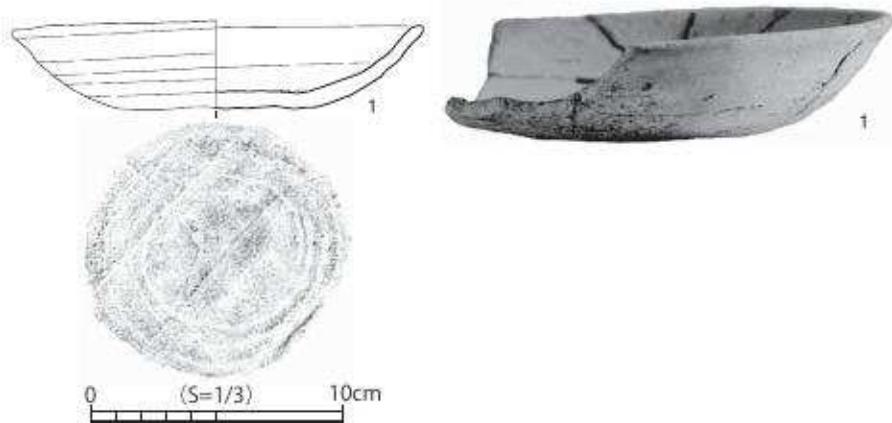
B区9682グリッドで検出した土坑。SB5を構成するSP374と一連の柱穴である可能性も考えたが、平面形の主軸が建物主軸と異なることや、遺物の出土状況、土層断面の観察から、切りあい関係にある別遺構と判断した(土層断面図は第35図 SP374土層図参照)。切り合は SP374→SK1となる。主軸は北東-南西方向で平面形は隅丸方形である。規模は南北・東西とも最大長1.05m、検出面からの深さ0.2mである。埋土は黒褐色土で炭化物等は含まない。床面では口を上に向けた状態で土師器壺が出土した(第50図1)。丸底壺で底径3/4程度残存。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。遺構の性格としては、土師器を副葬した土坑墓と考えられる。

##### ・SK2(第25図・第51図)

B区9482グリッドで検出した土坑。主軸は東西方向で平面形は隅丸長方形である。規模は南北長0.9m、東西長1.6m、検出面からの深さ0.1m未満で残存状況は良くない。埋土は炭化物や黄褐色粘質土をまだらに含む黒色粘質土である。樹根もしくは風倒木と思われる落ち込みを浅く再掘削して構築しており、中央部分は一部掘りすぎてしまった。遺物は、床面からやや浮いた位置で土師器小皿2枚が合わせ口の状態で出土した。また、これと隣接して土師器壺口縁部片も出土した。第52図1は土師器壺口縁部。胴部に丸みを帯び内湾気味に口縁部が立ち上がる。胎土に細かい金雲母を含む。2は土師器小皿で、合わせ口で検出した下の小皿にあたる。口縁端部を一部欠損するものの、ほぼ完形である。



第49図 B区SK1遺構実測図 (S=1/40)



第50図 B区SK1出土遺物実測図 (S=1/3)

第23表 B区SK1出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	備考
1	土師器・灰	B区9682	SK1・1層	16.3	11.0	3.5	—	へラ切り、胎土汗底あり

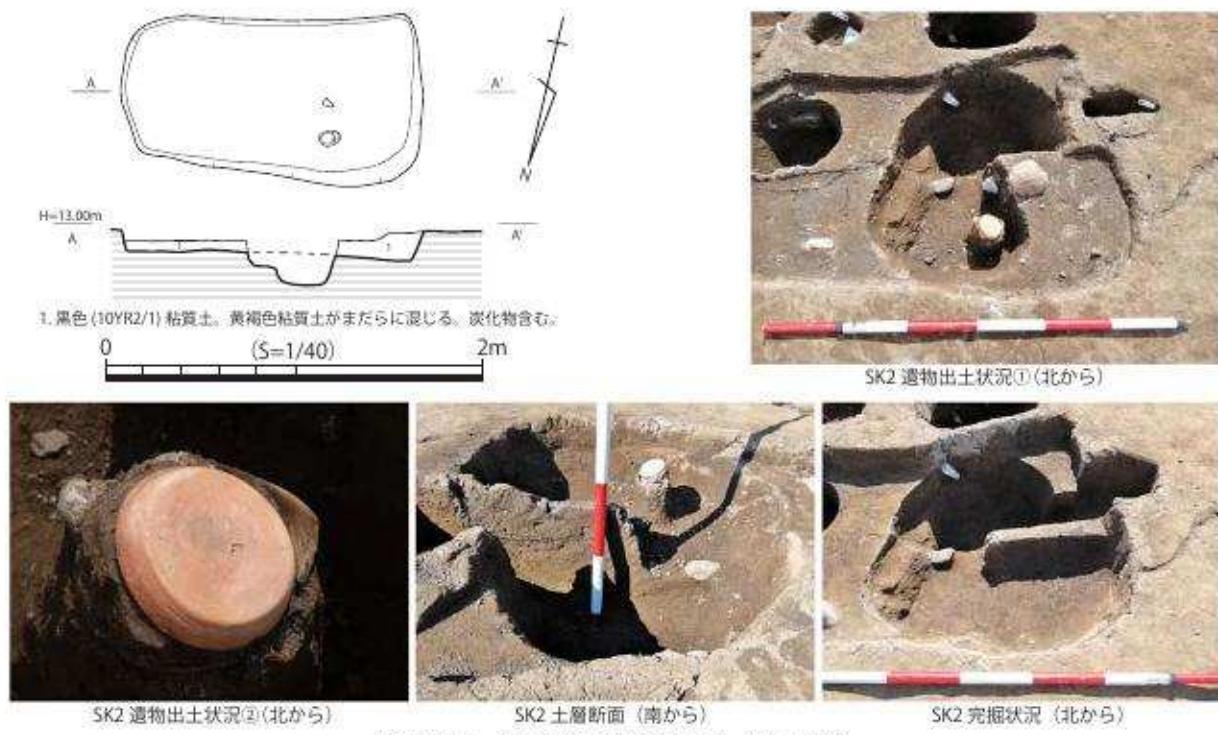
口縁部の立ち上がりは短く、底部はへら切りで板状圧痕が残る。内底面を軽くなれる。胎土に細かい金雲母を含む。3は土師器小皿。合わせ口で検出した上の小皿である。ほぼ完形。器高は2よりも高い。底部は丁寧になでて切り離し痕は確認できない。内底面は軽くなれる。胎土に細かい金雲母を含む。遺構の性格としては、土師器を副葬した土坑墓と考えられる。

#### ・SK3(第25図・第53図)

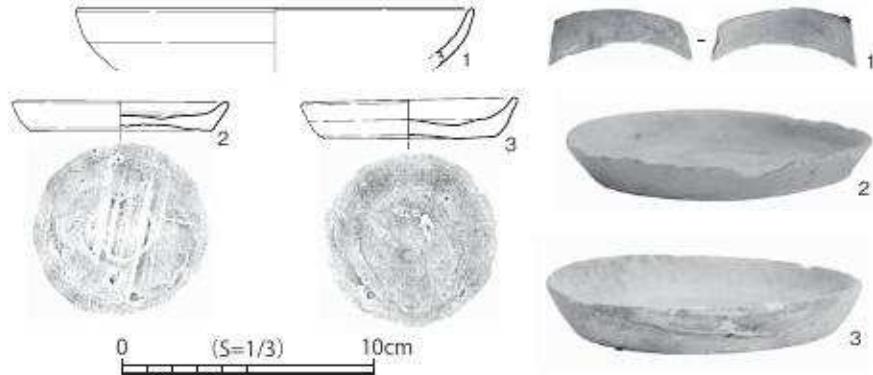
B区9682グリッドで検出した土坑。主軸は北西-南東方向で平面形は隅丸長方形である。規模は南北長1.3m、東西長1.0m、検出面からの深さ0.3mである。検出面から深さ0.1~0.15m付近に帯状にテラスを形成し二段掘りとなる。埋土は黒褐色粘質土で柱痕は確認できなかった。遺物は土師器坏口縁部が出土した(第54図1)。口径1/8程度残存。胎土に金雲母含む。遺構の性格は不明である。

#### ・SK4(第25図・第53図)

B区9684グリッドで検出した土坑。主軸は南北方向で平面形は不整長方形である。規模は南北長1.3m、東西長1.05m、検出面からの深さ0.55mである。断面逆台形の掘方で埋土は黒褐色粘質土である。遺物は石鎌が1点出土した(第54図2)。黒曜石製で側縁は肩が張って平面五角形状を呈す凹基鎌である。遺構の性格は不明である。



第51図 B区SK2遺構実測図 (S=1/40)



第52図 B区SK2出土遺物実測図 (S=1/3)

第24表 B区SK2出土遺物観察表

番号	遺物名	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	備考
1	土器・外	B区9482	SK2・1層	15.8	-	12.3	-	
2	土器・小皿	B区9482	SK2・1層	8.6	7.2	1.1	-	へラ切り、板状底盤あり
3	土器・小皿	B区9482	SK2・1層	8.6	7.1	1.6	-	

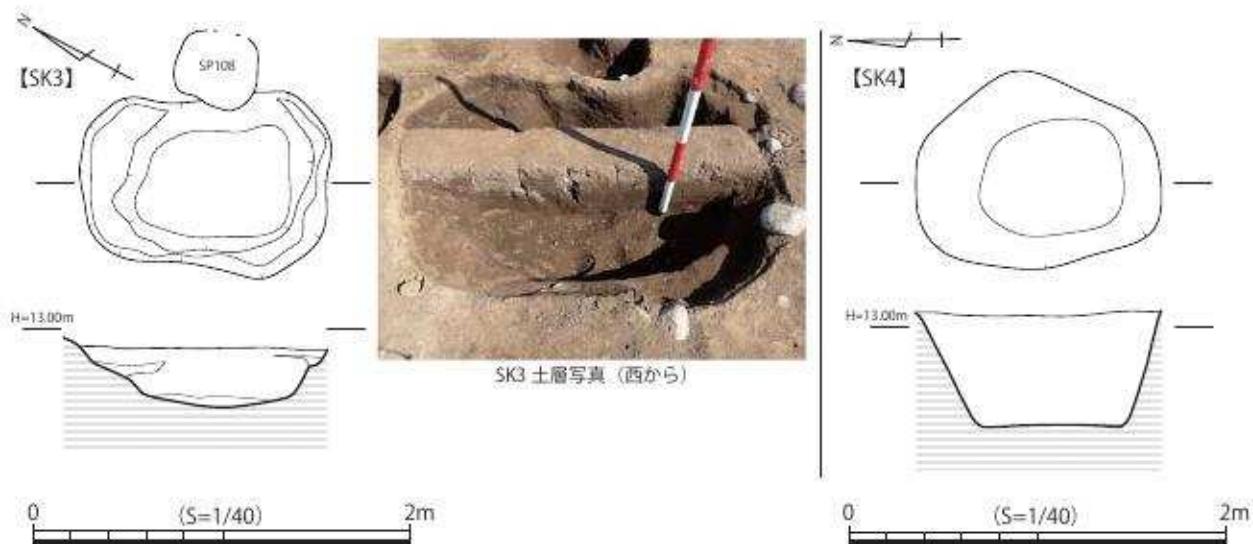
### ⑤配石遺構

#### ・SS1(第25図・第55図)

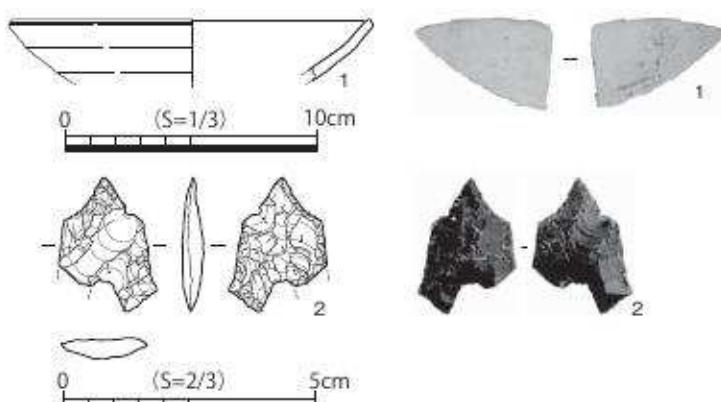
B区9482グリッドで検出した配石遺構。主軸は南北方向で平面形は長方形である。規模は長軸長0.75m、短軸長0.7mで、南半部に検出面から深さ0.05m前後の浅い掘り込みが伴うが、残りは非常に悪い。拳大～人頭大の角礫を方形に配置し、北側にも板石と小礫を方形に配置する。北側の方は床面標高が微妙に高くなっている、2つの配石遺構が切り合っている可能性も考えられる。埋土は黒褐色土に黄褐色土がシミ状に混じり、炭化物や焼土は含まない。遺物は出土しなかった。性格は不明である。

#### ・SS2(第25図・第55図)

B区9482グリッドで検出した配石遺構。主軸は南北方向で平面形は長方形である。規模は長軸長0.9m、短軸長0.6m、検出面からの深さ0.05mで残りは非常に悪い。掘方に沿って人頭大～拳大の礫を配置



第53図 B区SK3・SK4遺構実測図 ( $S=1/40$ )



第54図 B区SK3・SK4出土遺物実測図 ( $S=2/3, 1/3$ )

第25表 B区SK3・SK4出土遺物観察表

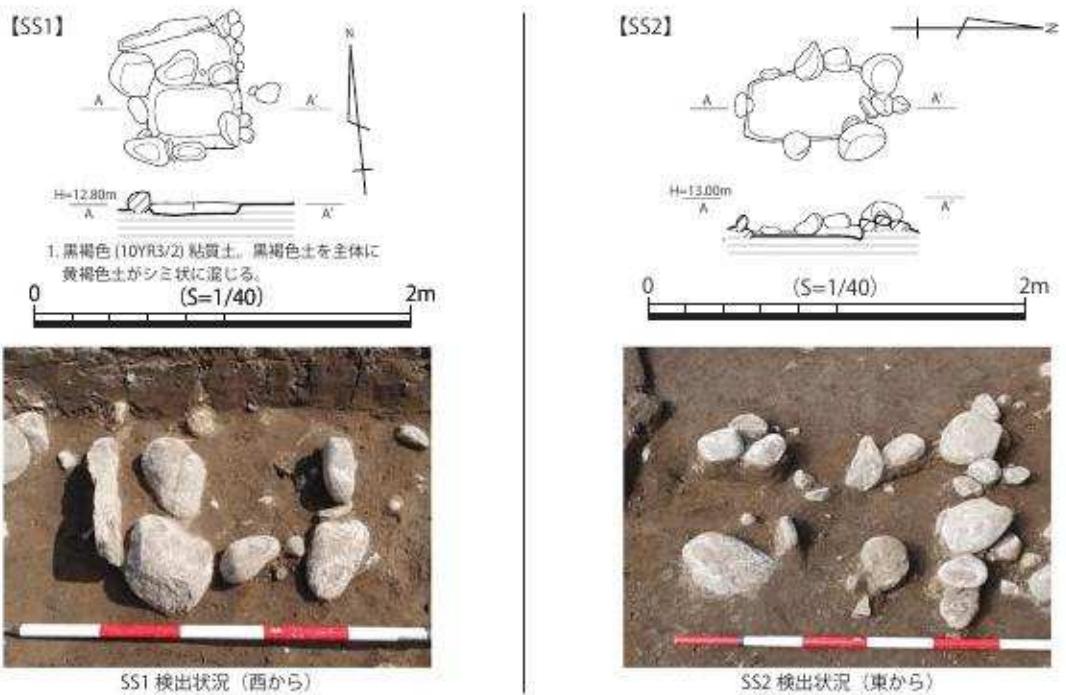
番号	遺物名	調査地	遺物名・層位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	備考
1	土師器・环	B区9682	B区SK3・1層	14.4	-	12.4	-	
2	石錐	B区9682	SK4	黒曜石	26.8	19.5	4.5	1.45

するが、南側小口から東側にかけては礫が疎らになる。埋土は黒褐色土に黄褐色土が混じる粘質土で、焼土や炭化物は含まない。遺物は出土しなかったが埋葬施設の可能性がある。

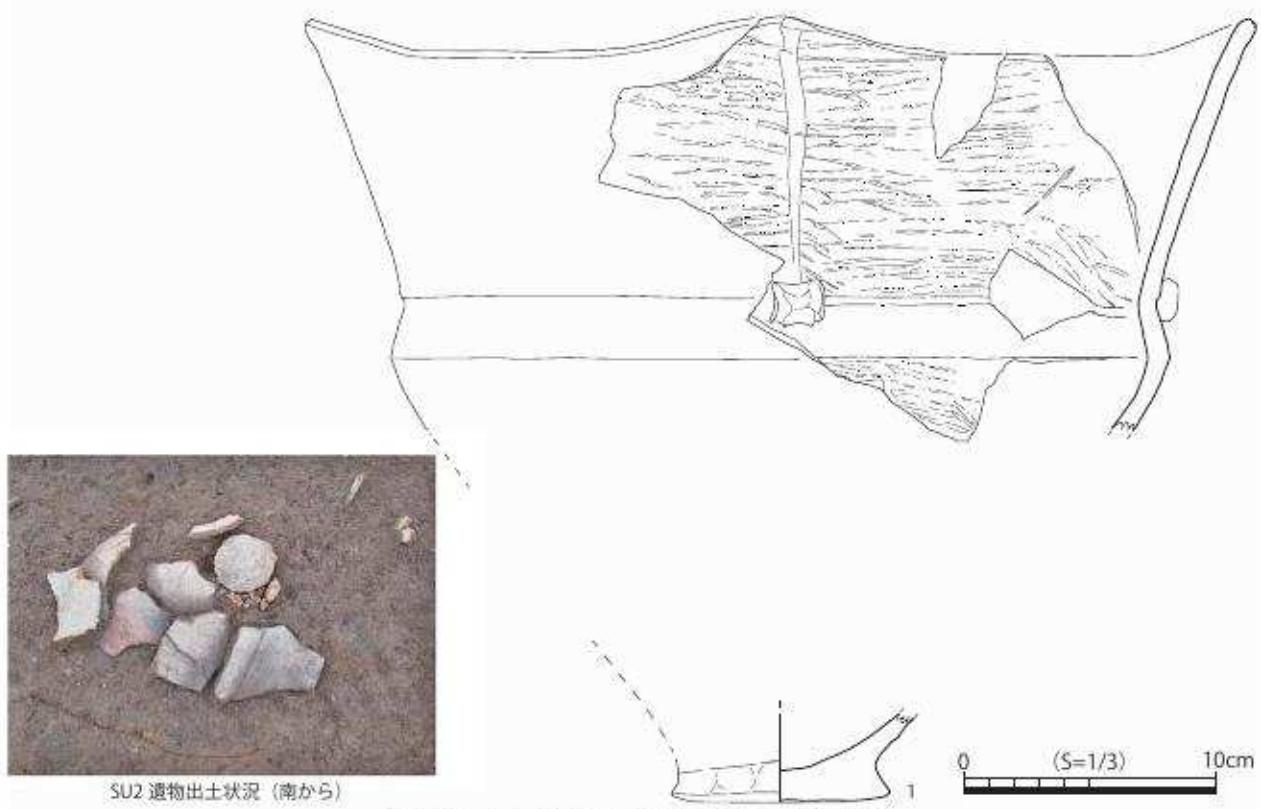
#### ⑥ 遺物集積

##### ・ SU2(第25図・第56図)

B区9680グリッドで検出した遺物集石遺構。直径0.5m程の範囲に、縄文晩期土器深鉢の口縁部と底部がまとまって出土した。接合したところ、胴部を欠くもののすべて同一個体であった(第59図1)。頭部が内屈して口縁部が外反する波状口縁深鉢である。外面には条痕が残るが頭部はきれいにナデ消し、波頂部に対応する位置にリボン状突起を貼り付ける。リボン状突起は現状で2箇所確認しているが、口径から復元すると本来は4箇所付いていたものと推測される。波頂部から頭部のリボン状突起に向けて指頭で直線状に強くなれて、浅い沈線文に似た効果を出している。底部は平底で端部は外側に張り出す。胎土には結晶片岩の細粒を多く含み、全体に独特の光沢を帯びる。



第55図 B区 SS1・SS2 遺構実測図 (S=1/40)

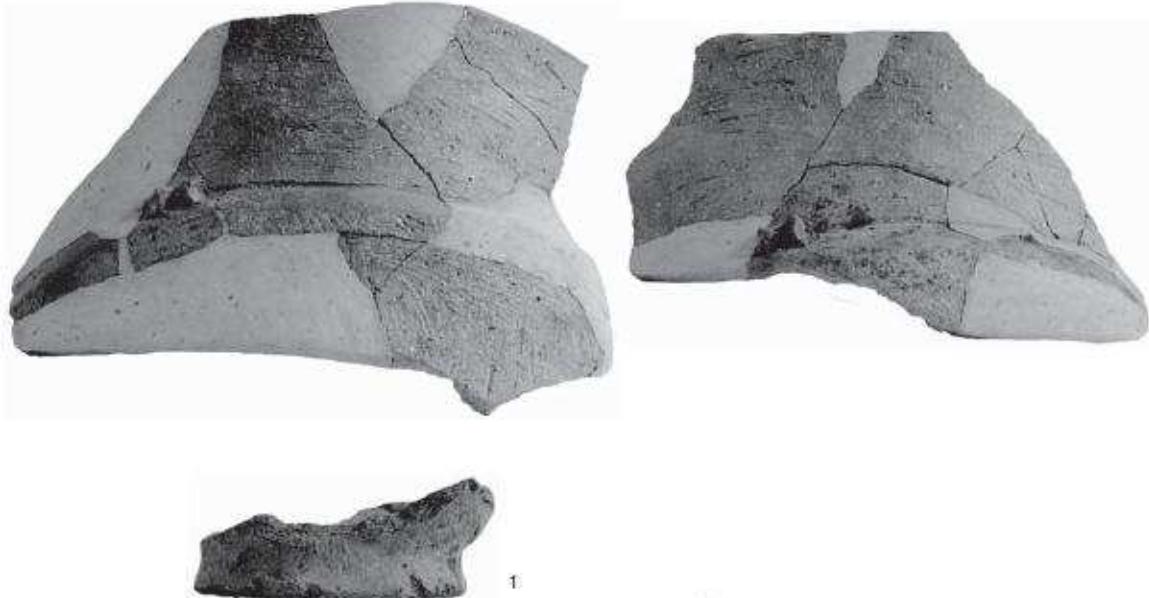


第56図 B区 SU2 出土遺物実測図 (S=1/3)

## ⑦不明遺構

### ・SX1(第25図・第57図)

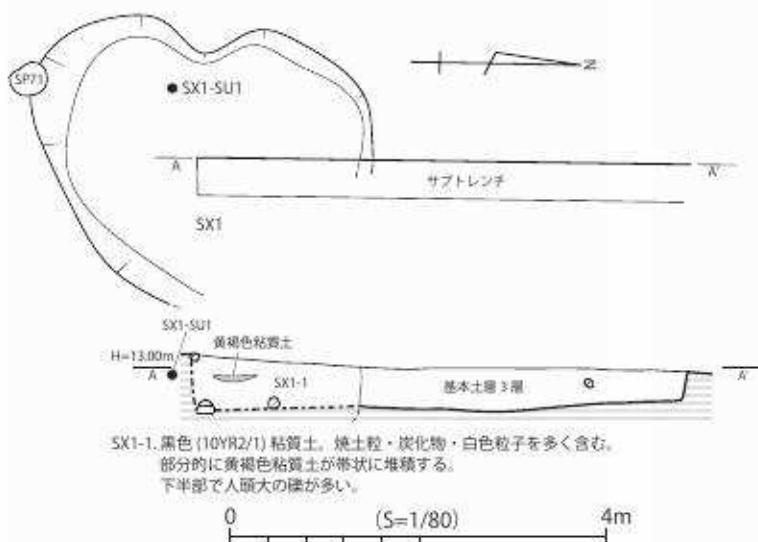
B区9482グリッドで検出した不明遺構。平面不整楕円形で、規模は長軸長3.7m、短軸長3.1m、検出面からの深さ0.3mである。4層上面で検出したが、北東部分は掘方の立ち上がりが曖昧で輪郭がつか



図版 16 B 区 SU2 出土遺物

第 26 表 B 区 SU2 出土遺物観察表

番号	出土品クリア	形状	素材	性状	内面	外側	内面	外側	内面	外側	内面	外側
1	1055800-004	22.2×17.1×10.1cm	陶土質・陶器	口縁・底面	内面・底面(1055800-004)	外側・底面(1055800-004)	内面・底面(1055800-004)	外側・底面(1055800-004)	内面・底面(1055800-004)	外側・底面(1055800-004)	内面・底面(1055800-004)	外側・底面(1055800-004)



SX1 石群検出状況 (東から)

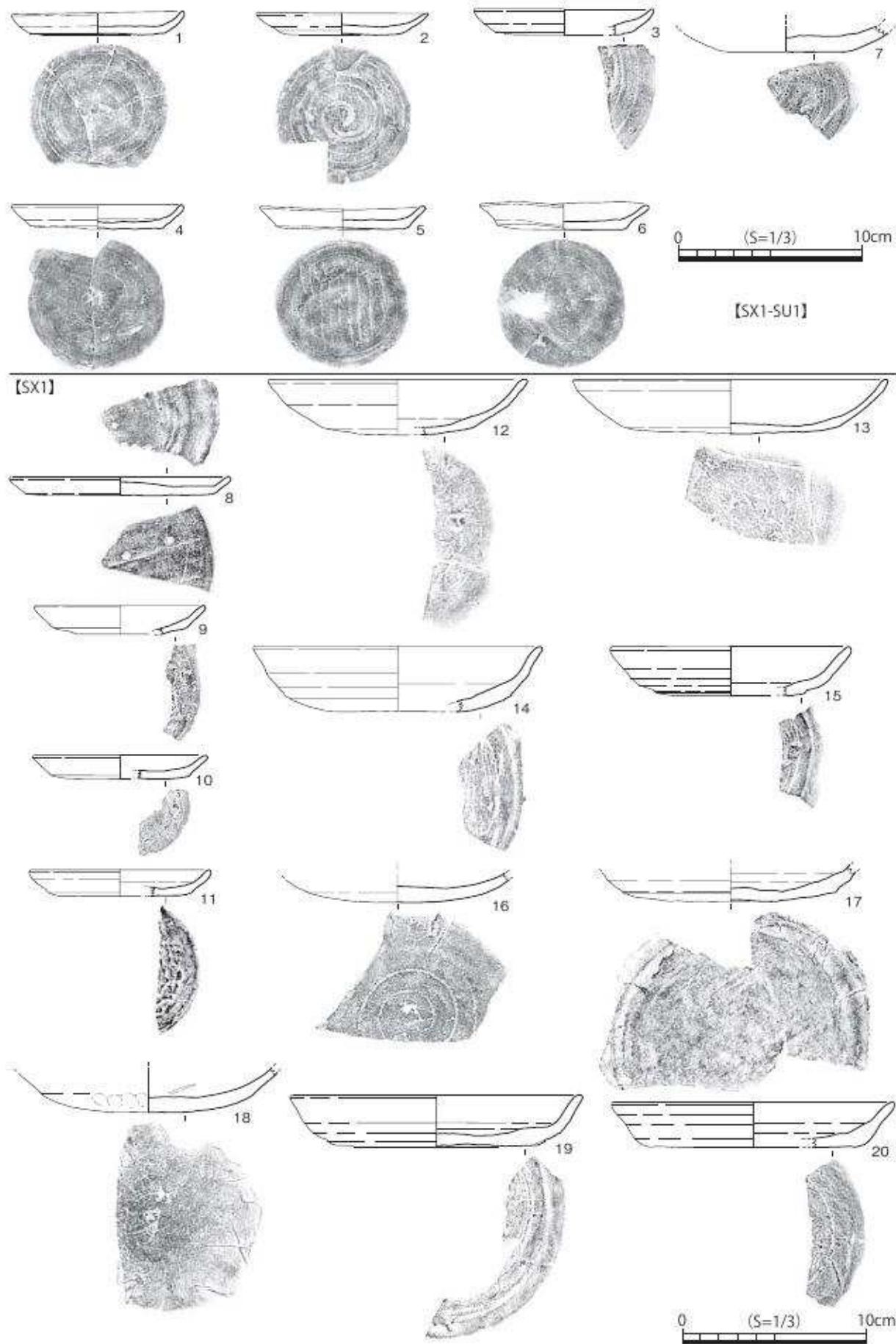


SX1 南北ペルト土層 (西から)

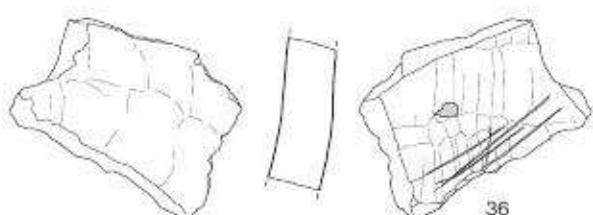
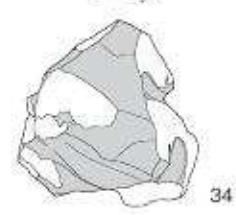
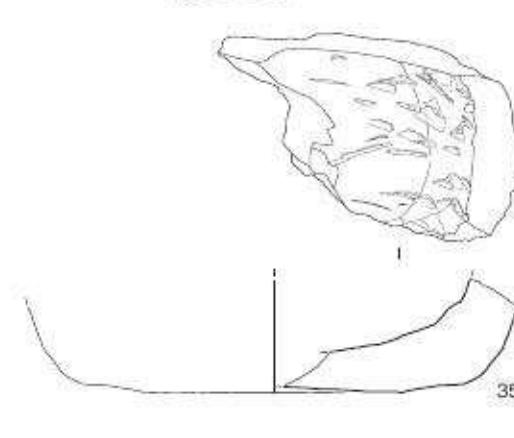
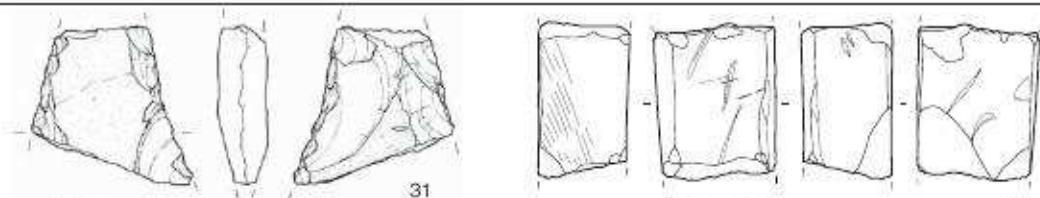
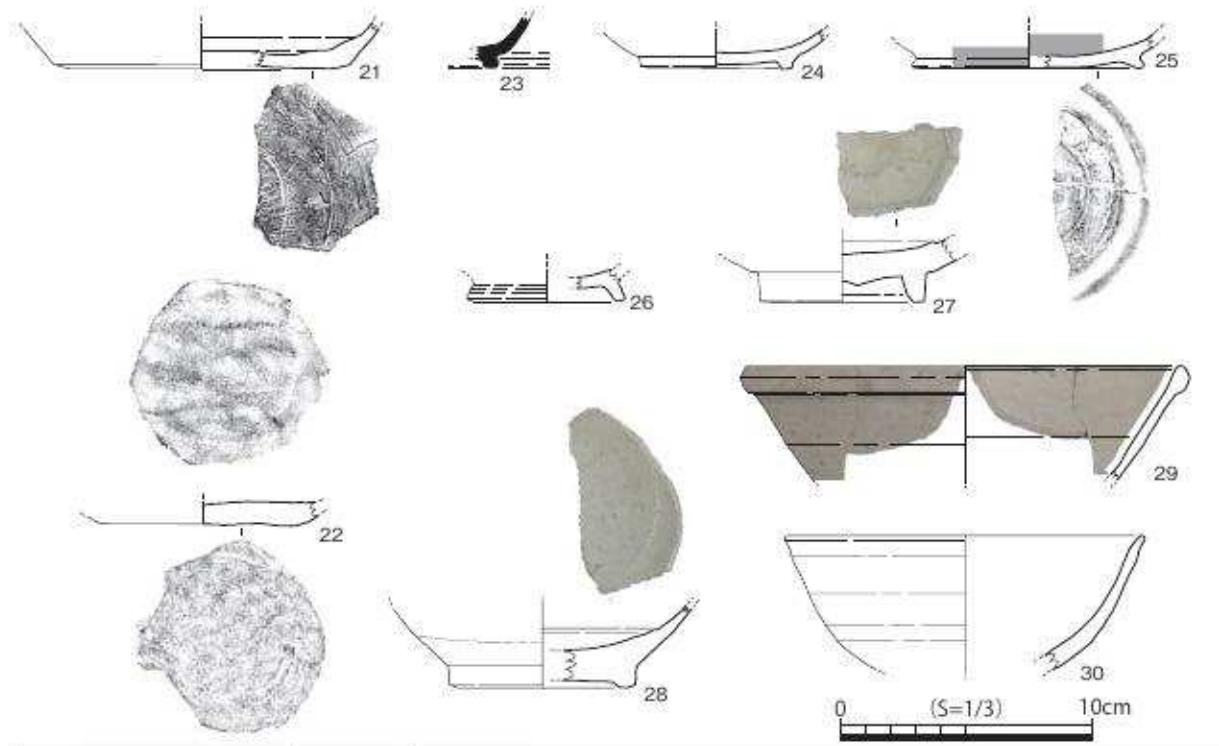


SX1-SU1 検出状況 (西から)

第 57 図 B 区 SX1 遺構実測図 (S=1/80)



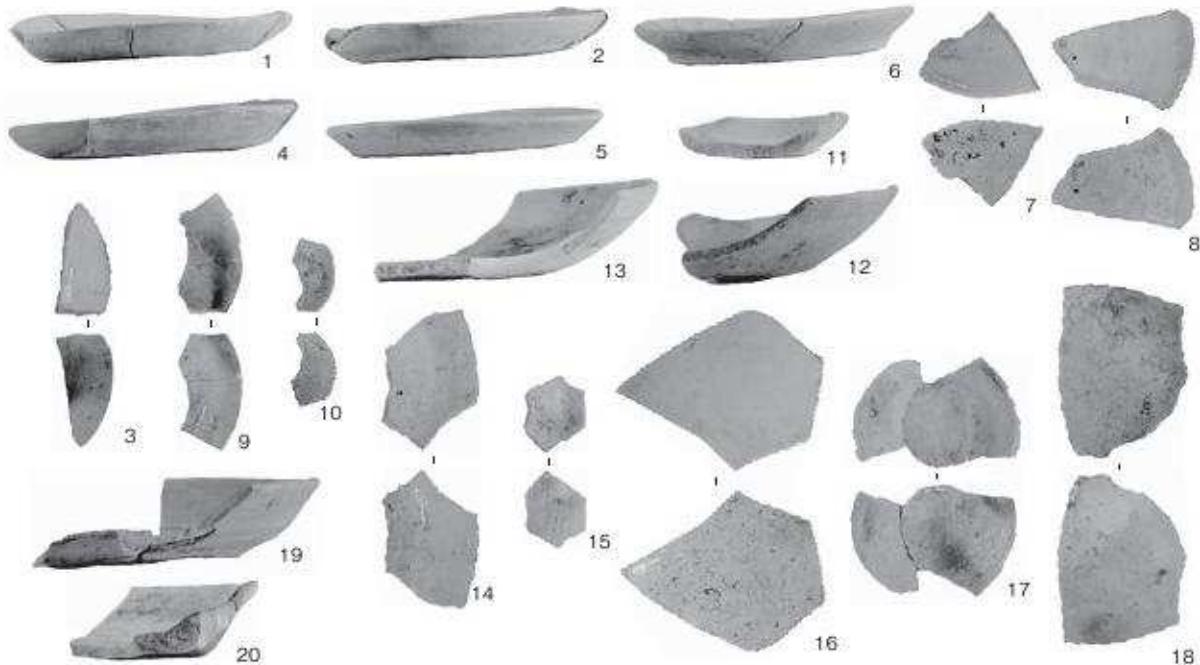
第 58 図 B 区 SX1 出土遺物実測図①(S=1/3)



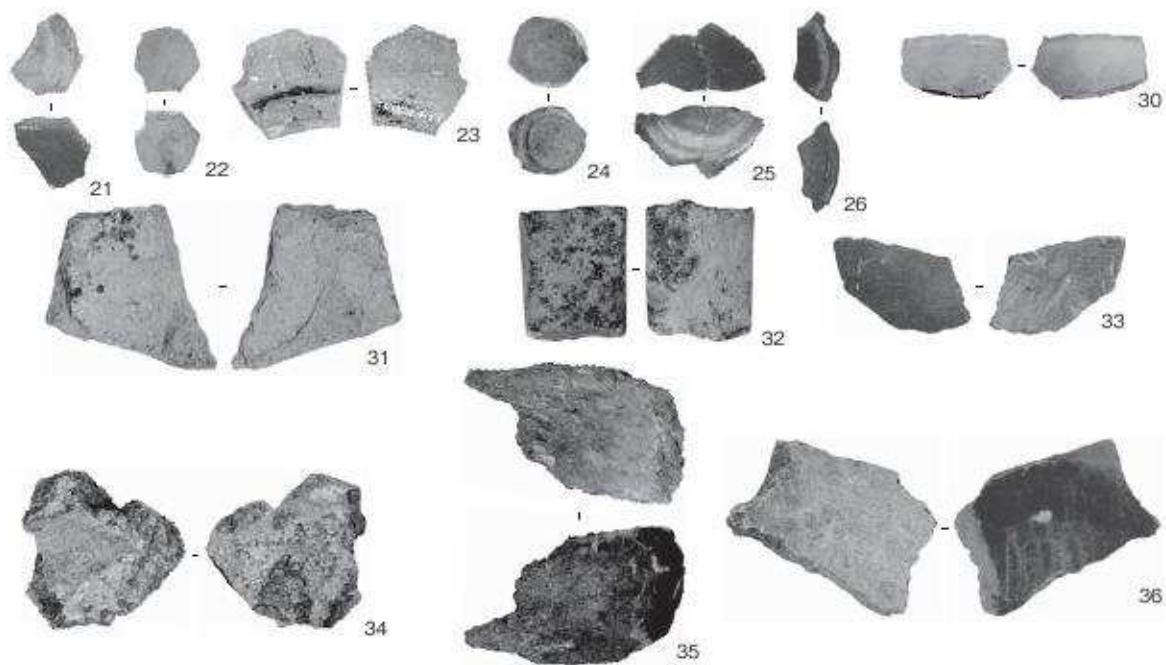
\*網掛けは二次加工痕

0 (S=1/3) 10cm

第 59 図 B 区 SX1 出土遺物実測図②(S=1/3)



図版17 B区SX1出土遺物①



図版18 B区SX1出土遺物②

めなかった。埋土は炭化物・焼土粒を多く含み、部分的に4層褐色土が帯状に堆積する。また、床面付近で基盤礫層に由来する人頭大の角礫がまとまって出土した。これらの点から、SX1は落雷による倒木痕と考えられ、大木の横転により4層や基盤礫層が巻き上げられて再堆積したものと推測する。また、遺構検出面で土師器小皿が5枚重なった状態で出土した(SX1-SU1)。周辺には土師器小皿片が散見され、本来は最低でも6枚は重なっていた可能性がある。

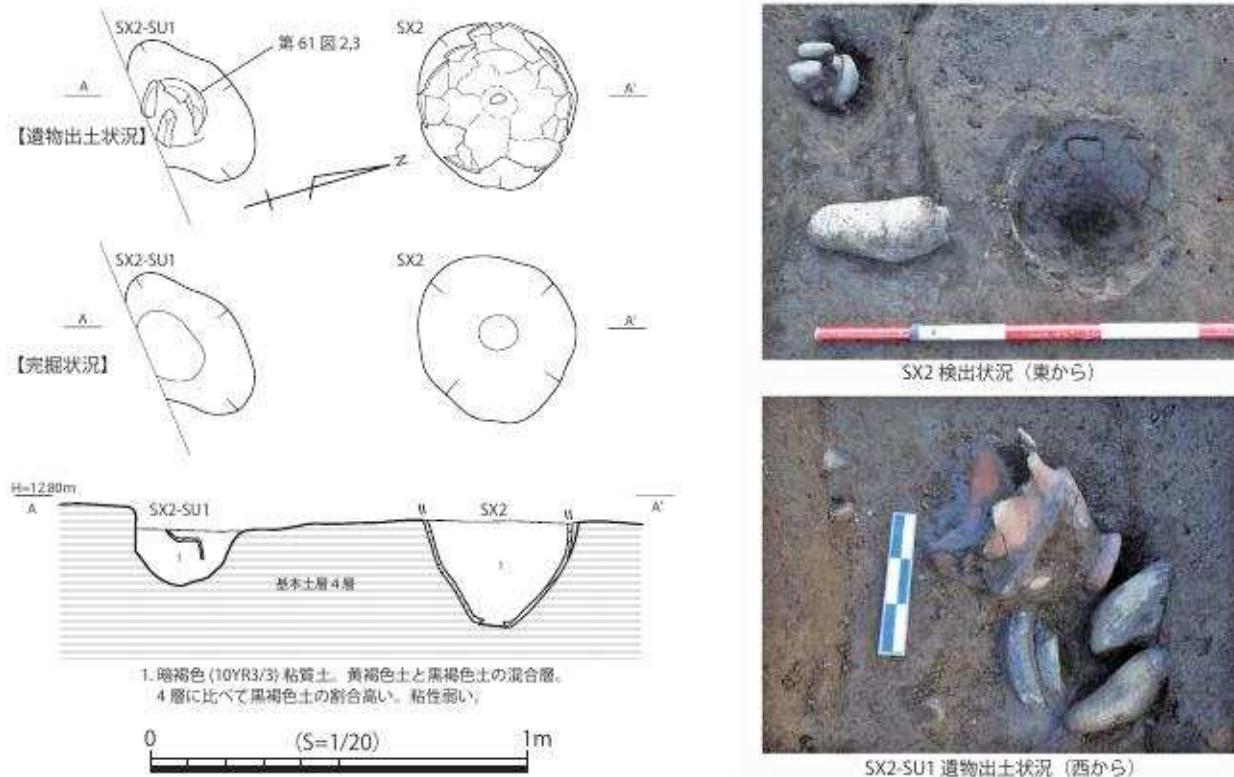
遺物は埋土内を中心比較的多く出土した(第58図～第59図)。第58図1～7はSX1-SU1及びその周辺から出土した土師器である。1は土師器小皿で口径4/3程度残存。体部は底部から丸みをおびて内湾気味に立ち上がる。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。底部内面はヨコナデ。胎土は精良で金

第27表 B区SX1出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地区	造標・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
1	土師器・小皿	BK9482	SU2-P1	9.4	7.2	1.3	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
2	土師器・小皿	BK9482	SU2-P1・P2	9.3	7.0	1.2	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
3	土師器・小皿	BK9482	SU1	9.7	7.4	1.4	—	ヘラ切り
4	土師器・小皿	BK9482	SU1-P1	9.3	7.2	1.3	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
5	土師器・小皿	BK9482	SU1-P1一括	9.6	7.2	1.2	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
6	土師器・小皿	BK9482	SU1-P1	9.2	7.0	1.0	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
7	土師器・耳	BK9482	SU1	—	6.6	(1.4)	—	糸切り？
8	土師器・皿	BK9482	SX3	12.0	10.2	2.0	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
9	土師器・小皿	BK9482	SX1・1層	9.2	7.0	1.6	—	ヘラ切り
10	土師器・小皿	BK9482	SX1・1層	9.4	7.6	1.3	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
11	土師器・小皿	BK9482	SX3	9.8	7.2	1.4	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
12	土師器・丸底外	BK9482	SX1・1層	14.0	8.2	3.0	—	ヘラ切り
13	土師器・丸底外	BK9482	SX3	17.0	11.4	2.9	—	ヘラ切り
14	土師器・丸底外	BK9482	SX1	15.6	12.3	3.5	—	ヘラ切り
15	土師器・外	BK9482	SX1・1層	13.0	8.2	2.7	—	ヘラ切り
16	土師器・丸底外	BK9482	SX3	—	9.6	(1.6)	—	ヘラ切り
17	土師器・耳	BK9482	SX3・1層	—	11.4	(2.0)	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
18	土師器・耳	BK9482	SX1	—	11.0	(2.4)	—	ヘラ切り、内面コテアリあり
19	土師器・耳	BK9482	SX1・1層	15.8	11.6	2.7	—	ヘラ切り
20	土師器・耳	BK9482	SX3	15.2	12.0	2.6	—	ヘラ切り
21	土師器・耳	BK9482	SX1・1層	—	11.6	(1.8)	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
22	土師器・耳	BK9482	SX3	—	(7.8)	(0.9)	—	ヘラ切り、板状圧痕あり
23	敷毛器・鉢	BK9482	SX3	—	—	(2.0)	—	ヘラ切り
24	黑色土器鉢・碗	BK9482	SX1・1層	—	6.1	(1.5)	—	ヘラ切り
25	黑色土器鉢・碗	BK9482	SX3	—	9.0	(1.4)	—	ヘラ切り
26	黒色土器鉢・碗	BK9482	SX3	—	6.2	(1.2)	—	ヘラ切り
27	白縁・鉢	BK9482	SX3	—	6.4	(2.5)	中国	—
28	白縁・鉢	BK9482	SX3	—	6.7	(3.2)	中国	—
29	白縁・鉢	BK9482	SX3	16.9	—	(4.5)	中国	—
30	白縁・鉢	BK9482	SX3	14.1	—	(5.3)	中国	—

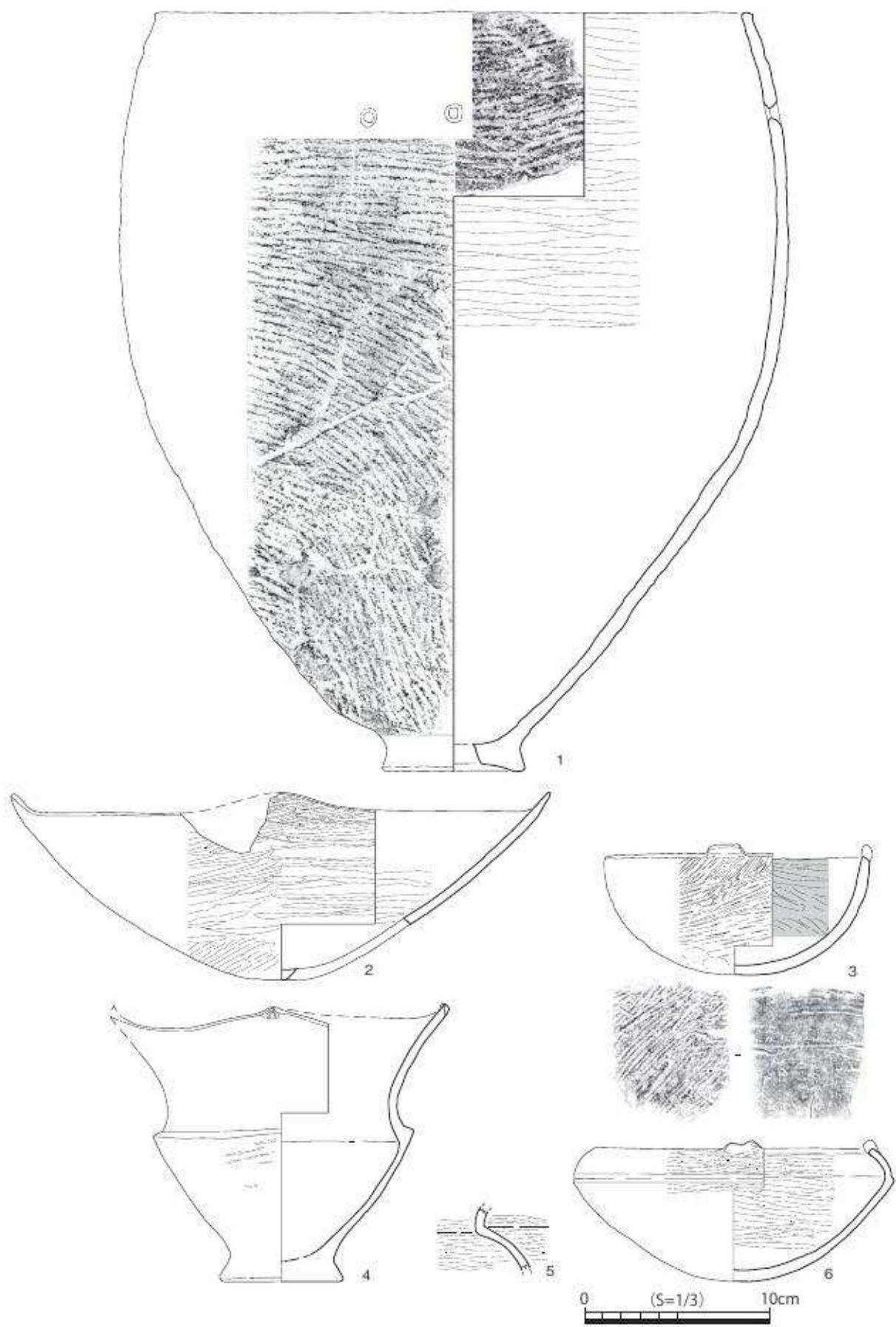
図版番号	器種	出土区グリッド	層位	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
33	扁平打削石斧	BK9482	SX1	安山岩	62.0	52.5	19.5	77.28	—
34	研石	BK9480	SX1	砂質岩	62.0	48.5	16.0	167.95	—
35	石磚	BK9482	SX1	漂石	—	—	—	16.72	復元口径 16.6cm, 厚高 3.0cm
36	石磚	BK9480	SX1	漂石	73.5	71.8	26.0	126.33	—
37	石磚	BK9482	SX1・1層	漂石	—	—	—	314.55	復元口径 16.3cm, 厚高 4.5cm
38	石磚	BK9480	SX3	漂石	86.8	92.9	27.9	205.70	—

雲母を含む。2は土師器小皿で口径3/4程度残存。体部は薄く直線的に伸びる。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。底面内面はヨコナデ。胎土は精良で金雲母を含む。3は土師器小皿で口径1/8程度残存。体部は丸みを持って内湾気味に立ち上がる。底部切り離しはヘラ切り。胎土は精良で金雲母を含む。4は土師器小皿で口径3/4程度残存。体部は薄く内湾気味に立ち上がる。底部切り離しはヘラ切りでナデ消すもののわずかに板状圧痕残す。底面内面はヨコナデ。胎土は精良で金雲母含む。5は完形の土師器小皿。体部は薄くやや外反気味に立ち上がる。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕を残す。底面内面はヨコナデ。胎土は精良で金雲母を含む。6はほぼ完形の土師器小皿。体部は薄くやや外反気味に立ち上がる。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。底面内面はヨコナデ。胎土は精良で金雲母を含む。7は土師器坏底部で底径1/8程度残存。底部切り離しはヘラ切りか。胎土は精良で金雲母を含む。8は土師器皿で底径1/8程度残存。径が大きく体部の立ち上がりは短い。底部切り離しはヘラ切りか。板状圧痕残る。底部外面に1箇所、底部内面に2箇所穿孔を意図した未貫通のくぼみがある。胎土は精良。9は土師器小皿で口径1/8程度残存。体部の立ち上がりは直線的で底部切り離しはヘラ切りである。底部内面はヨコナデ。胎土は精良。10は土師器小皿で底径1/3程度残存。体部は薄く外反気味に立ち上がる。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。胎土は精良で金雲母を含む。11は土師器小皿で口径1/4程度残存。体部は内湾気味に立ちあがる。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。底部内面はヨコナデ。胎土は精良である。12は土師器丸底坏で底径1/3程度残存。体部と底部の境に稜を持ち体部は内湾気味に立ち上がる。底部切り離しはヘラ切りで底部内面を押し出して丸底にする。胎土は精良で金雲母を含む。13は土師器丸底坏で口径1/4程度残存。体部と底部の境は稜が立ち、体部は内湾気味に立ち上がる。底部切り離しはヘラ切りで、底部内面を押し出して丸底とするが、押し出しは弱く平底に近い。胎土は精良で金雲母を含む。14は土師器丸底坏で底径1/4程度残存。底部と体部の境に稜を持ち口縁部はやや外反気味

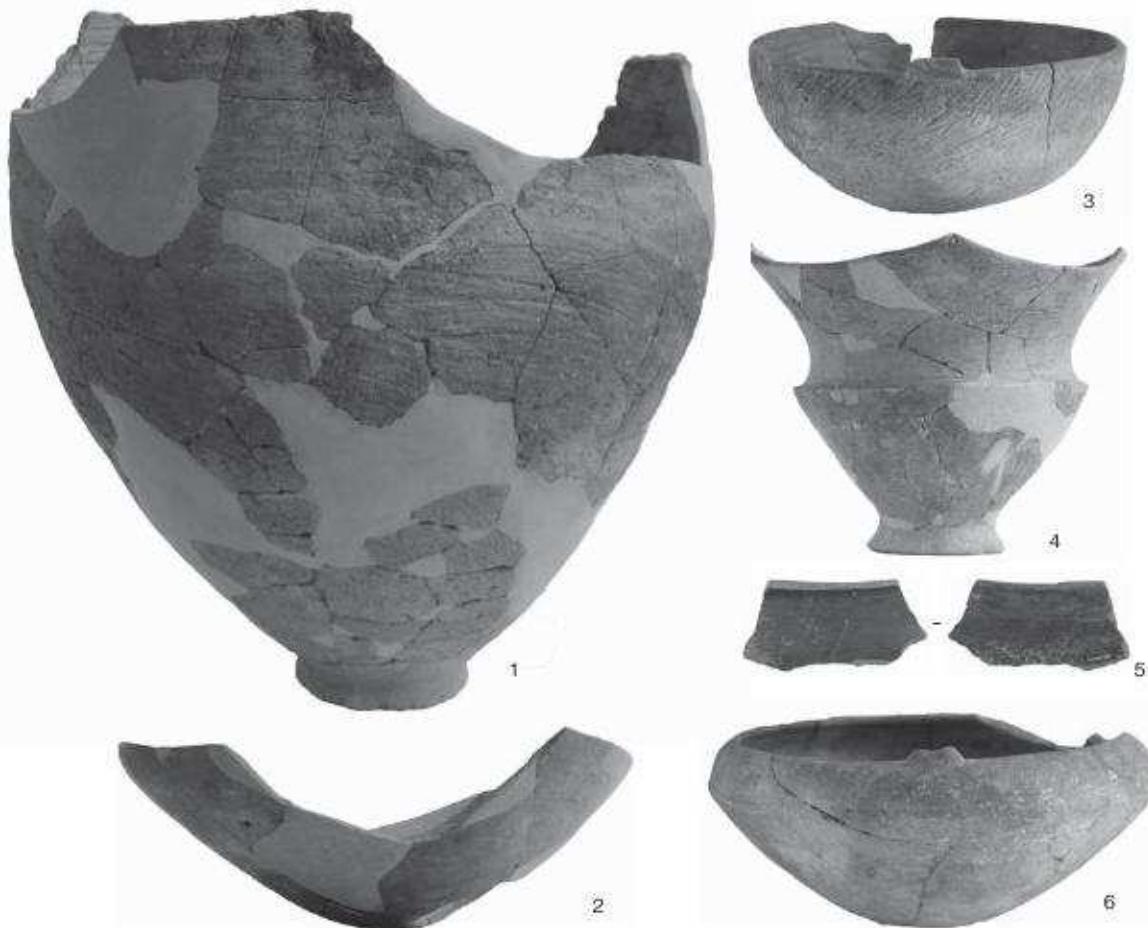


第 60 図 B 区 SX2 遺構実測図 ( $S=1/20$ )

に立ち上がる。底部は欠損が著しいが切り離しはヘラ切りである。ヘラ切りの底部と体部の境の稜が底面よりやや上位に位置することから、底部内面を押し出して丸底をなすと考えられる。胎土は精良で金雲母を含む。**15**は土師器壺で底径1/6程度残存。底部切り離しはヘラ切りで平底か。底部内面は指頭圧痕が残る。**16**は土師器丸底壺底部で底径1/4程度残存。底部切り離しはヘラ切り。胎土は精良で金雲母を多く含む。**17**は土師器壺底部で底径1/2程度残存。底部切り離しはヘラ切りで平底をなし板状圧痕が残る。底部内面には強いヨコナデを加える。胎土は精良で金雲母を含む。**18**は土師器丸底壺底部で底径1/2程度残存。体部と底部の境にユビオサエを加えて丸みをおびるが、わずかに稜線を残す。底部切り離しはヘラ切りで内面にはコテ当ての痕跡が残る。胎土は精良で金雲母・橙色粒子を多く含む。**19**は土師器壺で口径1/4程度残存。底部切り離しはヘラ切りで底部内面には強いヨコナデを加える。体部外面には煤が付着する。胎土は精良で細かい金雲母や橙色粒子を含む。**20**は土師器壺で口径1/6程度残存。底部は平底で切り離しはヘラ切り。胎土は精良で金雲母を含む。**第59図21**は土師器壺底部で底径1/8程度残存。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕がわずかに残る。底部内面はヨコナデを加える。胎土は精良で金雲母を含む。**22**は土師器壺底部で底径1/2程度残存。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。底部内面には強いヨコナデを加える。胎土は精良で橙色粒子を多く含む。**23**は須恵器椀底部。屈曲して立ち上がる体部との境近くに高台が付く。**24**は黒色土器B類椀底部。内外面に炭素を吸着し黒色を呈す。焼成は甘くやや軟質。器表面が荒れていてヘラミガキ等の調整は確認できない。**25・26**は黒色土器B類の椀底部。**25**は底径1/2程度残存。内外面とも炭素を吸着してヘラミガキを加え光沢を帯びる。底部切り離しはヘラ切りで丸底をなし、外反気味の高台が付く。**26**は高台径1/4程度残存。底部内面に炭素が付着しヘラミガキを行う。**27~30**は白磁である。**27**は太く高く高台を削りだし、外面は無釉である。内面は底部と体部の境に段を形成する。大宰府分類の白磁



第 61 図 B 区 SX2 出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )



図版 19 B 区 SX2 出土遺物

第 28 表 B 区 SX2 出土遺物観察表

番号	出土箇所/グリッド	層位	基盤	断片	外観	内観	断面	内観	状態	地主	場所
1	田代34B0	032-1b1	高台上部・壁	口縁へ焼附	南 (T. 032A/23)	施 灰 (032A/23)	十字、表面	内丸、ハサミ跡等、平 テラ、朱痕	研削、粗品内装	厚底あり	
2	田代34B0	032-1c2	高台上部・窓枠	口縁へ焼附	南側 (032A/23)	施 灰 (032A/23)	へりこみの、コア スラッシュ	内丸、	研削、	厚底、内装なし、無釉	
3	田代34B0	032-1d1	側立ち部・窓枠	口縁へ焼附	北 (T. 032A/23)	施 灰 (032A/23)	内丸、ハサミ跡等、平 テラ、朱痕	内丸、ハサミ跡等、平 テラ、朱痕	研削、	厚底、内装なし、無釉	内装無し、 内装有り
4	田代34B0	032-1d2	側立ち部・窓枠	口縁へ焼附	北側 (032A/23)	施 灰 (032A/23)	内丸、	内丸、	研削、	厚底、内装なし、無釉	
5	田代34B0	032-1e1	側立ち部・窓枠	口縁	北側 (032A/23)	施 灰 (032A/23)	へりこみの	へりこみの	研削、	厚底、内装なし、無釉	
6	田代34B0	032-1f1	側立ち部・窓枠	口縁	北側 (032A/23)	施 灰 (032A/23)	—	—	研削、	厚底、内装なし、無釉	

碗IV-2b類か。28は高台の削りだしが浅く底部が分厚い。外面は体部下半を露胎とし、内面は底部と体部の境に段をもつ。大宰府分類白磁碗IV-1b類。29は口縁部で端部は玉縁となる。大宰府分類白磁碗IV-1類。30は直口縁の椀で、口縁端部は丸くおさめやや外反する。外面は高台近くまで釉がかかり、露胎部分は黒色を呈す。

31～36は石器・石製品。31は扁平打製石斧片。基部から刃部にかけて撥形に開く胴部付近と思われる。32は砥石。横断面矩形で4面それぞれに砥面を形成する。長軸方向に線条痕がわずかに観察される。33～36は滑石製石鍋片。33はミニチュアの胴部片で非常に薄く仕上げる。外面には横方向の研磨痕が残るが、内面は平滑に仕上げる。34は底部から胴部にかけての破片で、石鍋本来の面も一部に残すものの、破断面を中心に二次加工と思われる平坦なカット痕が残り変形が進んでいる。35も底部から胴部で石鍋本来の形状を留める。外面はノミ状工具による丁寧なケズリ痕が残り、部分的に煤が付着する。内面は底部から胴部の立ち上がり付近を中心に、底部整形時のノミ状工具の当たり痕が残る。36は胴部片で石鍋本来の面を残す。外面はノミ状工具による縦方向のケズリ痕が規則的に並び、全体に煤が付着する。内面は平滑に仕上げる。



SX3 検出状況①(南から)  
SP178 の南脇(手前側)に胴部片が見える。



SX3 検出状況②(南から)  
深鉢底部周辺がほぼ直立状態で出土。

図版 20 B 区 SX3 検出写真

第29表 B 区 SX3 出土遺物観察表

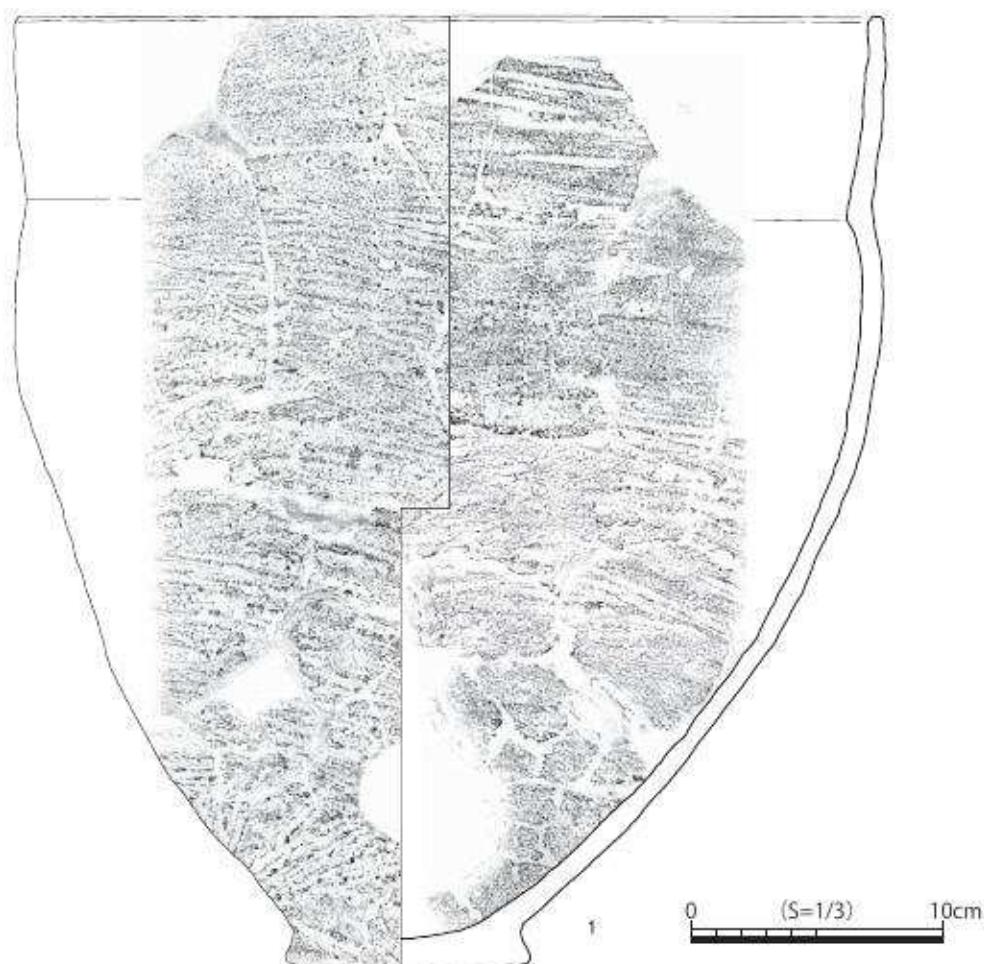
遺物	出土層グリッド	層位	層様	層厚	外観	内面	特徴	内面	層位	層厚	性状	備考
1	F149482	253	西東に沿って深井	口縁～底面	に長い縦・横縦・横横	に長い縦・横縦・横横	ナデ	ナデ	北東、ナデ	北東	浅鉢、石器、結晶片岩、胎土	

#### ・ SX2(第25図・第60図)

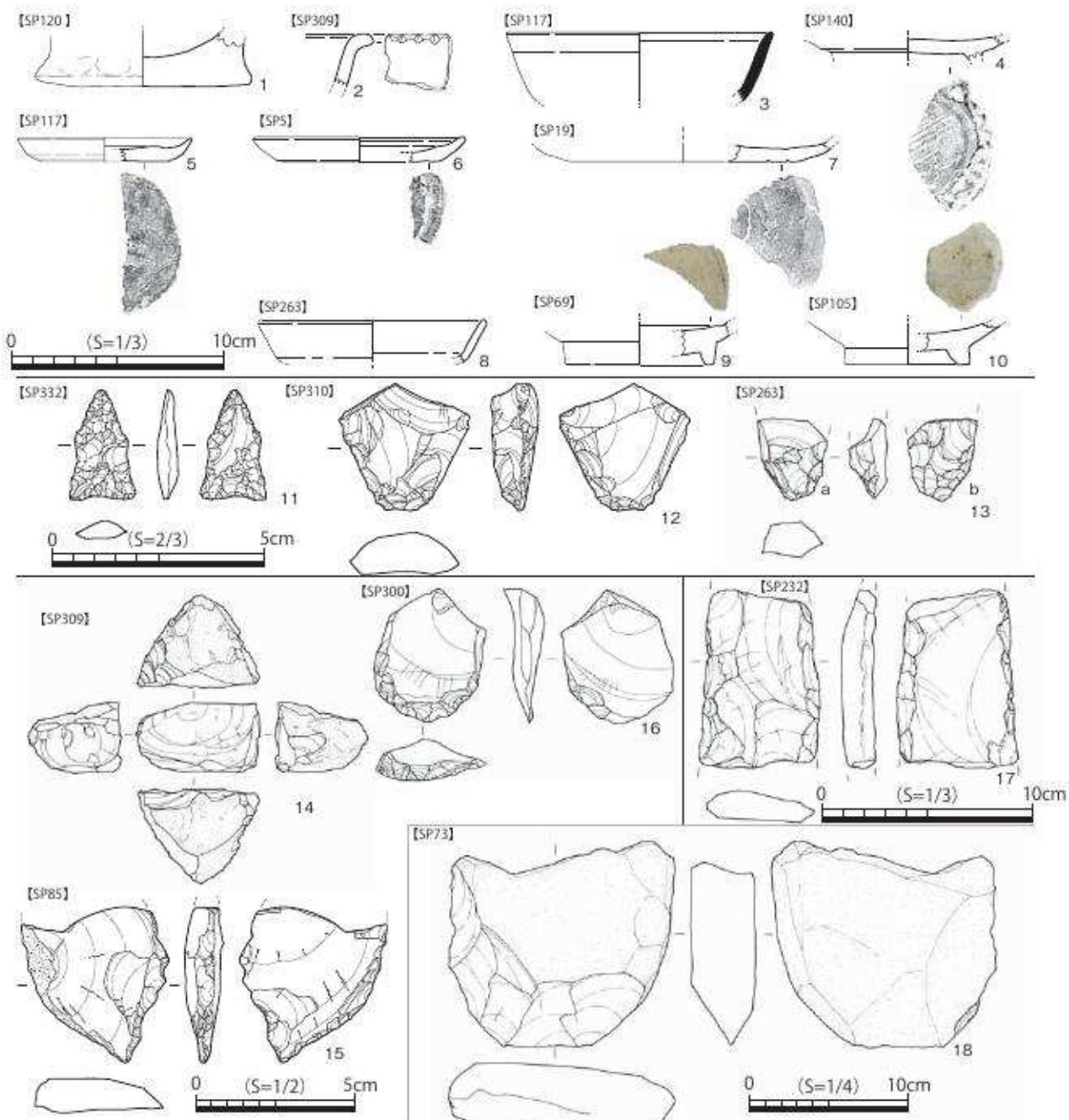
B区9480グリッドで検出した不明遺構。径0.4~0.45mの範囲で縄文晩期土器深鉢が直立した状態で検出した。土坑の掘方は不明瞭であった。深鉢の底部は内面からの打ち欠きにより穿孔されていた。深鉢内からは浅鉢片が2点出土したのみで、人骨等は出土していない。

この遺構から南西に0.45m離れて、長軸長0.45mの梢円形土坑内からほぼ完形の縄文晩期土器浅鉢や深鉢ミニチュア土器が出土し、SX2-SU1とした。これらの状況から、SX2は埋設土器(埋甕)でSX2-SU1はSX2の供献土器と推測される。

第61図1はSX2出土の縄文晩期土器深鉢である。口縁部～胴部を一部欠損するものの全形が復元できる。砲弾形で口縁部はやや内湾し、外面には条痕、内面には上半部を中心にヘラミガキを加える。口唇部は平坦で口縁部には補修孔が2箇所確認できる。底部は径がやや小ぶりで外側に小さく張り出し、上げ底気味となる。底部内面から打ち欠いて穿孔する。胎土には結晶片岩の小片を多く含み、独特の光沢を帯びる。2は浅鉢。整理作業の段階でSX2出土の口縁部片が近隣の3層包含層出土の大型破片と接合したため、本来はSX2に伴っていた遺物として報告する。丸底の底部からラッパ状に口縁部が外反し波状口縁となる。底部は内面からの打ち欠きによる穿孔が認められる。内面は擦過状の強いナデの後にヘラミガキ、外面は条痕後に荒いヘラミガキを施す。5はSX2出土の胴張浅鉢の胴部～頸部片。胴部最大径はやや下位になる。内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。3・4・6はSX2-SU1から出土した縄文土器である。3はほぼ完形の浅鉢で丸底のボウル状となる。口縁部に矩形の突起を1箇所貼り付ける。内外面とも条痕調整を残す。内面には上半部を中心にヘラミガキを加え、赤色顔料を塗布した痕跡がわずかに残る。4は深鉢形のミニチュア土器と思われる。2・3の東側に隣接して横転した状態で出土した。口縁部及び胴部の一部を欠くものの、ほぼ完形に復元できる。胴部から鋭く屈曲して頸部が内屈し口縁部が大きく外反する。口縁部は波状口縁で波頂部にはヘラ状工具による凹点を認める。内外面とも条痕後に丁寧なナデ調整を加えるが、一部に横位の条痕がわずかに残る。器壁は非常に薄く、胎土は雲母を多く含み独特の光沢を帯びる。6はほぼ完形の浅鉢。3とともに横転した状態で折り重なるように出土した。丸底の底部から胴部が外反し、浅い段を境に口縁部が大きく内湾す



第 62 図 B 区 SX3 出土遺物実測図 (S=1/3)

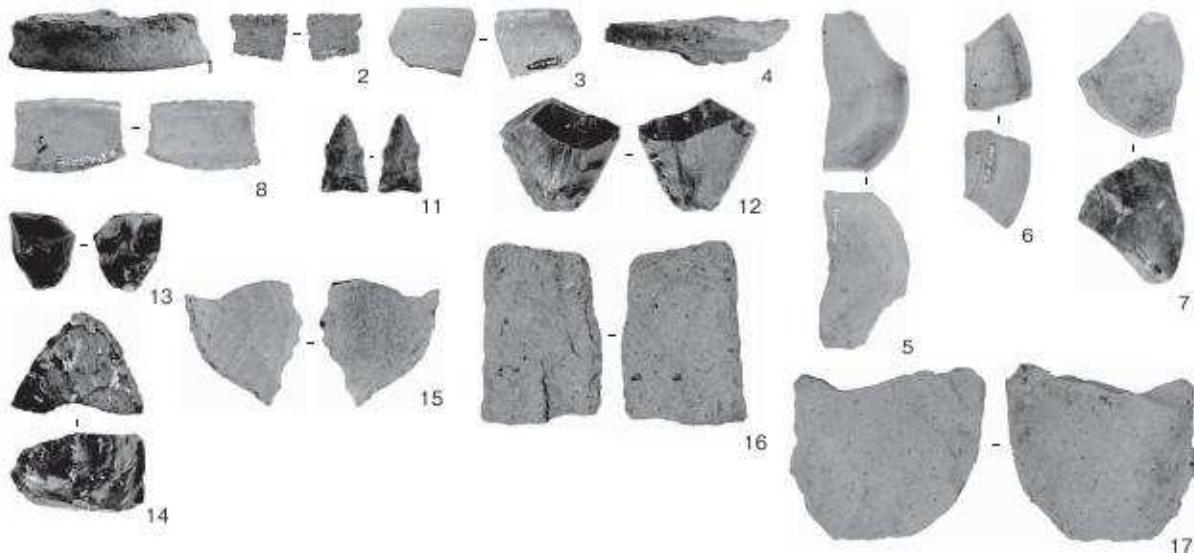


第63図 B区SP出土遺物実測図 (S=2/3, 1/2, 1/3, 1/4)

る。口縁端部にはM字形の突起が1箇所付く。内外面ともヘラミガキによる丁寧な調整を加える。

#### ・SX3(第25図・図版20)

B区9682グリットで検出した不明遺構。SB1を構成するSP178の掘方南壁に接して、縄文晩期土器深鉢の胴部片が横倒しの状態で多数出土した。当初は4層の縄文晩期包含層出土土器として一括して取り上げたが、胴部片の取り上げ後の掘削で底部周辺を直立した状態で検出した。この時点で周辺を精査したもの、土器の埋設に伴う土坑の掘方は検出できなかった。第62図1はSX3出土の縄文晩期土器深鉢である。口縁部の一部を欠くものの完形に復元できる。外に張り出した底部から内湾気味に胴部が立ち上がり、緩やかにくびれて口縁部が直立気味に立ち上がる。内外面とも横から斜め方向の条痕調整を残す。底部から胴部下半での穿孔は認められない。胎土には結晶片岩の碎片を含む。



図版 21 B 区 SP 出土遺物

第 30 表 B 区 SP 出土遺物観察表

遺物番号	出土品タリット番号	層位	質地	形状	外観		内面		底面		層位	胎土	備考
					外周	内周	外周	内周	外周	内周			
1	BLX9482	SP130	綈毛・角閃石	深鉢	16.0	13.0	16.0	13.0	アラ・ナカオサニ	ナカ	130	白磁・金雲母・角閃石	
2	BLX9481	SP392	陶土・漆	口縁	15.0	13.0	15.0	13.0	セア・ヘラギサニ	ナガ	130	青磁石・漆	
<b>番号 遺物名 称 調査地区 通稱・層位 口径(cm) 底径(cm) 厚さ(cm) 生産地 備考</b>													
3	須恵器・杯	BLX9482	SP117	-	12.4	-	13.3	-	-	-	-	-	ヘラ切り
4	土師器・片	BLX9482	SP140	-	-	7.2	11.1	-	-	-	-	-	板状圧痕あり
5	土師器・小皿	BLX9482	SP117	-	8.2	6.0	1.1	-	-	-	-	-	ヘラ切り
6	土師器・小皿	BLX9482	SP5	-	10.6	7.9	1.2	-	-	-	-	-	ヘラ切り
7	土師器・片	BLX9482	SP19	-	-	10.6	10.9	-	-	-	-	-	ヘラ切り
8	青磁碗青磁皿 直	BLX9482	SP263	-	10.5	-	12.0	-	-	-	-	-	
9	白磁・碗	BLX9482	SP69	-	-	6.5	12.0	-	-	-	-	-	
10	白磁・碗	BLX9482	SP105	-	-	4.8	12.0	-	-	-	-	-	
回復 番号	種類	出土区グリッド	層位	石材	最大長(cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (kg)	備考				
11	石器	BLX9482	SP332	黒曜石	26.0	15.5	5.0	1.60					
12	スクレイパー	BLX9480	SP310	黒曜石	29.6	31.0	11.0	8.32					
13	肉垂加工石器	BLX9284	SP263	黒曜石	19.0	16.5	9.0	3.05					
14	石核	BLX9482	SP309	黒曜石	21.5	38.0	29.0	22.61					
15	スクレイパー	BLX9482	SP85	安山岩	39.0	16.0	12.5	26.72					
16	スクレイパー	BLX9482	SP300	黒曜石	4.3	3.6	1.4	14.42					
17	扁平打削石斧	BLX9482	SP232	安山岩	83.5	56.5	16.0	196.44					
18	礫器	BLX9482	SP73	鶴灰岩	129.0	141.5	42.0	1060.00					

#### ⑧その他ピット出土遺物(第63図)

1は縄文晩期土器深鉢底部。平底で端部が張り出す。胎土に金雲母・角閃石を含む。2は刻目突帯文土器深鉢口縁部。口縁端部の斜め上方に粘土紐を継ぎ足し、端部にヘラ状工具で刻みを入れる。3は須恵器環口縁部。体部は直線的に屈曲する腰がわずかに残る。口縁端部は細く尖り気味となる。4は土師器環底部で高台径1/6程度残存。高台貼付けの跡が残る。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。胎土は精良で金雲母・角閃石を含む。5は土師器小皿で底部径1/2程度残存。底部は厚みがあり体部は薄く短く内湾気味に立ち上がる。底部切り離しはヘラ切りで底部内面はヨコナデする。胎土は精良で金雲母を含む。6は土師器小皿で口径1/8程度残存。底部切り離しはヘラ切り。胎土は精良で金雲母を含む。7は土師器環底部で底径1/6程度残存。底部切り離しはヘラ切り。胎土は精良で金雲母を多く含む。8は青磁皿。口径1/12程度残存。胴部で屈曲して立ち上がり、口縁端部は丸みをおびる。大宰府分類の龍泉窯系青磁皿I類であろう。9は白磁碗底部で底径1/8程度残存。高台は外面を直に内面を斜めに削りだし、底部は分厚い。外面の高台周辺は露胎とする。内面の底部と胴部の境に段を持つ。10は白磁碗底部で底径1/6程度残存。高台の外面は直に内面は斜めに削りだす。外面は高台外側の中位まで釉が掛かる。内外面とも釉には貫入が入る。9・10ともに大宰府分類の白磁碗II類であろう。

11は石鎌。暗灰色のチャート製で側縁に肩を持ち平面五角形を呈する。12はスクレイバー。厚手の黒曜石を素材とし、両側縁に二次加工を加えて直線的な刃部を形成する。下端部は階段状剥離が顕著である。13は両面加工石器。厚手の黒曜石を素材とし、b面は平坦な調整剥離を、a面は急角度の調整剥離を加えて整形する。上半部は欠損。14は石核。白色粒子を多く含む扁平な黒曜石の角礫を素材とし、小口2箇所を作業面とする。打面は礫面をそのまま用いる。15は二次加工ある剥片。安山岩製の厚手の剥片を素材とし、剥片下端部の主要剥離面側に連続して調整剥離を加える。16はスクレイバー。黒曜石製の厚手の剥片を素材とし、剥片下端部の作業面側を中心に急角度の調整剥離を連続して加える。刃部は丸みをおびる。17は扁平打製石斧で刃部と基部を欠損する。両側縁から調整剥離を加えて直線状に整形する。18は礫器か。大振りで扁平な安山岩の片面に荒い調整剥離を加えて円刃を作りだす。

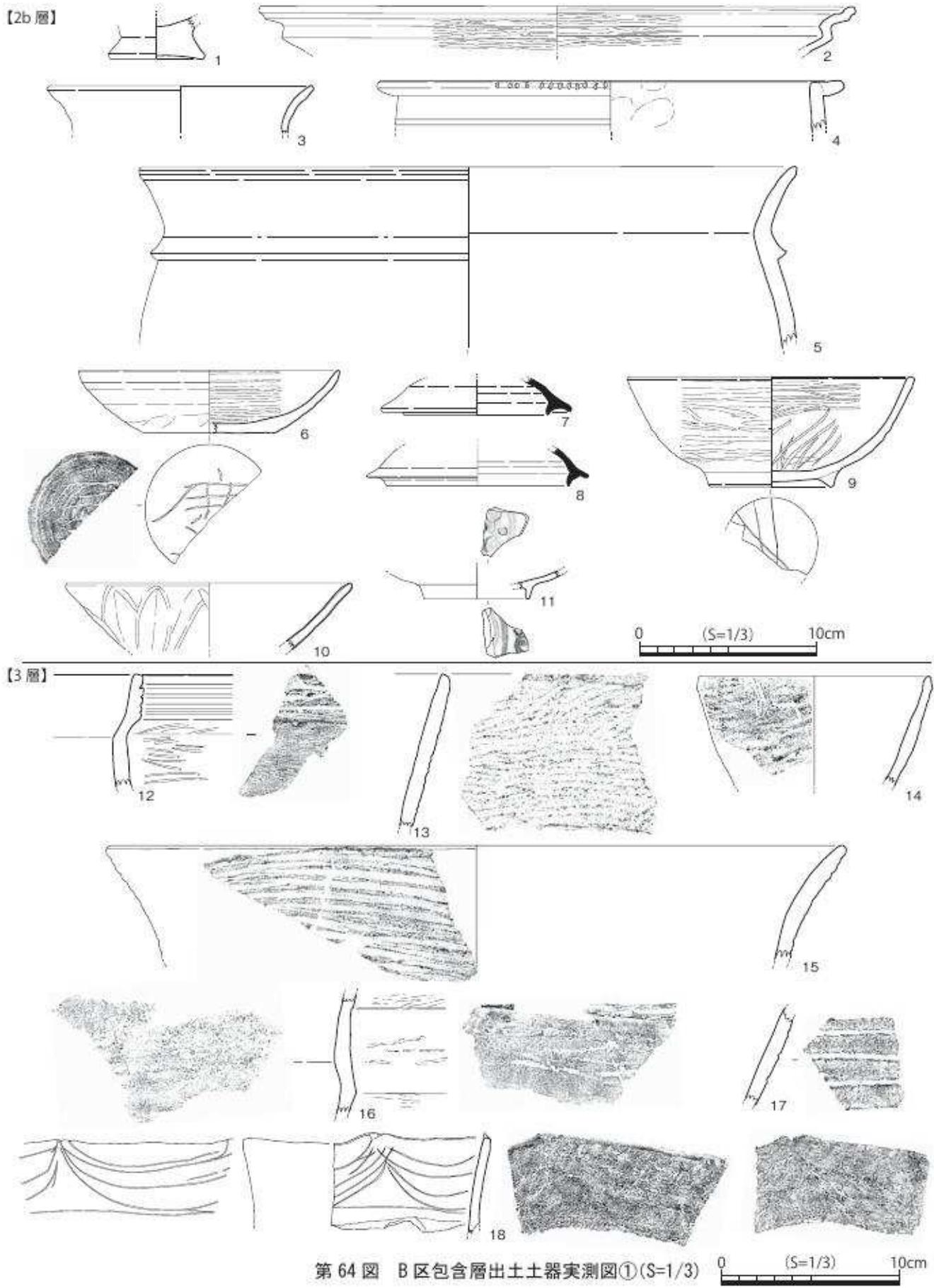
#### ⑧包含層出土遺物(第64図～第69図)

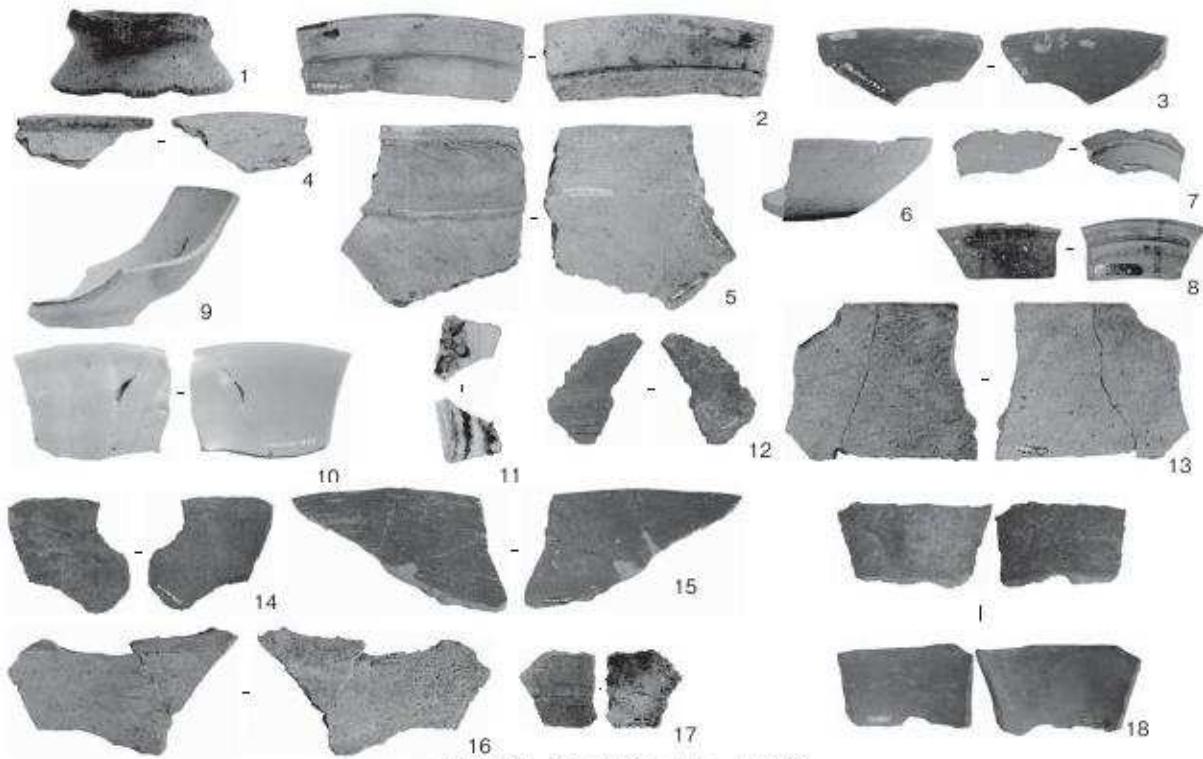
##### ・2b層出土土器(第64図1～11)

1は縄文晩期土器深鉢底部。底部外縁が外に張り出し外底面は上底となる。底径が小さくミニチュア土器の可能性がある。2は浅鉢口縁部。頸部が内屈しさらに屈曲して口縁部が外反する。頸部と口縁部の境は内面に段、外面に太い沈線が巡る。3は長頸浅鉢口縁部で大きく外反する。4は弥生土器甕口縁部。口縁部上面は平坦で口縁端部に浅いヘラキザミを疎らに加える。口縁部直下には浅い沈線が巡る。5は弥生土器甕口縁部。口縁部は「く」の字に外反し端部がわずかに肥厚する。口縁部直下には三角突帯が巡る。6は土師器坏で底径1/2程度残存。平底の底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁端部は尖り気味となる。内面は同心円状の回転ヘラミガキ、外面は底部外面に回転ヘラケズリ、体部下半には手持ちヘラケズリ。底部外面には「鹿」もしくは「慶」の刻書が残る。胎土には石英・角閃石を含む。7・8は須恵器蓋。いずれも短い返しが付き、内外面とも回転ナデ調整である。胎土に白色粒子を多く含む。7は生焼けで明褐色を呈する。9は瓦器碗で底径1/2程度残存。丸底気味の底部に低い三角高台が付く。内外面ともヘラミガキが残るが、外面はヨコナデの凹凸の凸部にヘラミガキを加える。肥前南部型であろう。底部外面にはヘラ記号が残る。10は龍泉窯系青磁碗で外面に鑄蓮弁文を施す。11は明青花の皿底部。高台畳付のみ露胎とする。見込には界線と花樹、外面には渦状の密な唐草を描く。小野分類の染付皿B1類であろう。

##### ・3層出土土器(第64図12～第66図)

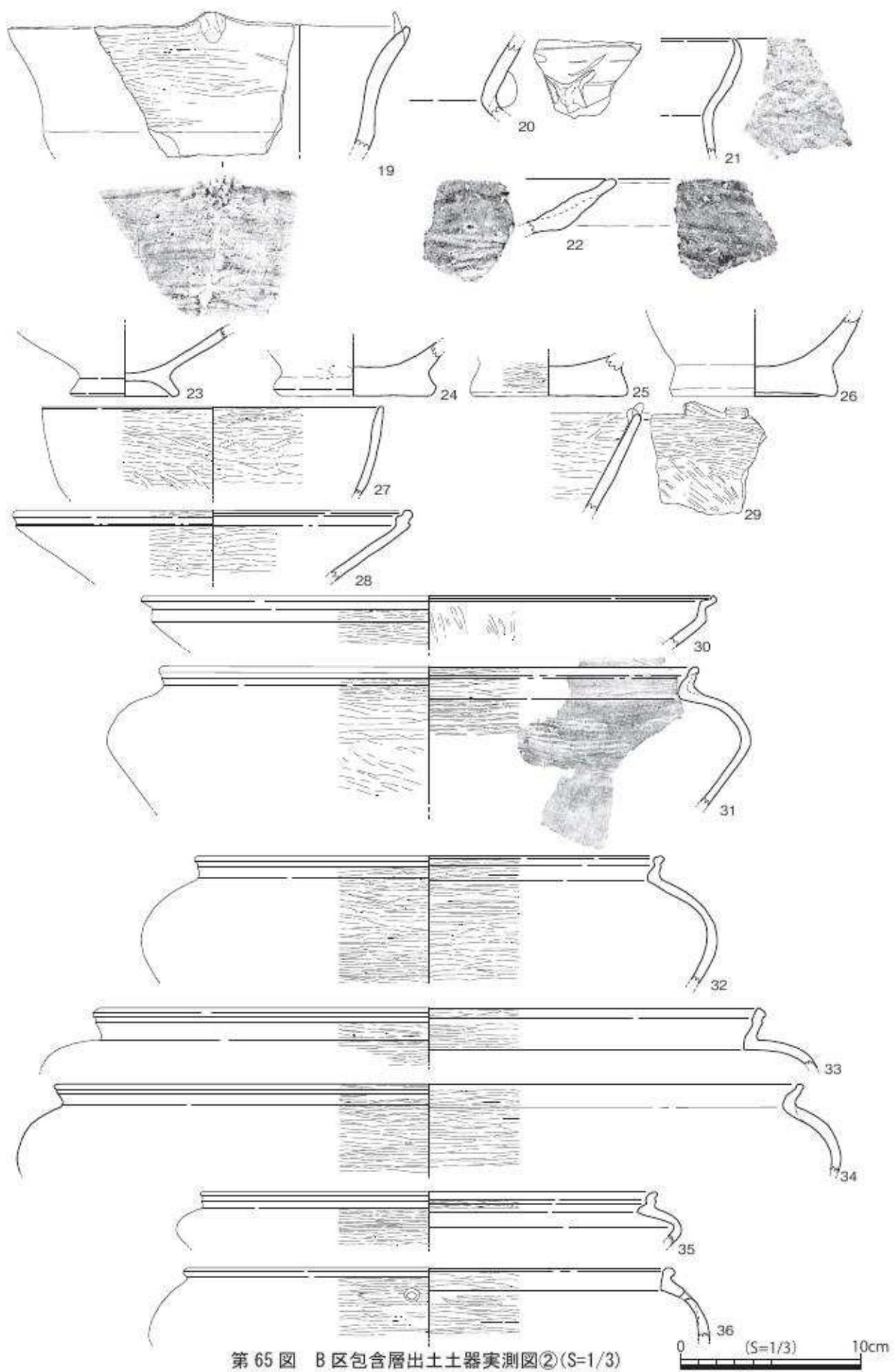
12は縄文時代後期末の深鉢口縁部。口縁部が直立し外面に4条の沈線を施文する。13～15は直口縁の深鉢口縁部。いずれも外面に条痕が残る。14は小型の鉢か。口縁端部は尖り気味となる。15は厚手で口縁部が大きく外反し、外面に太目の条痕が横走する。16～第65図20は胴部が屈曲する深鉢。16は内屈する頸部で口縁部・胴部は条痕が残るのに対し、頸部は条痕をナデ消す。17は口縁部片で外面に横走沈線が残る。18は深鉢口縁部。接合しない同一個体の破片が2つあり、口径1/2程度残る。緩やかな波状口縁をなし、波頂部を軽くユビオサエして若干内屈させる。この波頂部を基点として、外面に放射状の細沈線を左右4条～5条描く。文様の下端部には横線を巡らす。胎土は金雲母を多く含む。第65図19は3層と4層から出土した破片が接合したもの。波頂部の端部をユビオサエして内屈させる。口縁部外面には条痕が残るが沈線は施文されない。20は頸部～胴部の屈曲部で蝶ネクタイ状の突起が付く。頸部には横走する沈線が3条確認できるが、突起周辺はナデ消す。21は口縁部が内湾する深鉢





図版 22 B 区包含層出土土器①

口縁部。内外面ともナデ調整で非常に薄く仕上げる。22は浅い皿形をなすと思われる。やや厚手の口縁部片で内外面ともナデ調整。23~26は深鉢底部。23は底部外面がかなり上底で、「ハ」の字形に開く高台状をなす。底径が小さく器壁も薄いことからミニチュア土器の可能性もある。24・25は平底で底部外縁は外側に張り出す。27は小型の鉢口縁部。内外面ともヘラミガキで丁寧に調整し、器壁も薄く仕上げる。28・30は頸部が短く内屈しさらに口縁部が屈曲して短く外反する浅鉢である。28は浅鉢口縁部～胴部で、接合しない3片の同一個体で口径2/3程度残る。頸部は内面に段として残るのみでほとんど退化している。30は頸部が口縁部と同程度に長い。頸部から口縁部は器壁が薄く、内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げる。29は鉢口縁部で、口唇部にやや内屈する俵形の突起、隣接してヒレ状の突起が付く。31~36は胴張り浅鉢である。31は接合しない2片で口径1/4程度残る。胴部が大きく外に張り出し胴部最大径が上位にある。口縁部外面は沈線、内面は段を有する。内外面ともヘラミガキ調整だが、胴部張出し部内面は条痕が残る。32は胴部最大径がやや下位に下がる。33は頸部と胴部の屈曲部が鋭い稜を形成する。34は口縁部外面の沈線が細く浅く曖昧になり、胴部の張り出しも弱い。35は胴部が強く張出して屈曲し、内面に稜を形成する。36は口縁部内面の段、外面の沈線が消滅し、胴部の張り出しも弱い。胴部に補修孔と見られる穿孔が1箇所確認できる。第66図37・38は長頸浅鉢である。37は内外面ともヘラミガキで調整し薄く仕上げるが、口縁端部はわずかに肥厚する。38は屈曲する胴部から頸部で、屈曲部径1/4程度残存する。頸部外面に煤が付着する。39は底部を欠くものの胴部が全周接合した小型鉢。丸みを持つ胴部から段を境に口縁部が内傾気味に立ち上がる。内外面とも丁寧なヘラミガキである。出土地点はSX2北隣の作業用スロープ部分で、調査の終盤に急いで掘削したため出土状況の観察は不十分で、包含層出土土器として一括で取り上げたが、小型土器で残りが良い点や、胴部から段を境に内屈する器形の特徴がSX2-SU1出土浅鉢(第61図6)と共通することが

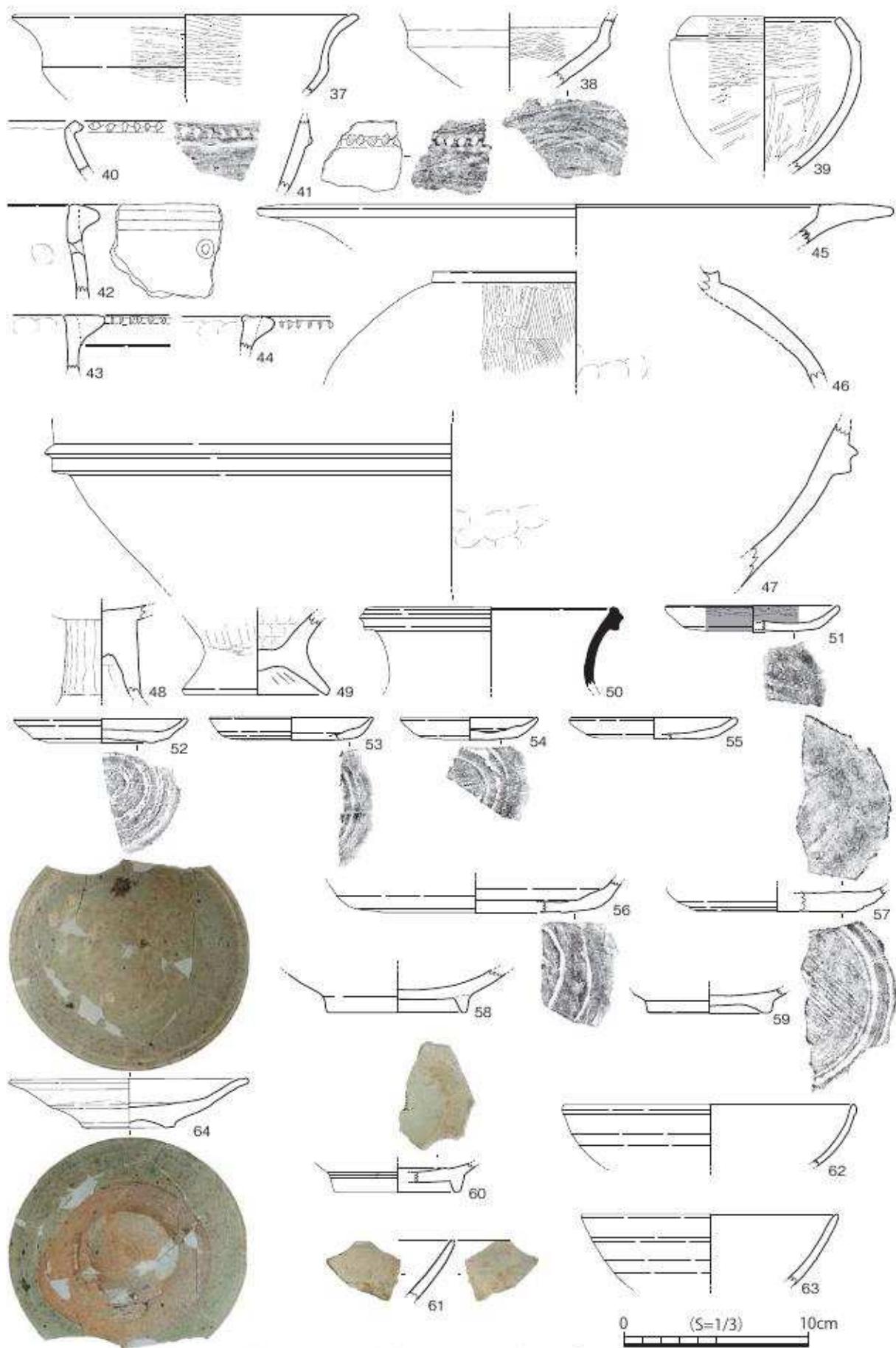


第65図 B区包含層出土土器実測図②(S=1/3)

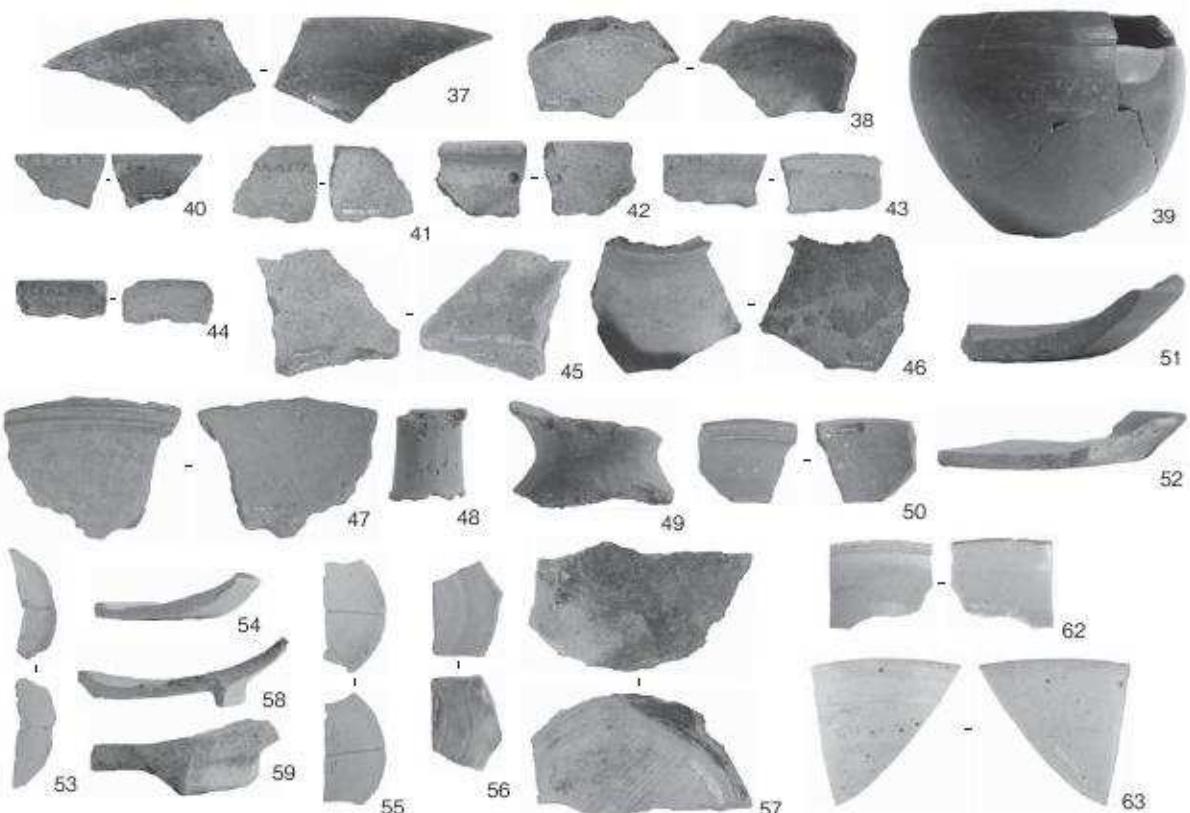


図版 23 B 区包含層出土土器②

ら、本来は SX2 に伴う供獻土器であった可能性もある。40 は刻目突帶文土器深鉢口縁部である。口縁端部を外側に折り曲げて突帶状に整え、ヘラキザミを加える。41 は刻目突帶文土器の胴部片。粘土紐の接合部で段を形成し、ヘラキザミを加える。42~44 は弥生土器甕口縁部。42 は断面三角形の突帶を口唇部に接して貼付ける。胴部に補修孔とみられる穿孔がある。43・44 は口唇部に粘土を貼り付けて上面を水平に仕上げる。口唇部には浅いヘラキザミを加える。43 の口縁部直下にはわずかに段を形成する。45 は弥生土器高坏口縁部。胎土に角閃石・雲母を多く含む。46・47 は弥生土器壺胴部。46 は頸部の付根に三角突帶を巡らし、球形の胴部外面にはハケメが残る。47 は胴部下半部片で最大径付近に M 字突帶を貼付ける。胎土に石英を多く含む。48 は高坏脚部。下端部の破損面付近に棱線がわずかに残り、外に屈曲して裾に至ると推測される。外面は縦方向のヘラミガキが顕著である。49 は台付甕の脚部。低脚で裾部の開きも弱い。底部内面はユビオサエが顕著で脚部内面中央が突出する。50 は須恵器壺口縁部。外反気味に立ち上がる口縁端部が外側に肥厚し、沈線及び段で突帶状の効果を出している。



第 66 図 B 区包含層出土土器実測図③( $S=1/3$ )

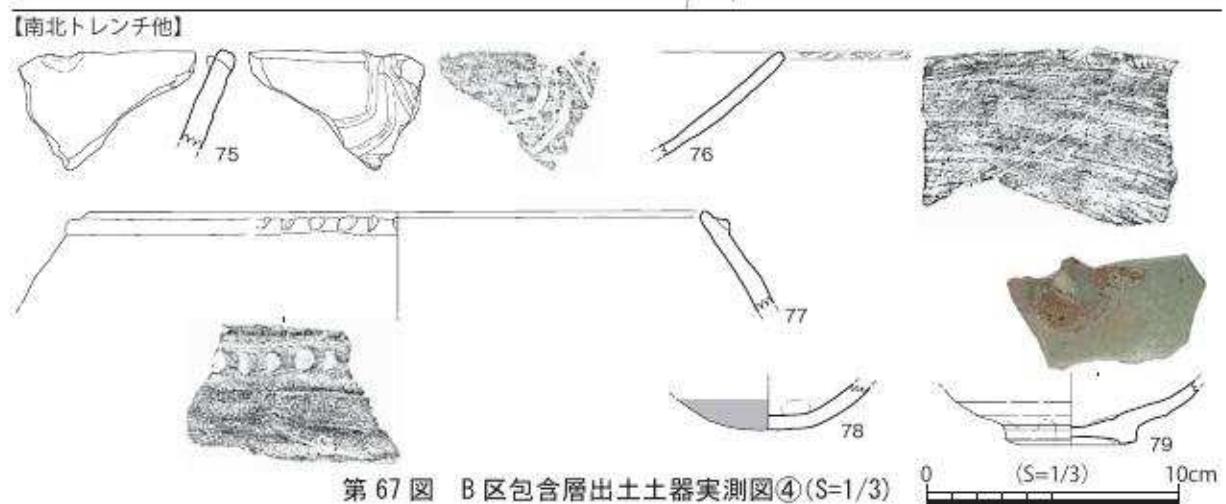
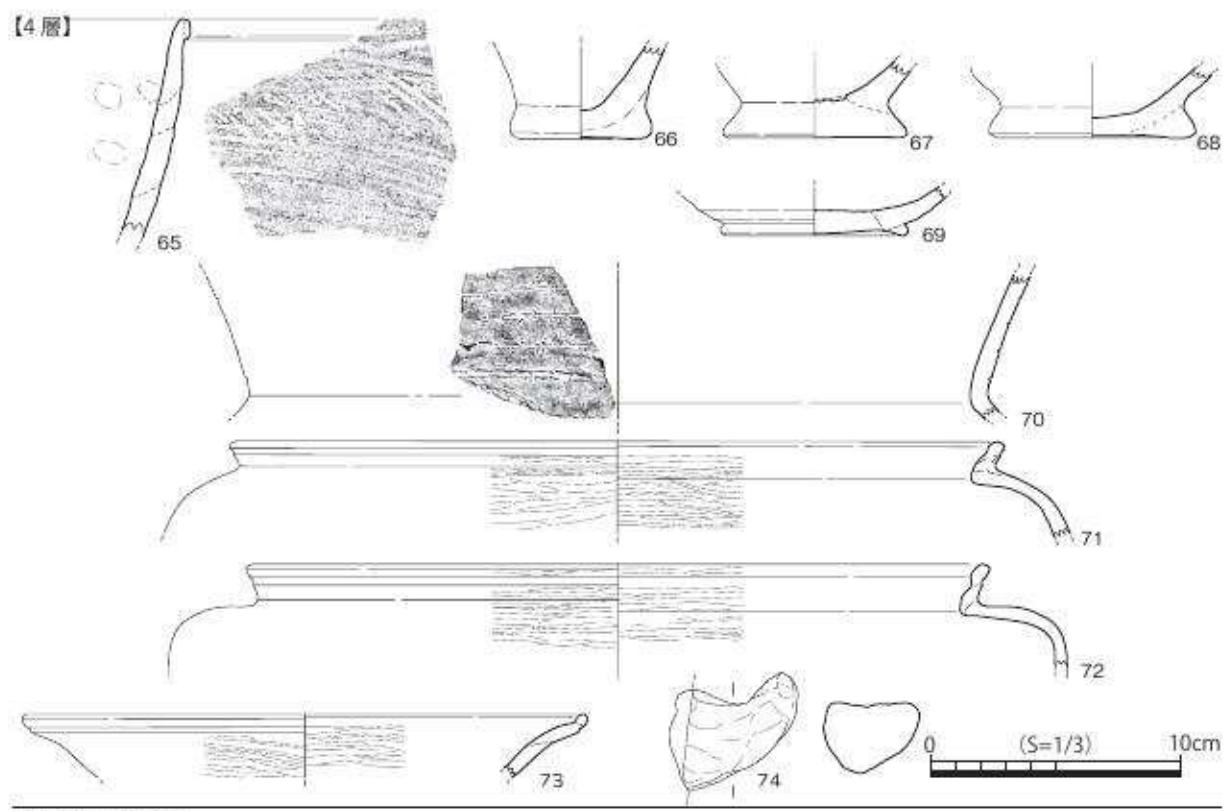


図版 24 B 区包含層出土土器③

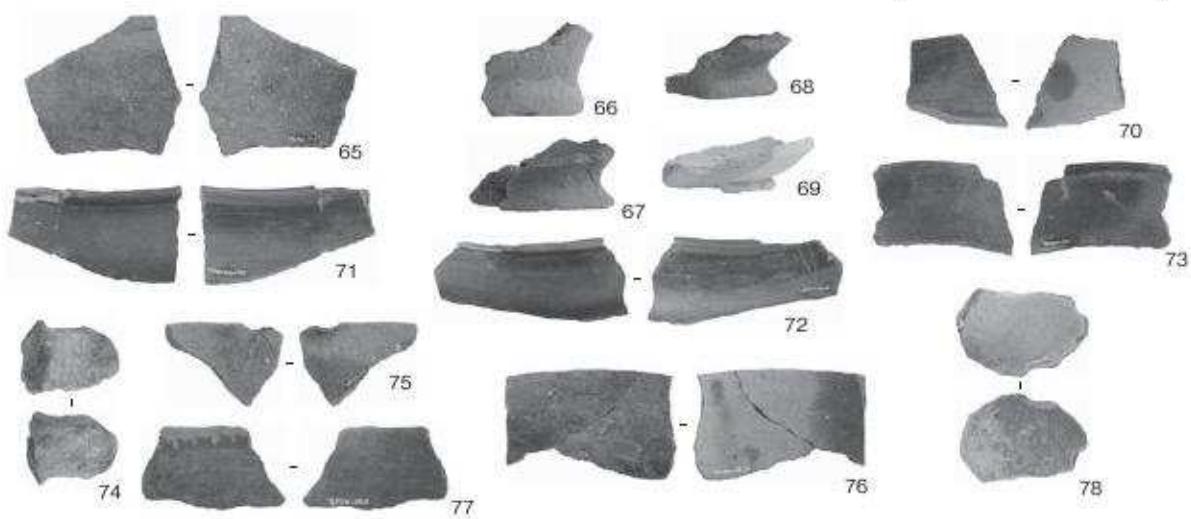
51～55は土師器小皿である。51は黒色土器B類で口径1/8程度残存。底部切り離しは不明。板状圧痕がわずかな凹凸として残る。口縁部内外面を中心にヘラミガキを加える。胎土には細かい金雲母を多く含む。52は口径1/6程度残存。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。底部内面にヨコナデを加える。53は口径1/4程度残存。底部切り離しはヘラ切り。54は口径1/6程度残存。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。55は口径1/4程度残存。磨耗により底部切り離し等は観察できない。56～59は土師器杯底部。56は平底で底径1/6程度残存。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕はない。57は平底で底径1/3程度残存。底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が残る。底部内面には黒色のウルシ状の皮膜が付着する。墨書の可能性もある。58は高台底で高台径1/4程度残存。丸底気味の底部に細身でシャープな高台が付く。底部切り離しはヘラ切りか。59は高台部で高台径1/4程度残存。高台は低く幅広で径も小さい。底部切り離しは不明。60・62・63は白磁。60は底部で底径1/4程度残存。内面の釉を輪状に搔き取る。大宰府分類の白磁碗Ⅶ類。62は丸みをおびた口縁部片で口径1/8程度残存。口縁部外面が玉縁状にわずかに肥厚する。大宰府分類の白磁碗Ⅱ類。63は口縁部片で口径1/10程度残存。胴部は直線的で口縁端部は丸くおさめる。外面にはヘラケズリの稜線が残る。大宰府分類の白磁碗V-1類か。61は漳州窯系染付椀口縁部。染付の発色が悪く文様が不鮮明である。口縁内面は圈線1条、外面には草花を帶状に描く。64は唐津焼皿。口縁部を一部欠くものの、ほぼ完形に復元できる。口縁部が外反し端部内側に溝をもつ溝縁皿で、胴部外面下半から高台を露胎とする。高台は低く畳付から高台内にかけて砂目跡が3ヶ所、見込にも2箇所残る。

#### ・4層出土土器(第67図65～74)

65は縄文晩期土器深鉢口縁部。直口縁で口縁端部を外側に折り返して肥厚させる。胎土に結晶片岩



第67図 B区包含層出土土器実測図④(S=1/3)



図版25 B区包含層出土土器④

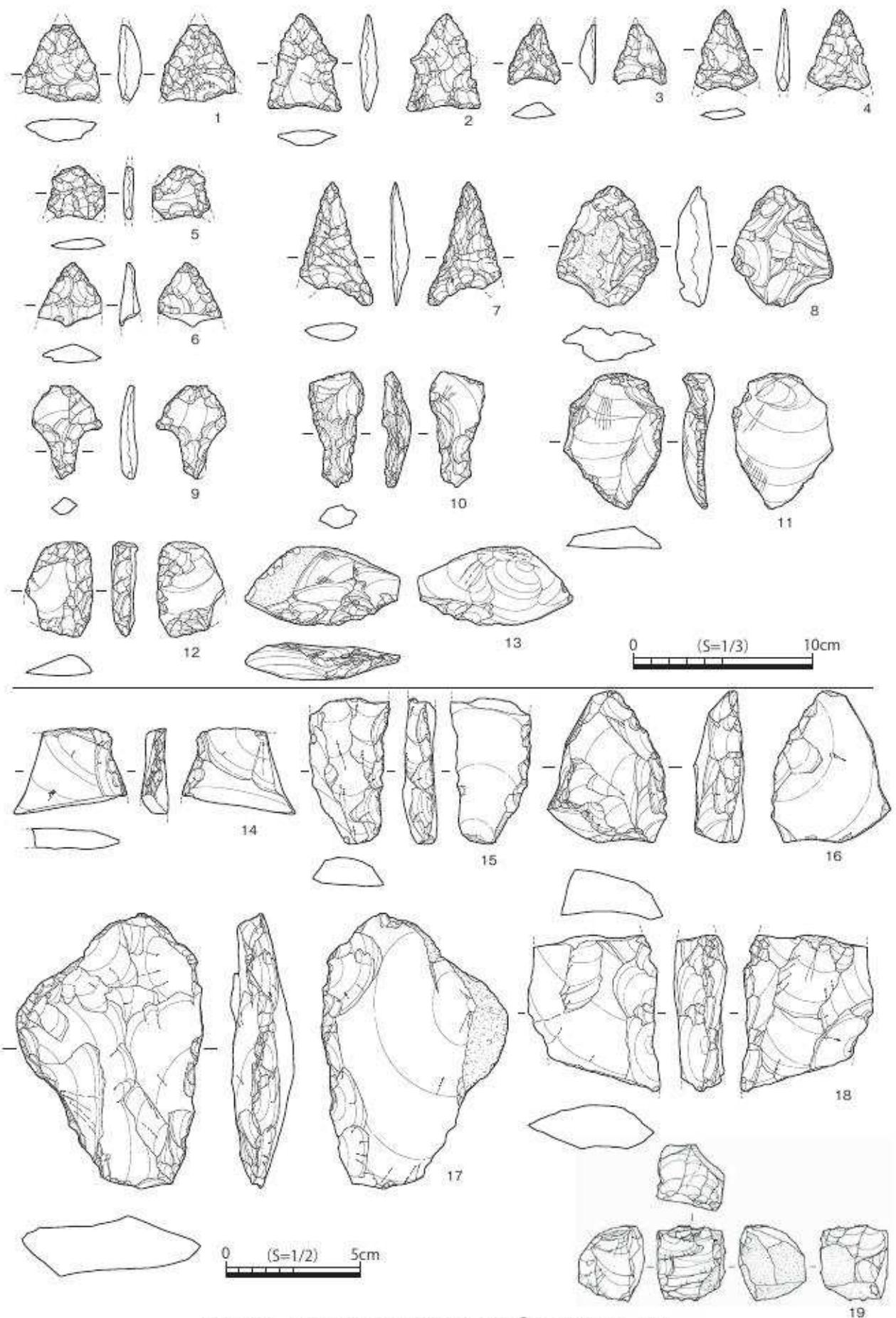
第31表 B区包含層出土遺物觀察表①

番号	遺物名	層位	断縁	形状	構造	性土	備考
1	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
2	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
3	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
4	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
5	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
6	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
7	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
8	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
9	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
10	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
11	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
12	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
13	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
14	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
15	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
16	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
17	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
18	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
19	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
20	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
21	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
22	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
23	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
24	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
25	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
26	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
27	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
28	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
29	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
30	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
31	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
32	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
33	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
34	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
35	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
36	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
37	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
38	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
39	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
40	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
41	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
42	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
43	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
44	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
45	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
46	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
47	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
48	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
49	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
50	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
51	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
52	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
53	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
54	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
55	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
56	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
57	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
58	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
59	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
60	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
61	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
62	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
63	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
64	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
65	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
66	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
67	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
68	縄文土器・深鉢	上層	縫目縁	丸底深鉢	二重縁	砂質	放射状沈線あり
69	土師器	中層	-	-	-	砂質	ハラミガキあり
70	土師器	露	-	-	-	砂質	ハラミガキあり
71	土師器	露	-	-	-	砂質	ハラミガキあり
72	土師器	露	-	-	-	砂質	ハラミガキあり
73	土師器	露	-	-	-	砂質	ハラミガキあり
74	土師器	露	-	-	-	砂質	ハラミガキあり
75	土師器	露	-	-	-	砂質	ハラミガキあり
76	土師器	露	-	-	-	砂質	ハラミガキあり
77	土師器	露	-	-	-	砂質	ハラミガキあり
78	土師器	露	-	-	-	砂質	ハラミガキあり
79	土師器	露	-	-	-	砂質	ハラミガキあり

を多く含む。66～68は縄文晚期土器深鉢底部。いずれも平底で底部外縁が外側に張り出す。69は土師器坏底部。低い高台を「ハ」の字形に貼り付ける。70は縄文晚期土器深鉢口縁部。頸部が内屈して口縁部が外反し、外面に横走沈線を4条施文する。71・72は胴張り浅鉢。口縁部外面に沈線、内面に段を持つ。73は長頸浅鉢口縁部。口縁部はわずかに内屈し、外面に沈線、内面に段を持つ。74は把手。手づくねで断面幅広三角形に整形する。

#### ・南北トレーナーほか出土土器(第67図75～79)

75は縄文晚期土器深鉢口縁部。口縁端部の一部をユビオサエで凹ませて内屈し、これを基点に放射状の沈線を施文する。胎土に結晶片岩を含む。76は浅鉢口縁部。口唇部に二枚貝腹縁による深い刺突が巡る。77は刻目突帶文土器深鉢口縁部。口縁部が内屈し、口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付け、棒状工具で深く刻む。78は弥生土器鉢底部と考えたが、高坏部の可能性もある。外面に赤色顔料を塗布しハラミガキを加える。79は唐津焼皿底部。高台横まで釉が掛かり、置付から高台内にかけて砂目が残る。見込みにも砂目が2箇所確認できる。



第 68 図 B 区包含層出土石器実測図①(S=2/3, 1/2, 1/3)



図版 26 B 区包含層出土石器①

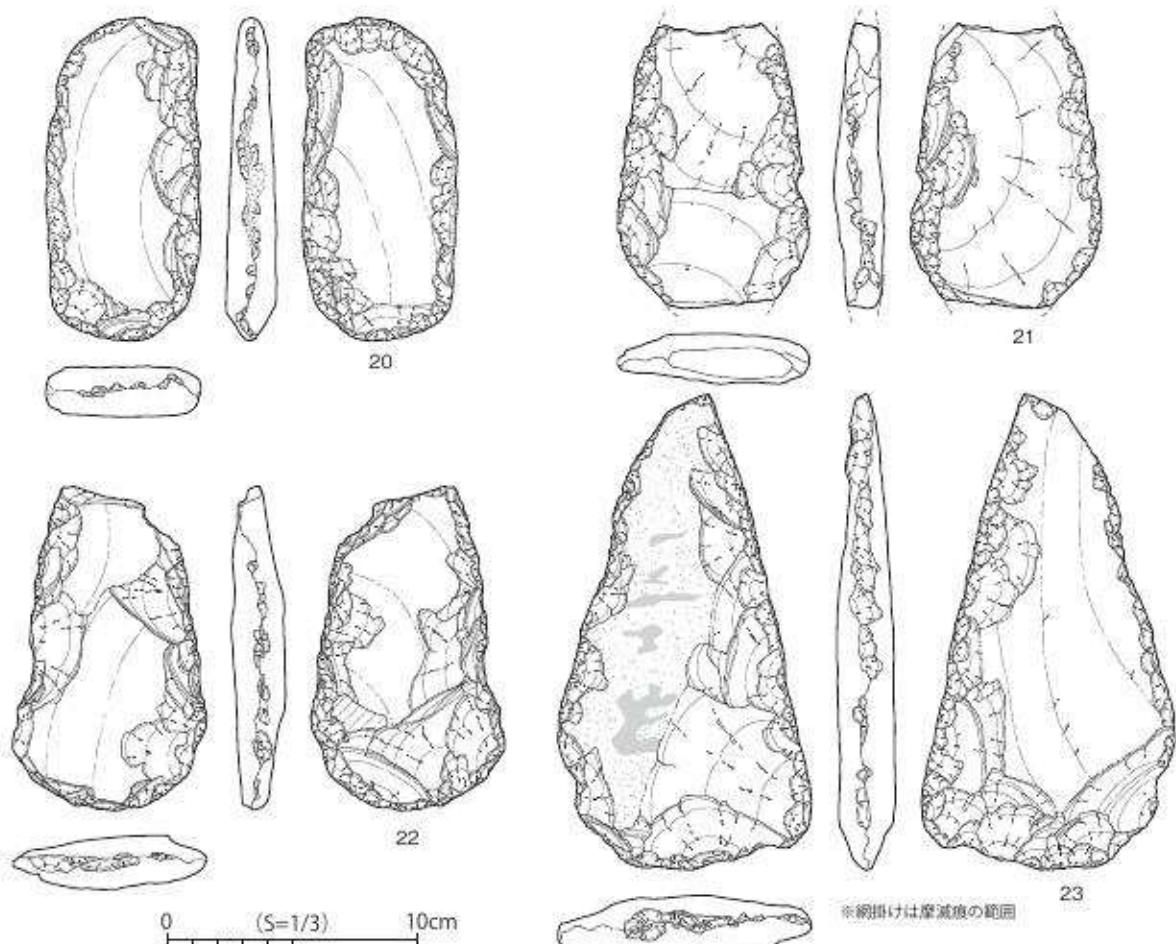
・石器(第68図～第69図)

器種別に報告する。出土地点は観察表を参照されたい(第32表)。第68図1～8は石鎌である。いずれも黒曜石製で基部がわずかに凹む凹基鎌が主体である。2は側縁上位に突起を持つが、肩が張る五角形鎌を指向したものと推測される。7はやや大型で基部の抉りは深い。8は有茎鎌。大振りの剥離を加えて整形するが、体部中央や側縁の一部に自然面を残し、厚みを除去できていない。未成品か。9・10は石錐。9は扁平なつまみが付く。10は横長剥片の打面側にドリルを作り出すが、作業面側には自然面が残り主要剥離面側もバルブの厚みが残る。11は使用痕ある剥片。縦長剥片の側縁に微細剥離が密に並ぶ。12はスクレイパー。縦長剥片の側縁と先端に二次加工を加えて直線的な刃部を作る。13は横長剥片の先端に二次加工を加える。14～18は安山岩製スクレイパーである。素材剥片の形状を残しつつ側縁に刃部を形成する。刃部調整は両面への二次加工と(14・18)、片面への二次加工(15～17)がある。19は黒曜石製石核。角礫素材でサイコロ状を呈し、作業面は3面確認できる。第69図20～23は扁平打製石斧。20は短冊形で側縁の稜線の一部は潰れている。21～23は基部から刃部に向けて徐々に幅広になり、刃部は円刃となる。23は大型で体部の一部に摩滅痕が残る。

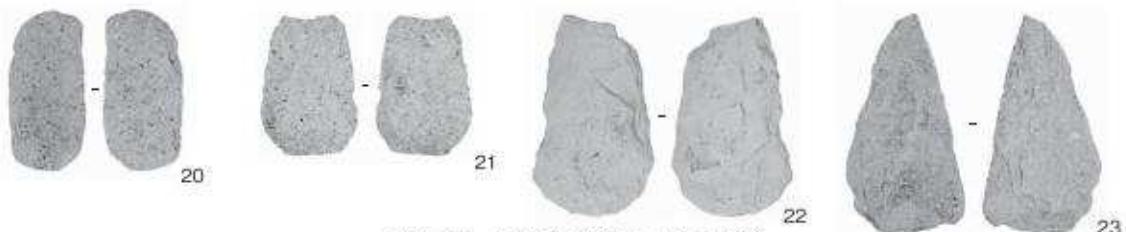
【参考文献】

亀井明徳2014『中国陶瓷史の研究』六一書房

森 達也2015『中国青瓷の研究－編年と流通－』汲古書院



第69図 B区包含層出土石器実測図②(S=1/3)



図版27 B区包含層出土石器②

第32表 B区包含層出土遺物観察表②

番号	種類	出土区グリッド	層位	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
1	石核	B1区9480	2 b層	黒曜石	21.0	21.0	6.0	2.53	
2	石核	B1区9480	3層	黒曜石	27.0	20.5	6.0	1.96	
3	石核	B1区南北トレンチ	3層	黒曜石	16.5	14.5	4.5	0.74	
4	石核	B1区9480	3層	黒曜石	22.3	17.5	4.0	1.03	
5	石核	B1区	表土剥ぎ	黒曜石	16.0	16.0	3.5	0.72	
6	石核	B1区9482	2 b層	黒曜石	17.5	17.8	5.5	0.95	
7	石核	B1区9482	3層	黒曜石	34.0	29.0	5.0	2.03	
8	石核	B1区9482	2 b層	黒曜石	33.0	28.0	10.0	7.01	
9	石核	B1区9480	2 b層	黒曜石	26.0	19.5	5.0	1.41	
10	石核	B1区9482	2 b層	黒曜石	32.0	16.5	8.0	2.69	
11	使用感のある剥片	B1区9482	2 b層	黒曜石	37.5	28.0	9.0	6.99	
12	スクレイバー	B1区9480	2 b層	黒曜石	26.5	19.0	7.5	3.36	
13	二次加工ある剥片	B1区9480	3層	黒曜石	22.0	43.0	10.0	8.74	
14	スクレイバー	B1区9480	3層	安山岩	32.0	42.0	10.0	13.21	
15	スクレイバー	B1区9482	2 b層	安山岩	54.0	39.0	12.5	21.51	
16	スクレイバー	B1区東西トレンチ	下層確認1層	玄武岩	56.0	44.0	12.5	47.86	
17	スクレイバー	B1区9480	3層	安山岩	102.0	69.0	24.0	139.75	
18	スクレイバー	B1区9482	2 b層	安山岩	58.0	49.0	20.0	61.22	
19	石核	B1区9480	3層	黒曜石	27.5	25.0	24.5	18.88	
20	肩平打製石斧	B1区9482	3層	安山岩	128.0	61.5	20.0	230.78	
21	肩平打製石斧	B1区9482	3層	安山岩	113.0	76.9	26.0	207.00	
22	肩平打製石斧	B1区9482	4層	安山岩	128.3	76.5	21.5	235.83	
23	肩平打製石斧	B1区9480	3層	安山岩	188.5	101.0	23.0	232.00	

## 4. 自然科学分析(放射性炭素年代測定)

株式会社古環境研究所

### (1) 自然科学分析の概要

竹松遺跡遺跡から採取された試料について自然科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素年代測定2点である。以下に、各分析項目ごとに試料の詳細、分析方法、分析結果および考察・所見を記載する。

### (2) 竹松遺跡における放射性炭素年代測定

#### ①はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(<sup>14</sup>C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である(中村, 2003)。

#### ②試料と方法

次表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

試料No	試料の詳細	種類	前処理・調整法	測定法
No.1	SC01、カマド内①層	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	ST01、2層	炭化材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

#### ③測定結果

加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)によって得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。右表にこれらの結果を示し、第70図に暦年較正結果(較正曲線)を示す。

##### ・ $\delta$ (デルタ)<sup>13</sup>C 測定値

試料の測定<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

##### ・放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例により Libby の5568年を用いている。統計誤差( $\pm$ )は $1\sigma$ (シグマ)(68.2%確率)である。<sup>14</sup>C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

##### ・暦年代(Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動および<sup>14</sup>Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な<sup>14</sup>C測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal13、較正プログラムはOxCal4.2

である。

暦年代(較正年代)は、<sup>14</sup>C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により  $1\sigma$ (シグマ)(68.2% 確率)と  $2\sigma$ (95.4% 確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の  $1\sigma$ ・ $2\sigma$  値が表記される場合もある。( )内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

#### ・放射性炭素年代測定結果

試料 No.	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	<sup>14</sup> C 年代: 年 BP (暦年較正用)	暦年代(較正年代): cal-	
				$1\sigma$ (68.2% 確率)	$2\sigma$ (95.4% 確率)
No1	30677	$-24.68 \pm 0.26$	$1970 \pm 20$ ( $1968 \pm 22$ )	AD 6–64 (68.2%) BC 37–10 (7.8%) BC 3–AD77(87.6%)	
No2	30678	$-24.17 \pm 0.19$	$620 \pm 20$ ( $619 \pm 18$ )	AD1301–1321(28.2%) AD1349–1368(26.7%) AD1382–1392(13.3%)	AD1295–1330(37.4%) AD1340–1397(58.0%)

BP: Before Physics(Present), cal: calibrated, BC: 紀元前、AD: 西暦

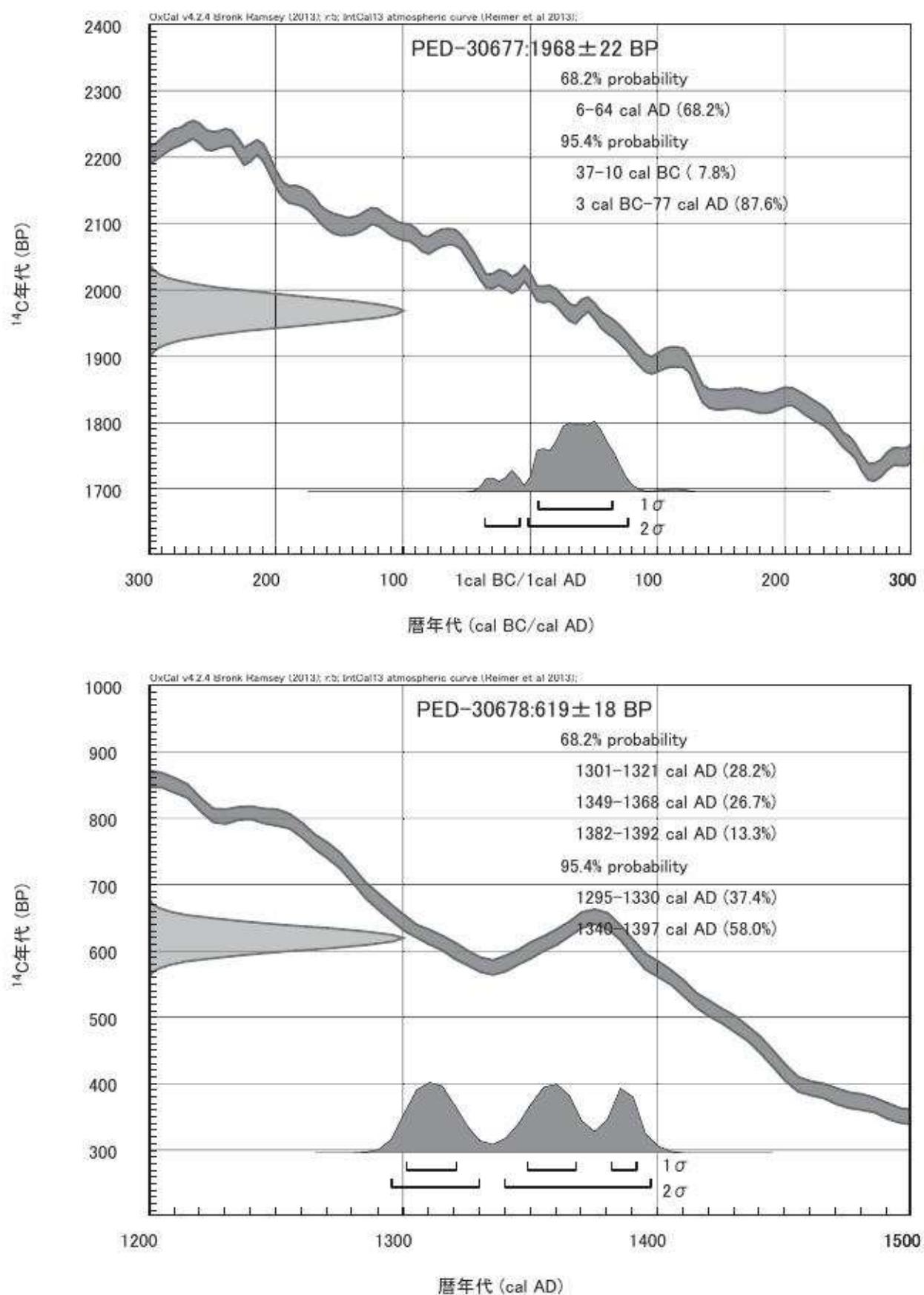
#### ・所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No1の炭化物では  $1970 \pm 20$  年 BP( $2\sigma$  の暦年代で BC37~10、BC3~AD77 年)、No2の炭化材では  $620 \pm 20$  年 BP(AD1295~1330、1340~1397 年)の年代値が得られた。

なお、樹木(炭化材)による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となることがある。

#### 【文献】

- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の<sup>14</sup>C 年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C 年代」。日本第四紀学会、p. 3-20.
- 中村俊夫(2003)放射性炭素年代測定法と暦年代較正。環境考古学マニュアル、同成社、p. 301-322.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Paula J Reimer et al. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.



第 70 図 暦年較正結果

## IV. まとめ

### 1. B 区出土遺物の検討

#### (1) 遺物の出土状況

##### ①出土遺物全体の傾向

第33表～第37表は、B 区の遺構および遺構検出面(4層)、遺構を覆う包含層(3層)から出土した土器、陶磁器、石製品(滑石製石鍋)の破片数を、未報告分も含めてすべてカウントして集計したものである。第33表～第34表は出土遺物全体の一覧表である。最も多いのは縄文土器、弥生土器で、全体の7割近くを占める。特に包含層(3層)や遺構検出面(4層)からの出土が多く、弥生時代の堅穴建物(SC2～SC5)を除くと、遺構内から出土した縄文土器・弥生土器は混入と考えられる。古代～中世の遺物では土師器が最も多く、須恵器、黒色土器を含めた在地土器が全体の3割程度出土している。貿易陶磁は全体的に量が少なく全体の1%に過ぎない。内訳は白磁が最も多く、越州窯系青磁、同安窯系青磁、龍泉窯系青磁がわずかに出土している。このほか、滑石製石鍋が少量出土しているが、鍔付型石鍋は1点も出土していない点は特筆される。明確な口縁部片の出土がないため即断はできないが、縦耳型が主体であった可能性も考えられる。

##### ②貿易陶磁の傾向

第35表に貿易陶磁45点の内訳を示した。越州窯系青磁は、水注と不明胴部片(椀か)が1個体分ずつ出土している。越州窯系青磁は、椀を中心とした編年觀では大宰府編年 A 期(8世紀末～10世紀中頃)～B 期(10世紀後半～11世紀中頃)である。一方、SC1から出土した水注は、肩が張って胴部上半が内屈する点や、胴部に縦線を2条引いてこれを挟むように木瓜文を描く点に特徴があり、中国での生産地及び消費地遺跡での出土傾向は11世紀中頃～12世紀前半頃である(森2015)。また、日本国内では博多遺跡群第6次調査 B 区下層、第80次調査 SK145で同種の水注が出土しており、特に第80次 SK145ではヘラ切り・糸切り混在の土師器坏・丸底坏・白磁椀が共伴することから、12世紀前半とされる(亀井2014)(第71図)。これらの点から、SC1出土越州窯系青磁水注については大宰府編年 C 期(11世紀後半～12世紀前半)に位置づけられる。貿易陶磁の主体をなす白磁は、椀II類・IV類・V-1～3類が遺構、包含層問わず出土した。また、皿II類・IV類が包含層から出土している。同安窯系青磁は皿I類が3層から1点出土した。龍泉窯系青磁は、SP263で皿I類が出土したほか、椀II類2点が3層から出土した。SP263はB 区南端部付近にあり、掘立柱建物群の分布からは外れて位置する。

貿易陶磁の時期別出土傾向は、遺構内出土遺物は大宰府編年 C 期(11世紀後半～12世紀前半)ではほぼ占められ、D 期(12世紀中頃～後半)はわずかに1点のみである。小片のため時期不明とした白磁6点もC 期の可能性が高い。包含層出土遺物は前後する時期をわずかに含むものの、時期が分かる陶磁器の70%以上はC 期に集中する。

##### ③在地土器の傾向

第36表・第37表に在地土器1347点の内訳を示した。土師器・須恵器・黒色土器とも器種別に集計したが、土師器についてはさらに底部形態や底部切り離し(ヘラ切り・糸切り)で細分した。土師器は遺構・包含層出土分に共通して小皿・坏ともヘラ切りが圧倒的に多く、底部切り離しが分かる土師器の96%を占める。表に掲載した坏の不明分には、平底・丸底の別は不明ながらヘラ切りと分かるものも含まれており、ヘラ切りの割合はより高かったと考えられる。糸切りは5点のみで、このうちSBI-SP387出土の土師器坏は豊前型土師器である。







第37表 B区遺物出土状況一覧表5（在地土器②）

	土師器							須恵器				黒色土器			瓦器					
	小皿		環			高 环	蓋 环	甕 环	不明	東播系	A	B	不明							
	ヘラ系	不明	平底	丸底	高台						小皿 挽	小皿 挽								
SX1	13	1	57	14	8	1	68		1	14	3	1	1	2	6					
SU1		6	2				3													
小計	19	1	59	14	8	1	71		1	14	4		1	2	6					
SX2							1													
SK1																				
SK2		2	3																	
SK3																				
小計	2	3			1	2	5		1											
SP2			1																	
SP5		1	1																	
SP6																				
SP19			2	3																
SP26			2																	
SP31			2																	
SP50			1																	
SP69																				
SP73			2																	
SP94																				
SP100			1																	
SP107			1																	
SP109			1																	
SP117	1													1	1					
SP124			1											1						
SP125			1																	
SP128																				
SP135																				
SP137	1	2	1		1		3						1	1	1					
SP139		1																		
SP140			1																	
SP141			1																	
SP149																				
SP154																				
SP157			1																	
SP231																				
SP232			1																	
SP263																				
SP307																				
SP309																				
SP310																				
SP312																				
SP323																				
SP352			1																	
小計	3	23	4	1	1		29		1	5	3		2	2	4					
9480 3層			12				1	66		1	3	7		1						
9482 3層	19	32					3	281		7	6	13		1	2	3				
9680 3層								1												
9682 3層	3	13	5				1	60		1	6	5								
9684 3層	1	8						15		2	3	1			1					
9882 3層		1						2							1					
グリット不明3層		3						6		1		2								
小計	23	69	5			5	431		8	9	37	28		2	1	3				
9480 4層			6		1		1	19		1		2				2				
9482 4層			3					1												
9684 4層			3																	
小計		9		1	1	20		1		2						2				
合計	78	3	250	30	2	16	0	17	733	1	18	25	74	49	1	10	3	14	18	5

須恵器は、7~8世紀に遡る遺物が遺構・包含層問わず出土している。しかし、径の1/4以上残存するものはほとんどなく、土師器小皿・環と比べて小片が多いことから、混入の可能性が高い。東播系須恵器についてはSC1から1点出土するのみである。黒色土器はB類がやや多いが、小片が多い。瓦器は出土量が少なく、かつ小片が多い。

#### ④小結

これまでの検討から、遺構群の時期を推測する上でポイントとなる遺物の出土状況の特徴を列挙す

ると、以下のとおりである。

- ・遺構出土の貿易陶磁は、大宰府編年C期(11世紀後半～12世紀前半)がほとんどを占める。
- ・土師器は小皿・壺ともに底部切り離しはヘラ切りが主体である。糸切りには豊前型土師器が含まれる。
- ・須恵器は土師器と比べて出土量が少なく、小片が多い。
- ・滑石製石鍋では鍔付型石鍋が出土していない。
- ・瓦器椀がほとんど出土していない。

以上の特徴は、遺構を覆う包含層出土遺物でも同様の傾向を確認できる。土師器の底部切り離しはヘラ切りから糸切りへと推移するが、大宰府での糸切りの出現は12世紀前半で、以後ヘラ切りと混在し、ヘラ切りの消滅は12世紀中頃である。糸切りの導入時期については地域差があるが、肥前は大宰府を経由して導入された可能性が指摘されており(佐藤1997)、12世紀前半は遡らないと考えられる。また、滑石製石鍋は桶状石鍋・縦耳型石鍋が先行して出現し、鍔付型石鍋の出現は12世紀初頭とされている(木戸1995)。瓦器椀は大宰府では11世紀後半以降出現し、佐賀平野では肥前南部型瓦器椀が11世紀後半～12世紀初頭以降出土する(徳永1996)。以上の点を考慮すると、出土遺物からみた遺構群の時期は、貿易陶磁が示す大宰府編年C期(11世紀後半～12世紀前半)の幅に収まるとしてよい。なお、遺構内からは7～8世紀の須恵器も出土するが、土師器に比べて小片が多いことから混入の可能性が高く、遺構群がこの時期まで遡ることはできない。

## (2) 土師器の検討

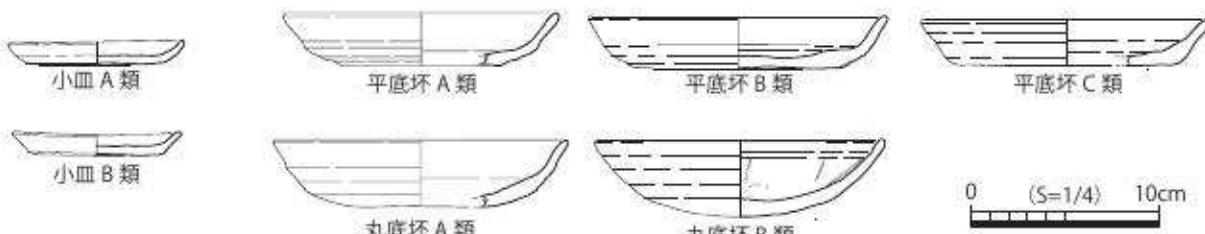
古代末～中世の遺物のうち、出土量の多い土師器の検討を行う。検討対象は、出土量が多く全体の器形が復元できるものが多い小皿・壺である。

### ①土師器の分類(第72図)

小皿は、底部から丸みを持って立ち上がり体部から口縁部が内湾気味のもの(A類)と、体部が直線的もしくは外反気味のもの(B類)に分類する。壺は底部形態で平底壺と丸底壺に分け、さらに体部中位で屈曲して口縁部が外反するもの(A類)と、底部から丸みを持って立ち上がり口縁部が内湾気味のもの(B類)にそれぞれ分類する。また、平底壺については、底部から体部が直線的もしくは外反気味に立ち上がるものの(C類)も加える。

### ②出土遺構による一括性の評価

出土遺物の一括性に関する評価は、出土遺構によって異なる。今回の調査の場合、土坑墓の可能性があるSK1・SK2および土師器小皿が重なって出土したSX1-SU1は一括性が高いが、竪穴住居跡の埋土出土遺物は周辺からの混入の可能性がぬぐえず、一括性は低い。掘立柱建物を構成する柱穴出土遺物については、柱穴掘削時期もしくは廃絶時期を示す可能性がある。第73図は柱穴の調査状況写真を時系列で並べたもので、柱穴掘削時期と廃絶時期を推測できる例である。上段はSB4-SP148で、1は半截後の残りを掘削中に柱痕を確認した写真。2は翌日に撮影した写真で、埋土完掘後に床面付近から出土した丸底壺Bの出土状況である。このことから丸底壺Bは柱痕の下から出土したことが明確であり、柱穴掘削時の時期を示す。一方、下段はSC1-SP387で、3は半截時に埋土中位で豊前型土師器が出土した写真。4は翌日撮影した半截完了後の土層写真で、やや分かりづらいが埋土は黒褐色土と黄褐色土の混合層单層で柱痕は確認できず、柱抜取り後に人為的に埋めたと考えられる。この場合、埋土中から出土した豊前型土師器は柱穴廃絶時の時期を示す。今回の調査では柱穴と抜取り痕の峻別



第72図 土師器分類図 (S=1/4)

【SB4-SP148】



1. 2015/10/21撮影。柱痕確認



2. 2015/10/22撮影。完掘後に丸底坏 B出土（第36図3）。



【SB1-SP387】



3. 2015/10/15撮影。半截途中の埋土中位で豊前型土師器出土（第29図9）。



4. 2015/10/16撮影。半截完了。  
柱痕はなく埋土は単一層。

第73図 柱穴出土遺物の二種

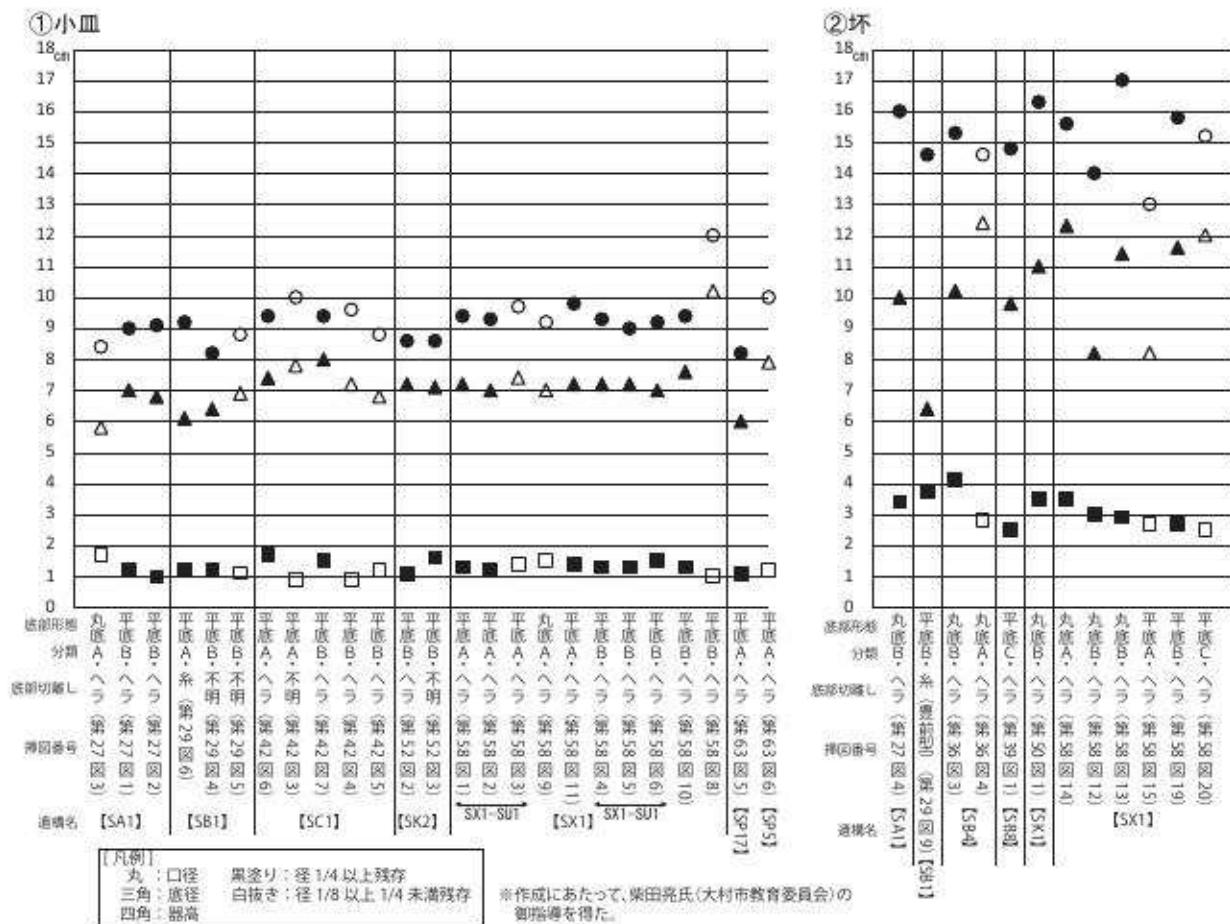
が不十分で両者の掘り分けができず、どの段階に混入した（埋置した）遺物か判断できたものは上記以外にはない。そのため、柱穴出土遺物の大半は同じ建物を構成する柱穴であっても数十年単位の時間幅を持つ可能性を考慮する必要がある。

### ③法量

法量の計測対象は、口縁部から底部まで残存し、口径、底径・胴部屈曲部径など法量を復元できる部位が1/4以上残存する土師器を主対象とし、1/4未満1/8以上のものも参考までにデータに加えた。また、出土遺構については一括性の高い遺構のみでは器種の偏りや数量不足が生じるため、一括性の低い竪穴住居跡や不明遺構、柱穴出土遺物も対象とした。対象となる土師器は小皿25点、壺12点である。

#### ・小皿(第74図①)

全体の平均は、口径9.0cm、底径7.0cm、器高1.3cmである。小皿Aと小皿Bで明確な法量の差はない。SB1の第29図6は糸切りの小皿Aだが、底径が小さく口径との差が大きい。底部から体部にかけての器壁も薄く、他と異なる。SK2の小皿は口径がやや小さく底径との差は小さい。また器壁



第74図 土師器法量分布図

もやや厚い。SX 1 の第58図8は小皿B だが、口径・底径とも大きく器高は低く、他とは器形が異なる。このほか、SA1・SB1・SP17といった柱穴出土資料でやや小型の小皿が出土していて法量にはらつきがあるが、それ以外はまとまっていて、特にSX1出土小皿は第58図8を除くとよくまとまっている。

#### ・ 坯(第74図②)

全体の平均は、丸底坯が口径15.7cm、底径10.5cm、器高3.4cm、平底坯が口径14.7cm、底径10.8cm、器高2.6cmで、口径は平底坯が一回り小さく器高も低い。出土量の多いSX 1では丸底坯・平底坯ともに大小があり、丸底坯大の平均値は口径16.3cm、底径11.9cm、器高3.2cm、丸底坯小は口径14.0cm、底径8.2cm、器高3.0cm、平底坯大は口径15.5cm、底径11.8cm、器高2.6cm、平底坯小は口径13.0cm、底径8.2cm、器高2.7cmである。SB 1出土の第29図6は糸切りの豊前型平底坯A だが、底径が小さく口径との差が大きい。

#### ④ 大宰府編年との対比

坯は、底部切り離しが豊前系の第29図9を除くと全てヘラ切りである点、丸底坯よりも平底坯の口径平均値が小さい点、体部が屈曲する平底 A 類が複数伴う点が特徴である。小皿は1点を除くとヘラ切りが主体であり、坯・小皿の法量の比較から、大半は大宰府編年X II期(11世紀後半～12世紀初頭)に対比できよう(山本1988)。ただし、SB1の柱穴出土資料に1点のみであるが底部糸切りの小皿を含む点や、SB1・SP17やSK2に口径8cm台の小型の小皿が伴うことから、これらは大宰府編年X III期(12世紀前半)まで下がる可能性がある。先述したとおり、掘立柱建物の柱穴出土遺物は建築時から廃絶時までの時期幅を考慮する必要があることから、掘立柱建物群は11世紀後半～12世紀初頭頃に建



第75図 B区遺構変遷図 (S=1/600)

てられ、12世紀前半には廃絶した可能性を指摘しておく。

## 2. B区遺構群の変遷

古代末～中世の遺構群は、出土遺物から11世紀後半～12世紀前半の中で推移したと考えられるが、柱穴の切り合いが少なく前後関係を知る手がかりは少ない。ここでは、柱筋が通る掘立柱建物群を同時期の遺構群と捉え、他の建物群を切り合いや出土遺物等に基づいて前後の時期に配して、遺構群の展開を考える。

(1) 縄文時代～弥生時代(第75図1)

縄文時代晩期の埋甕(SX2・SX3)および弥生時代後期の竪穴住居群(SC2・SC4・SC5)である。SX2・SX3は深鉢を直立して埋設したもので、SX2に隣接して検出したSX2-SU1の小型土器群は供獻土器の可能性がある。竪穴建物群は平面方形で主柱は4本柱である。

#### (2)古代末～中世①(第75図2)

竪穴建物(SC1)、不明遺構(SX1)および掘立柱建物(SB5・SB6・SB7)である。SC1はSA1西端の柱穴に切られる。複数の竪穴をもつ大型竪穴建物である。SX1は風倒木と考えたが遺物は比較的多く、埋没後に土師器小皿を重ねて供獻している(SX1-SU1)。SB5・SB6は細長い掘立柱建物群で、他の建物群とは平面的に重なることから別時期となるのは確実で、一応この段階に位置づけた。SB7は柱穴が小ぶりで、他の遺構と柱筋の通りが悪いことからこの段階とした。

#### (3)古代末～中世②(第75図3)

柵列(SA1)と掘立柱建物群(SB1～SB4・SB8)からなる。各遺構群の桁行・梁間方向の柱筋が良く通り、遺構間の主軸方向や間隔も一定で、計画的に配置された同時期の遺構群と考えられる。特に、倉庫群と考えられるSB1～SB3の総柱建物は中軸線を直線状に揃えているが、官衙関連の倉庫群と比較すると平面積は小規模である。

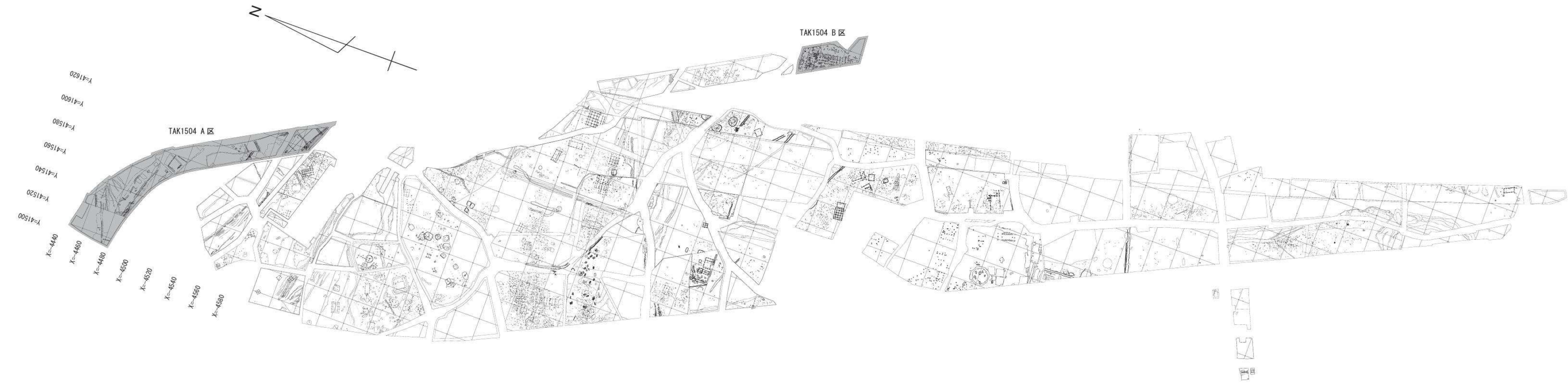
#### (4)古代末～中世③(第75図4)

土坑(SK1・SK2)、配石遺構(SS1・SS2)からなる。SK1は土師器壺を副葬する土坑墓と考えられるが、SB5を構成するSP374を切っていることから掘立柱建物群より新しく、SK1と同様に埋葬施設と考えられる遺構群をこの段階においた。

以上、遺構群の変遷について簡単に触れた。掘立柱建物群は柱穴の埋土が版築状に突き固めた痕跡ではなく、建替えの痕跡に乏しい。11世紀後半～12世紀前半の間に比較的短期間でレイアウトを変えながら推移し、その後は墓域となつたと考えられる。今回は基礎的な発掘調査データの提示に努めたが、建物群の経営主体や竹松遺跡内の居館の推移、社会背景などに触れることができなかつた。今後の課題としたい。

#### 【参考文献】

- 亀井明徳2014『中国陶磁史の研究』六一書房  
木戸雅寿1995「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社  
佐藤浩司1997「土器様相から見た大宰府と地方－中世前期の資料を中心として－」『中近世土器の基礎的研究X II』日本中世土器研究会  
柴田 亮2018「中世肥前西部地域における在地土器研究の現状と課題」『平成30年度長崎県埋蔵文化財担当者専門技術研修資料』長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター  
徳永貞紹1996「佐賀平野の瓦器碗にみる中世土器生産の一様相」『中近世土器の基礎的研究X I』日本中世土器研究会  
森 達也2015『中国青瓷の研究－編年と流通－』汲古書院  
森本朝子・池崎謙二編1986『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告V 博多－高速鉄道関係調査（2）－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第126集 福岡市教育委員会  
山本信夫1988「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎的研究IV』日本中世土器研究会  
山本信夫1990「統計上の土器－歴史時代土器の編年研究によせて－」『乙益重隆先生古稀記念論文集 九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会  
吉武学編1996『博多51－博多遺跡群第80次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第448集 福岡市教育委員会



第 76 図 竹松遺跡全体遺構配置図 (1/1500)

0 (S=1/1,500) 100m

## 報告書抄録

ふりがな	たけまついせき							
書名	竹松遺跡							
副書名	都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	V							
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第217集							
編著者名	中尾篤志							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市尾上町3番1号 TEL095-824-1111							
発行年月	西暦2019年3月							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
たけまついせき 竹松遺跡	ながさきけん 長崎県 おおむらし 大村市 おおたらじょう 沖田町 135番地 1他	市町村 42205	遺跡番号 086	32° 57' 15"	129° 56' 45"	20150528～ 20160218	5,480	都市計画 道路池田 沖田線の 建設工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
竹松遺跡	包含地	縄文晚期 弥生後期 中世  近世	埋甕 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 柵列 竪穴建物跡 土坑 土坑墓 溝状遺構 自然流路 水田跡	縄文土器 弥生土器 ガラス小玉 土師器 貿易陶磁 石帶 石製経筒 円面硯	古代末～中世の掘立柱 建物群や柵列を検出。			

長崎県文化財調査報告書 第217集  
都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書V

## 竹 松 遺 跡

平成31(2019)年3月発行

発行者 長崎県教育委員会

〒850-8570 長崎市尾上町3番1号  
TEL095-824-1111

印刷所 株式会社 昭和堂

長崎県諫早市長野町1007-2  
TEL0957-22-6000